

RIPESS

Working Paper No.54

戦前日本の経済道徳 ーその形成に関する試論ー

道徳経済一体論研究会 編

平成25年1月26日

RIPESS 麗澤大学経済社会総合研究センター

はしがき

—戦前日本の経済道徳をどのように分析するのか—

大多数の国民の豊かさを実現した経済発展は、道徳観念の深化・高進を随伴するものと考えられている。後者を伴わない前者がないように、前者なき後者も存在しないということだろう（例えば B. M. Friedman, *The Moral Consequences of Economic Growth*, 2005 年、地主敏樹他抄訳『経済成長とモラル』東洋経済新報社、2011 年）。それでは、一定の経済発展に適合的な道徳観念、なかでも経済活動の規範となる経済道徳は、具体的にどのように形成されていくのであろうか。経済成長が道徳的水準を牽引するのか（例えば上記 B. M. Friedman）、あるいは後者の向上が前者を促進するのか（例えば近年における経済成長の国際比較分析）。さらにはマクロの道徳観念に対して、個別企業における経営行動と事業の成功とを両立させて律する、いわば経営道徳はどのように形成されていくのか、等々の基本的な問題について隔靴搔痒の感がある。

日本における経済道徳の形成・展開史という観点に立った場合、膨大な渋沢栄一や報徳運動に関する研究、あるいは企業家史研究の成果は、多くの示唆に富む。しかし同時に課題も多い。なにより経済道徳の全体的な展開を鳥瞰できないことである。一つには、渋沢栄一の「義利合一」説や報徳思想は極めて重要だが、1910 年代からの急激に変化する国内外環境に対応できたのかどうか、戦間期の経済道徳論との接続がよく見えない。二つには、経済道徳のバックボーンとなる国民道徳の研究と経済道徳のそれとの関係がわからず、ここでも全体を展望できない。三つには、いわゆるエートス論も含めて企業家史研究の過半が、当然ながら、大企業の企業家・経営者を中心に進められており、広範な中小商工業家の一般的な道徳観念が見えにくい。同時に、個々の経営道徳はなんとか辿れるかもしれないが、それと一般的な経済道徳との関係が分かりにくい。

既存の研究を見る限り、経済道徳の形成・展開史という分野は、少なくとも日本では未開の分野に近いようである。たしかに歴史、哲学・思想、経済、経営、教育、政治、社会、地域、国際等々の分野に跨る学際的なテーマであり、かなりの研究能力が求められる。また、あまりにも茫漠とした捉えどころのないテーマでもあり、確固とした分析手法が必要となる。できれば近寄りたくないテーマの一つであろう。

にもかかわらず、非力な我われが、敢えてこのテーマに挑むのは、廣池千九郎という人物の迫力、その思想と実践に魅かれたからである。廣池千九郎は、道徳科学（モラロジー）という新領域を打ち立て、麗澤大学の前身となる道徳科学専攻塾を設立した人物である。その生涯は、文字通り、人心救済に燃焼し尽したものであった。その廣池千九郎の重要な提言の一つが「道徳経済一体説」（道経一体）と呼ばれるものである。これを歴史的文脈のなかに正当に位置づけたい、我われの直接的動機はこれに尽きる。

本書は、平成 22 年 5 月に佐藤政則、櫻井良樹、大野正英らが中心となって組織した「東アジアの道徳経済一体論研究会」（略称：道経研）の中間的な成果であり、論文 6 本と参考として補論 3 本を収録している。

我われの研究の目的は、戦前日本における経済道徳（論）の形成・展開を鳥瞰的に明らかにし、同時に中国と韓国との比較を通じてその位相を探ることであり、その上で廣池千九郎の「道徳経済一体説」（「道徳科学経済学」）を東アジアにおいて位置づけることにある。

具体的には、戦前日本の生涯を 1910 年頃で「明治日本」と「帝国日本」とに区分し、1910 年前後から顕著化し潮流化する国民道徳論、商業道徳論が、1930 年代にかけてどのように展開・変容したのかを、経済活動と道徳との結合のあり方という観点から考察する。これに基づいて「明治日本」を代表する渋沢栄一の「義利合一」説および報徳運動との架橋を図る。こうしたアプローチが本研究の横軸となる。さしあたり歴史展開的接近と呼んでおく。

この観点から第 1 章、第 2 章、第 3 章において、津村秀松（神戸高等商業学校）、浮田和民（東京専門学校<早稲田大学>）、田島錦治（京都大学）の概ね 1910 年代の所説を取り上げる。第一次大戦を挟む 1910 年代は、「明治日本」から「帝国日本」への飛躍の時期にあたり、想像もできなかった様々な社会現象が発生する。それを彼らは、商業道徳（津村）、倫理的帝国主義論や新道徳論（浮田）、経済学（田島）に拠って苦闘しながら把握しようとしている。

もっとも歴史展開的接近を闇雲に進めることはできない。そのため変化・変容を見極めるテーマを幾つか用意しており、本研究の縦軸を成す。

第 1 は、東アジアにおける儒教的利他思想や現代中国の経済的規範との異同である。少なくとも中韓との比較なしには、何が日本的なのかはわからない。第 5 章と第 6 章は、その準備的考察となる。

第 2 は、当時の経済学がもつ歴史的限界に留意することである。経済学もまた各々の時代の投映であり、万能ではない。さらに日本に導入された経済学でどこまで日本的現象が解けたのかも歴史的には問われる。第 3 章は、こうした問題をも射程に入れている。

第 3 は、中小企業家を含む企業家総体の社会的地位の問題であり、「賤商意識」の社会的脱却と言い換えてもいい。言うまでもなく戦前日本では軍事・政治の社会的ウェイトが極端に大きく、実業家の位置は低い。そこには官尊民卑に繋がる根強い「賤商意識」があったと考えられる。これが「明治日本」と「帝国日本」とでどのように変化するのか、あるいはしないのか。第 1 章は、こうした課題をも考慮している。

第 4 は、経済道徳と国民道徳との関係である。後者は前者のバックボーンであり、国民道徳の変容は、経済道徳のあり方も規定する。第 1 章および第 2 章は、こうした意識からも論述している。国民道徳の推移をどう辿るのかは、なかなか難しい。本研究では、教育分野において経済と道徳との関係がどのように教えられてきたのか、具体的には修身教科

書の改訂に着目することで、その責を果たしたい。第4章がまさにこの問題を扱う。

以上が、本研究の分析視角であり、課題でもある。収録したいずれの論文も、未だ道遠し、ようやくスタートラインに立ったというものに過ぎないが、メンバーの研鑽と協力のもとに、今後とも着実に研究を進めていく。

なお本研究は、平成23年度、24年度と麗澤大学経済社会総合研究センターから研究助成を受けた。高辻秀興センター長をはじめ関係各位のご理解に感謝を申し上げたい。

研究会を代表して 佐藤政則

執筆者（執筆順）

佐藤政則 麗澤大学経済学部 教授

江島顕一 麗澤大学外国語学部 非常勤講師

(公財)モラロジー研究所 道德科学研究センター教育研究室 研究助手

櫻井良樹 麗澤大学外国語学部 教授

大野正英 麗澤大学経済学部 准教授

(公財)モラロジー研究所 道德科学研究センター社会科学研究室 主任研究員

金 聖哲 麗澤大学大学院 言語教育研究科比較文明文化専攻 博士課程

陳 玉雄 麗澤大学経済社会総合研究センター 客員研究員

三井住友トラスト基礎研究所海外市場調査部 主任研究員

戦前日本の経済道徳

—その形成に関する試論—

目 次

はしがき—戦前日本の経済道徳をどのように分析するのか—	佐藤政則	i
第1章 明治末の商業道徳「頽敗」論 —津村秀松「日本ノ商業道徳ト国民道徳」(1912年)によせて—	佐藤政則	1
第2章 浮田和民の『新道徳論』から得られるもの —道徳と国家・経済—	櫻井良樹	8
第3章 大正期の経済学者における道徳経済一体思想 —田島錦治『経済ト道徳』を読み解く—	大野正英	16
第4章 修身教科書における道徳と経済についての基礎的研究 —国定教科書に焦点を当てて—	江島顕一	28
第5章 朝鮮における脱朱子学的利他思想とその義利観 —沈大允の『福利全書』を中心に—	金 聖哲	68
第6章 新聞記事から見た中国の腐敗対策の問題点	陳 玉雄	77
補論1 明治という時代と廣池千九郎	佐藤政則	84
補論2 日本がアジアで輝いていた時代—阪谷芳郎の明治—	佐藤政則	89
補論3 戦前日本の経済道徳と廣池千九郎	佐藤政則	91

第1章 明治末の商業道德「頽敗」論

—津村秀松「日本ノ商業道德ト国民道德」(1912年)によせて—

佐藤政則

はじめに

本稿は、1911年から12年にかけて展開された商業道德の「頽敗」をめぐる論議について、津村秀松「日本ノ商業道德ト国民道德」(『経済学商業学国民経済雑誌』12巻3号、1912年3月)を中心にサーベイする。そのさい1910年から12年という第一次大戦直前の経済状況に留意しながら、経済活動と道德との関係をどのようにとらえているのか、という観点から①商業道德の「頽敗」の原因、②粗製濫造問題、③商業道德と国民道德との関係、について考察する。

そもそも商業道德という用語は、いつ頃から一般に使用されるようになったのであろうか。これを確定することは困難だが、一般大衆紙である『読売新聞』では、1909年(明治42)4月16日朝刊に「商業会社監査法案」の審議報道のさいに「商業道德昂進のため」と使われている。それ以前だと検索では1885年(明治18)10月1日朝刊の[雑譚]に登場することになっているが、原文で確認すると言葉としては使われていない。もっとも1906年10月8日朝刊からは実業道德も使われ始めており、両者が併用されている。また商業道德が意味する範囲も、後述するように、論者によってかなり幅がある。

商業道德「頽敗」論の背景となる「時代状況」を理解するためには、当時、日本社会で一般的であったと思われる、「一等国」志向とその裏腹の関係にある貧乏国認識について触れておかねばならない。「一等国」志向とは、欧米水準へ果敢に挑戦し続けることを指すが、それは単なる欧米崇拜ではない。まず欧米との対等意識があり、それに基づいて欧米水準だけで自己認識を行うことである。

40年前、明治維新直後の日本が、欧米の描く観念的な世界地図に入っていたのかどうか、定かではない。入ってはいなかったと考える方が素直であろう。東アジアの数にも入らぬ小国であったにもかかわらず、常に欧米諸国との競争を意識するという、不可思議な精神構造が明治日本を一貫して突き動かしてきた¹。日清戦争後には一層明瞭となり、日露戦争後には不動のものになる。欧米諸国と比べ「商業道德ノ水準甚ダ低キ」²という国内外からの評価は、大方が妥当と受け止めるものであるだけに、何としても欧米並みを達成したいと念じたのである。

他方で、日本の国力を正当に評価する冷静な目も所持していた。例えば、雑誌『太陽』では、高橋秀臣³の調査を引用し、一戸(5人家族)一日の所得を国際比較して次のように

¹ 詳しくは、大蔵官僚である阪谷芳郎を中心にして明治をとらえた、拙稿「明治経済の再編成—日清戦後の経済構想」杉山伸也編『「帝国」の経済学』(岩波講座「帝国」日本の学知 第2巻)、岩波書店、2006年、所収を参照。また本書の補論2でもそのエッセンスを述べている。

² 河津暹「我国ノ商業道德ヲ論ズ」『国家学会雑誌』25巻5号、1911年5月、p691。

³ 進歩党、憲政党、立憲民政党系の政治家、社会運動家。著書に『日本帝国之富力』、『列国之

富力』などがある。生1864年・没1935年。『太陽』の引用については、その原典を確認できないが、おそらく高橋の著作からと思われる。

述べる⁴。

「英国民一戸一日の所得四円十一銭。仏国民同三円七十四銭。米国民同三円五十銭。独国民同二円六十八銭。伊国民同一円六十七銭。露国民同九十二銭。而して、我日本は、僅に、六十九銭にして、之を以て、一家五口を養はざるべからずとせば、我国民、所得の少くして、生計の貧しきを察知するに足る。」

これに拠れば、当時のリーディングカントリー、イギリスは日本の約6倍の水準となり、文字通り、仰ぎ見る存在であった。日本は貧しい、あまりに貧しい、この認識は強烈に時代を貫いていた。もっとも、ここでも豊かさの到達度を欧米基準で測っており、相対的な豊かさでは満足しない「一等国」志向が現れている。

商業道德「頹廢」論もまた、こうした「一等国」志向と貧乏国認識から複雑な影響を受けながら展開していく。

活発化する商業道德「頹廢」論議

1911年（明治44）に入ってから商業道德の論議が喧騒化する。時の農商務相（第二次桂太郎内閣）、薩摩閥における叩き上げの実力者でもあった大浦兼武が欧米視察から帰国し、1910年9月以降、海外貿易の伸展のためには「商業道德の頹敗」を克服すべしと盛んに発言した⁵ことが契機と言われている⁶。

もちろんこれ以前にも外国貿易に関わる商業活動については、日清戦後から様々な提言がなされていた⁷。しかし1911年には、次のように、商業道德という限定された問題設定で集中的に論説が表れている。しかも経済学（戸田、河津）、教育学（谷本）、哲学（井上）ジャーナリズム（鈴木）といった分野の錚々たる顔ぶれであった。

戸田 海市⁸「我国ノ商業道德ニ就テ」『太陽』17巻4号（1911.3）

河津 暹⁹「我国ノ商業道德ヲ論ズ」『国家学会雑誌』25巻5号（1911.5）

鈴木券太郎¹⁰「商業道德ノ攻究」『丁酉倫理会 倫理講演集』107号（1911.7）

井上哲次郎¹¹「我邦現今ノ商業道德ニ就イテ」『東亜之光』6巻8号（1911.8）

鈴木券太郎「商業道德の根本思索」『丁酉倫理会 倫理講演集』109号（1911.9）

⁴ 『太陽』17巻4号、1911年3月、p47。

⁵ 津村秀松「日本ノ商業道德ト国民道德」『経済学商業学国民経済雑誌』12巻3号、1912年3月、p33。

⁶ 「農相の視察談」『読売新聞』1910年9月5日、「大浦農相の演説」同、1910年9月20日、「農相演説の反響」同、1910年12月15日、「大浦農商務省訓示」同、1911年4月22日。

⁷ 例えば、金子堅太郎「我国農工商業の方針」『東洋経済新報』36号、38号、1896年11月5日、25日。高橋是清「高橋是清氏の外国貿易及び其金融機関談」『東洋経済新報』37号、38号、1896年11月15日、25日。同「外国貿易及び其金融機関」『東洋経済新報』107号、1898年11月。また商業道德については谷本富「商業道德ヲ論ズ」『経済学商業学国民経済雑誌』5巻5号、1908年11月がある。

⁸ とだ かいいち、経済学者、当時京都帝国大学教授、生1873年・没1924年。

⁹ かわづ すずむ、経済学・社会政策学者、当時東京帝国大学教授、生1875年・没1943年。

¹⁰ すずき けんたろう、著名なジャーナリスト・教育者、生1863年・没1939年。

¹¹ いのうえ てつじろう、哲学者、当時東京帝国大学教授、生1856年・没1944年。

谷本 富¹²「商業道德ノ基礎」『経済学商業学国民経済雑誌』11 卷 5 号(1911.11)

これらを受けて神戸高等商業学校教授の津村秀松¹³が、商業教育家として「愚見」を提示したのが、冒頭の論文である。

第一大戦が勃発する 1914 年（大正 4）まで、明治末・大正初の日本社会は明暗が混濁した複雑な状況にあった。一方では、1910 年の日韓併合により台湾、朝鮮を植民地とする「帝国」となり、東アジアでの覇権を確立した。また日露戦争を経て国家財政と民間経済の規模は一挙に巨大化し、1909 年には生糸輸出量が世界一となり、綿布の輸出高も輸入高を超えた。これらは、明治初期からの夢であった「一等国」意識を高揚させる土台となった。しかし他方では、巨額な日露戦時外債の発行が日本経済を圧迫した。中期的な外債元利払いの見通しが立たず、「一等国」仲間の金融的象徴である金本位制度の維持さえ危ぶまれるという「危機的」状況に陥っていた。

国内の経済運営をめぐるのは、上記の前者を促進する立場からより積極的な経済政策を求める議論と、後者を重視する観点から財政・金融の緊縮を志向する議論とが、各々一大勢力を擁して鋭く対立していた¹⁴。しかしながら、いずれの立場・観点も貿易収支の赤字を改善し黒字化させる点では共通しており、その方法やルートが異なっていたに過ぎない。

さらに 1910 年代においては、国内問題と国際的動向との連動関係が強くなった。ヨーロッパでの社会主義運動は国内で激化しつつあった労働争議にも強い影響を及ぼした。また 1910 年からのアメリカにおける排日運動の発生は、国内の対米世論を悪化させた。そして翌 1911 年についに始まった中国の辛亥革命は、日本の各階層の対応を多元化していく¹⁵。日本の商業道德の国内的なあり方が、即国際問題に成りかねなかったのである。

こうして輸出貿易の振興とそこでの問題克服は、直面する困難が大きいだけに、焦眉の課題となっていた。この潜在的危機感に大浦農商務相の発言が火をつけたのであろう。

商業道德の「頹廢」として、具体的に問題にされたのは、粗製濫造、不正競争、違約背信、信用取引の不振、会社重役の放漫等々であり、いずれも商工業活動において必須と見做されている規律であった。見本と納品とが違ふ、納期や支払日を守らない、詐欺まがいの商法、増収贈賄など総じて信用を失った日本の商工業のあり方が根本的に問題視された。

商業道德「頹廢」の原因はどこにあるのか

津村秀松の「日本ノ商業道德ト国民道德」に注目するのは、なにより体系的な議論になっているからであるが、併せて主に戸田、河津の論説の実質的な批判を試みているからである。

津村、河津、戸田は、西南戦争直前生まれのほぼ同年輩であり、物心がついた頃には松

¹² たにもと とめり、教育学者、当時京都帝国大学教授、生 1867 年・没 1946 年。

¹³ つむら ひでまつ（生 1876 年・没 1939 年）は、福田徳三などと共に商学を学問へと昇華させた一人と言われている。大阪屈指の有力銀行である三十四銀行の頭取・小山健三の女婿。後に実業界に転身し大阪鉄工所（日立造船）社長を務めた。『国民経済学原論』（宝文館、1908）、『商業政策』上、下（東京實文館、1915）をはじめ多数の著作がある。

¹⁴ 詳しくは、神山恒雄『明治経済政策史の研究』第 5 章、塙書房、1995 年。櫻井良樹『大正政治史の出発：立憲同志会の成立とその周辺』山川出版社、1997 年等を参照。

¹⁵ さしあたり櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』岩波書店、2009 年を参照。

形デフレ後の第一次企業勃興に遭遇する。時代を観る感覚は、安政生まれの井上、文久生まれの鈴木らとは自ずと異なっていたと思われる。この中間的存在が谷本であろう。

津村は、論文のおよそ 2/3 を事実上の戸田批判にあて、残りを河津への実質的反論にあてている。まず、戸田が挙げた商業道德「頹廢」の 3 つの「原因ナルモノ」に即して、戸田の認識が楽観的過ぎることを論じ、その上で河津の言う「粗製濫造」問題に論及する。最後に「商人ト武士道ノ関係」に触れ、「士魂商才」論を批判して、道德と経済の関係を説いている。以下、事実上の戸田・津村論争となる商業道德「頹廢」の原因からみていこう。

戸田は、商業道德「紊乱」の原因として、封建遺風の残存、取引範囲拡張への未適応、商工業の小規模性という 3 つを挙げた。

第 1 の封建遺風の残存とは、「封建時代に商業は甚だ賤視せられ、従って之に従事する町人の品性も頗る下劣であつた。故に其上に築き上げた今日の実業界は未だ全く旧時の空気を一新することが出来ない」というものである。津村もこの指摘に「大体ニ於テ」「異存ナシ」とするが、商業に従事する「町人ノミガ」「特ニ賤視」された「事由」、すなわち、なぜ商業活動だけが「俗眼」には「不合理」と「映ズル」のかを明らかにしていないと言う。

そして津村は、ともに財の価値を造り、もしくは増加させる「実業」なかでも「農ト工トハ『生産』」であるが、「商ノミ独リ『営利』」であることが根本的な「事由」とする。つまり、生産よりも営利のほうが不道德になる「危険率」は高まる。また農工業は「財ノ物質的变化」に伴う価値の増加によって利益を享受しており、これは合理的だと考えられやすい。しかし、商業は「財ノ関係的变化」（地理的・時間的变化）によって価値を高めるだけで利益を得ており、これは不合理だと見做されやすい。「農業道德や工業道德ガ非難」されず「独リ商業道德ノミ問題ニナル」のは、両者の違いを認識しない「俗眼的誤解」が横行してきたからだとする。

もっとも商業そのものにも問題はある、と言う。商業は「天下ノ財ノ分量ヲ増加セズ、唯其ノ配合ヲ宜シクスルノミ」であるから「自他」共に利益を享受できるはずである。しかしその本質が「純営利」であり、元来「投機的分子」を含んでいることから「天下ノ財ノ配合ヲ悪クシテ」でも営利を追求するような「暴挙」を起こすことがある。しかも「現代文明ノ特徴タル『キャピタリズム』ノ発達ト共ニ」「暴挙」は益々「大仕掛」となり「猛烈」になる。これが「社会的呪詛」を招いている。したがって津村は、商業とこれに従事する商人の「品性ナルモノ」が一般に「下劣」であるように見えるのには、相応の理由があると言う。

このように商業をとらえれば、「国民生活上実業は日に益々重視せられつゝあるから、此歴史的原因は遠からず消滅するであろう」とする戸田に対して、津村の結論は全く逆になる。すなわち、「商業道德ノ頹敗」は「単ニ封建時代ニ於ケル町人賤視ノ余弊ニ出ヅル」ものだけではない。今後の「交通経済組織」や『『キャピタリズム』』の発展は、ある程度商業道德の昂進をもたらすかもしれないが、それ以上に「営利ノ觀念」を「益々猛烈」にさせ「頹敗」を促していくことになる、と言うのである。

商業道德「頹廢」の第 2 の原因として戸田が示したのは、全国市場、世界市場と取引範囲が広がったことによって、従来の商工業者と得意先との親密な人的関係が維持できなく

なり、総じて徳義心が廃れた、というものであった。取引範囲拡張への未適応である。津村は、戸田の指摘は「世界共通ノ現象」を述べているだけで、「我国特有ノ原因」を明示していない。これがなければ「欧米諸国ニ比シ特ニ我国ノ商業道德下劣ナル所以」がわからないと言う。

「所謂世界的交通経済時代」に入ると「生産者ト消費者トノ距離益々遠」くなり、そこでは、両者が近接していた頃に比べて「不正行為ヲナシ易」くなる。加えて「営利ノ觀念ノミ強キ商人」が介在することになれば、不正競争が行われ不徳行為が横行する。もっともこれは「世界共通ノ現象」であり、「我国ニハ又我国特有ノ原因」がある。それは、日本の貿易が居留地貿易から始まったことによる、と津村は述べる。

幕末開港とともに始まった居留地での外国商人による貿易が、いわゆる居留地貿易である。明治に入っても大勢に変化はなく、日本貿易のかなりを居留地貿易が担っていた。津村は「明治二十六年ニ至テスラ、尚ホ輸出入総額ノ約八割三分ハ居留地商館ノ手ニ在リシ程ニシテ、現在トテモ貿易ノ半以上ハヤハリ外人ノ掌握スル所」であると述べ、この外商と外国商館の営業方針に多くの問題があったと言う。『『流れ渡り』』の外商、雑多の商品を取り扱う一攫千金的な「萬屋主義」、「一時凌ぎの風習」等の「弊風」が、日本人貿易商にも悪い影響を及ぼした、と捉えている。

このように津村は、戸田の一般論を具体化し、ただでさえ「生産者ト消費者トノ距離最も懸隔セル貿易場裡」において、日本の場合には更に「居留地商館」という「一大溝渠」を設けねばならず、外国貿易での距離は益々広がったと述べ、ここに「商業道德頹敗ノ基」を見出すのである。

第3の原因に、戸田は「我商工業の規模の一般に細小なること」を挙げた。事業規模が大きいと、一度の取引では「元本」回収ができないことから、長期取引を望み自ずと自己規制が働く。小規模だと回収可能な場合もあるので、「目前の損得に眩惑」されやすい。また発注量が多い場合には、小規模生産者を取りまとめて対応するしかなく、品質の「不整一」、見本と現品の「不一致」、納期の「不正確」などが生じやすい。さらに多数の小規模生産者によって生産される場合には、その販売には商人が介在することになり、商人によっては「一時大なる利益」を追求することもある。

津村はこの戸田の議論には「全然異議ナキ也」とし、小規模性に加えて技術的問題を加えているだけである。まとまった注文の場合は各工場（こうば）に分散させて製造するが、それらの工場では「機械ヲ用ユルコト少ク、手工ニヨルモノ多キ」ことから、「粗製スル意思ナキ」にもかかわらず、結果的に、数が揃うまで待たざるを得ず納期を守れないばかりか、品質形状等が不統一になる、とほぼ戸田や河津の所説を踏襲している。

以上のように、戸田と津村の違いが最も明瞭になるのは、第1の封建遺風の残存をめぐることであった。戸田が商人の質を問題にしていたのに対して、津村は「商人ナルガ故ニ必ズシモ不道德ナルニアラズ、商業ナルガ故ニ不道德ニ陥リ易」いのだと言う。捉えていたのは一貫して商業だったのである。

「粗製廉価」は正当な「商略」ではないのか

粗製濫造は、商業道德「頹廢」の象徴的な問題であった。上記の論説もすべてが悪しき問題として捉えていた。津村は、こうした認識に真っ向から反論する。

そもそも「粗製濫造」という「非難」の「製造元」はどこか。粗製濫造品の需要者である中国人ではなく、「西洋人」ではないか。しかも彼らは日本の輸出工業品のために厳しい競争を強いられている当事者であり、同じ供給者ではないか。そこから発せられた「非難」を一々真に受けて「少シノ吟味モナク取捨モナク」、一概に「罪我ニ在リ」と「手厳シク当業者ヲ叱責シ罵倒スル大臣」といい、「学者」といい「迂モ亦甚シカラズヤ」、と怒りを著わす。

津村は、粗製濫造と言われているものには、実は二種類あるのだと言う。一つは顧客を瞞着し一時的暴利を貪る「詐欺的粗製濫造」である。今一つはなるべく価格を低くして「廣ク顧客ノ需要ニ応ゼンガ為メ生産費ヲ節約スル」ことから生じる「商略的粗製濫造」である。

刃のない鋏、発火しないマッチ、石を入れた茶箱や缶詰、麦粉を混ぜた石鹼や砂糖などを輸出するのは、粗製濫造と言うよりも詐欺と言うべきである。しかし低廉な価格で品質が粗悪、耐久性もない、また低廉な価格で形状が不整、こうしたものは粗製濫造とは言えない。咎めるべきものでも不正なものでもない。むしろこれを咎める方がむしろ不当である。

日本の輸出工業品の多くは、中国をはじめ東洋向けである。そこで需要されるものは、低価格で体裁がいいものであり、実用よりも装飾に重きをおく傾向が強い。こうした東洋市場を「主タル得意トスル我ガ輸出工業ガ品質ノ精良ヨリモ価格ノ低廉ヲ旨トス可キハ当然ノ商略ニシテ、其ノ意味ニ於ケル粗製濫造コソ成功ノ秘訣ト謂ハザル可カラズ。」日本の輸出工業が粗製濫造の非難を浴びながら、次第に販路を拡張することができたのは、この「粗製廉売」にある。「大体ニ於テ粗品ノ需要アレバコソ粗品ノ供給起ルナリ。」「需給ノ理」を看過して粗製濫造問題は解けない。

津村は、「単ニ其ノ品質ガ欧米品ニ劣ルノ故ヲ以テ一概ニ之ヲ非難」するのは間違っており、粗製で高価は「不都合」だが、粗製であると同時に廉価であれば「不都合」はない、と言う。日本の工業が力を増し、欧米市場を相手とするような時が来れば、粗製廉売ではやっていけなくなるが、今はこれでいい、と言うのである。

「一等国」志向に侵されることなく、日本の工業力の水準を素直に評価し、その活かし方を指示した斬新な主張であった。

おわりに

津村は、商業道德を国民道德の水準から切り離して、商業道德だけを問題にすることを戒める。津村の方法的視点は、上述した「需給ノ理」である。

安政生まれの井上哲次郎は、商業には六つの不徳があると言う。粗悪な商品を売買すること、暴利を貪ること、有害無益の営業をすること、相手を騙すこと、怠慢であること、贈賄収賄をすること、である。これに対して津村は、これらは「商人ノ不徳」とのみ言えるのかどうかを問う。「贈賄スルモノアルハ、収賄スル社会ナルガ為メニアラザルカ。妓楼、待合、高利貸ヲ以テ有害無益ノ営業ヲナスモノトイフモ、之ヲ営ムモノアルハ、之ヲ要求

スル社会ナルガ為メニアラザルカ」と。

要するに津村は、商業道德というものは「特殊ノ道德」ではなく、「国民道德ノ分派派生」したものであり、一般の道德心が経済活動に現れたときに、それを名付けて商業道德と呼んだに過ぎない、と言う。したがって、「国民道德改マラザル限り、商業道德ハ改マラ」ない。「国民道德ニ於テ反省スル所ナキ国民ハ、又商業道德ニ就テ容喙スル権利ナキモノナリ」と厳しい。国民一般の道德的觀念の中に商業社会の道德的觀念も存在しているのであり、前者の向上なくして後者の向上もない、というのが津村の基本的な観点である。

最後に津村の士魂商才論批判に触れておきたい。そもそも武士道と言われるものは、「封建時代ノ食禄ニ付随シテ初テ一般ニ要求」できるものであり、生活の保障があつて初めて発生するものである。換言すれば、道德的觀念は経済的基盤の上に成り立っており、両者は不可分の関係にある。したがって商人はもとより「生活ノ保障ナクシテ生活ノ困難ノミ増進スル今ノ世ノ人心」には理解されない。必要なのは「生活ノ最低限度ヲ保障」する仕組みである。日本国民ノ道德的向上ヲ期待セントすれば、「精神的教化ニ努ムルト」とともに、「物質的慰安ヲモ与エ」なければならないのである。

以上、津村の議論を中心に 1911 年、12 年の商業道德論をみてきた。まだ津村たちは、日本社会の国際的ステータスを大きく塗り替えた第一次大戦ブームを知らない。その破綻も知らない。商業道德をめぐる論議は、第一次大戦を経て新たなステージに立つことになる。そこでは、1911 年、12 年にはまだおぼろげであつた問題や想像もできなかった全く新しい問題を抱え込むことになる。そうした商業道德論の変容が次の課題である。

第2章 浮田和民の『新道德論』から得られるもの —道德と国家・経済—

櫻井良樹

はじめに

国家と社会と道德との関係を考える際に、経済活動をどのように位置づけるかが気になっていた。特に20世紀前半の政治史を専攻する筆者にとって、対外関係における倫理問題というのは関心がある。日本は、日露戦後に韓国併合を経て本格的な植民地帝国に変貌し、その後も大陸に利権を拡大していき、満洲事変、日中戦争を引き起こした。このように大日本帝国が「領土的に」膨張していった原因について、それを社会構造史的な観点から経済的な要因に求める議論は、もはや古典的となった。最近では、むしろ軍事的危機感のようなものが日本をつき動かしていったというような理解が一般的になっている。

ひるがえって、日露戦後から大正末期までの日本には、昭和前期の日本とは異なり、「ワシントン体制」という語句で表される平和主義・国際協調的傾向が主流となる時代があった。その流れを構成した石橋湛山の「小日本主義」は、経済的観点から植民地放棄の方が日本にとって経済合理性のある対外政策であることを説いたものであった。石橋の植民地放棄論は空想的とみなされ採用されることはなかったが、日本の敗戦後、海外領土を失った日本が通商国家としてしか生き残っていけなくなった時に、はじめて実現した。石橋が、自民党総裁として短期間であったが首相となったことは、それを象徴している。

石橋は、純粋に経済論的アプローチで「小日本主義」を説いたわけであって、帝国主義を道徳的あるいは正義論的な観点から批判したわけではない。しかし同時代に、領土拡張的な帝国主義を倫理的観点から批判した人物があった。その一人が浮田和民である。浮田は『倫理的帝国主義』（1909・明治42年）という著作で、それを主張した人物である。

この語句を聞いたとき、この語句は国家道徳的な側面（＝政治学的国家論）とどこかで関係するだろうと感じた。浮田の言う倫理的帝国主義は、日本の海外膨張や発展、植民地獲得などは否定しないものの（したがってその限界性が指摘されるものの）、国際的孤立をもたらす侵略的帝国主義は否定し、むしろその中で、倫理・道徳的要素を重視し、「国際社会に通用する大国民」（姜克実）を養成しなければならないとするものであった。したがって倫理的というのは、実際には通商重視で平和的な経済関係の構築と発展を通じて影響力を高めていこうとするものであったから、現実的には石橋湛山に通ずるようなものとなる。

本稿では、600頁にも及ぶ大冊である『倫理的帝国主義』そのものではなく、そのエッセンスを凝縮し、さらにその実践論に及んでいる『新道德論』（1913・大正2年）を取り上げて、浮田の言う「新道德」がどのようなものであったのか、そしてそれが明治末期から大正前半期の現実の政治や経済・社会とどう結びついていったかを見ていきたい。

これにより、麗澤大学創立者である廣池千九郎が、大正前半期に同様に新道德体系を構想し、「因襲的道德」と「最高道德」の違いと人類に普遍的な道德があることを説き、現実社会では道徳的観点からの社会改革を説き、場合によっては帝国主義批判を行っていたことの時代的位置づけを浮かびあがらせていきたい。浮田と廣池の関係は最後に少し触れる。

1. 浮田という人

浮田和民は、たぶん現在ではあまり知られていない人物である。しかし大正時代においては、論壇の中心的人物の一人として相当に有名であった。安政6年12月28日（1860年1月20日）に熊本に生まれ、熊本洋学校に入って校長ジェーンズ大尉の教えを受けキリスト教に入信した熊本バンドの一員である。その後同志社英学校を卒業後、1892（明治25）年よりエール大学に留学し政治史を学んだ。帰国後は東京専門学校（早稲田大学）で長い期間にわたって政治学や歴史学を教えた。1909（明治42）年から1919（大正8）年まで総合雑誌『太陽』の主幹となるかたわら、大隈重信主宰の文明協会の活動にも編集長となって参加し、教育と言論活動を通じて自由主義的政治思想を説き、大正デモクラシーの一翼を担った。なおキリスト教の信仰からは、しだいに離れたものの、倫理的なものの重視は、若いときの体験が影響していたと思われる。1941（昭和16）年退職、1946年に死去した。

浮田については、没後まもなく関係者により追想録⁽¹⁶⁾が出されただけで、伝記的研究はなかったが、1970年前後から本格的な取り組みが始まり、最近では松田義男氏や姜克實氏の研究に注目が集まっている⁽¹⁷⁾。

ここで取り上げる1913（大正2）年出版の『新道徳論』⁽¹⁸⁾は、これらまでの浮田に関する研究では、焦点をおかれて論じられたことはない。それはこの本が、過去三年間の講演や雑誌に発表したものを集成したもので、体系的な記述をめざしたものではないからであろう。しかし、かなり長い序文と「序論」「国家に関する新道徳（上・下）」「家族に関する新道徳」「実業道徳」という著述が約150頁の分量でなされており、大冊の『倫理的帝国主義論』をよりコンパクトに捉え直すことが可能なこと、また本研究会の趣旨である道徳と経済・倫理の問題について、上記「実業道徳」のほかに「新商業道徳の二原則」などというタイトルの附論がつけられているからである。またこの本は第八版まで増刷され、1919年には訂正増補がなされて『訂正増補新道徳論』⁽¹⁹⁾とされるなど、一般社会に広く受け入れられ、また浮田もかなりの思い入れを持っていたものと思われるからである。

以下、序の部分と、本論のうち序論を中心に浮田の言う「新道徳」がいかなるものであるのかを確認していこう。その際に一々参照頁は記さず、引用も浮田の使っている文字を主に使用するが、要旨的な引用となるところもあることを記しておく。

2. 『新道徳論』の紹介

「新道徳の基礎」と題されている序にあたる一節では、新道徳と旧道徳の違いが語られる。旧道徳は習慣を基礎とするものであり、その習慣はおおむね宗教的権威にもとづくものであり、したがって神の命にしたがうことが善とされる。また旧道徳には政治上の権威が背景にあり、その下で道徳は社会の安寧秩序を保つことを求めるので、国法に従うことが善になる。このような旧道徳の欠陥は、消極的・形式的、保守的に流れる傾向である。

(16) 故浮田和民先生追懷録編纂委員会編『浮田和民先生追懷録』（同会発行、1948年）。

(17) 浮田については、栄沢幸二『大正デモクラシー期の政治思想』（研文出版、1981年）が先駆的研究である。その後、松田義男『浮田和民研究』（私家版、1996年）が政治思想の全般を、姜克實『浮田和民の思想史的研究』（不二出版、2003年）が倫理的帝国主義の成立までの思想史を扱い、格段に研究が進んだ。

(18) 浮田和民『新道徳論』（南北社、1913年）。

(19) 浮田和民『訂正増補新道徳論』（南北出版社、1919年）。

しかし新時代の今日、世界には多くの宗教があり、信仰から独立した道德の基礎が求められ、また立憲政体のもとでは法律の適不適を論じることができるようになり、その敵不適を論ずる標準となる新道德が必要となった。その新道德の根拠は我々の心の中に求めるべきであって、新道德の基礎・標準は人間の天性にある。ここでいう天性とは、人間が野蛮からより良いものに発達しようとすることを指し、したがって天性を基礎とするというのは、将来の人間、理想の人間を標準とすることである。さらに天性の本質は自由にあり、この自由とは、人々が肉体の欲求の奴隷にならずに、自ら物の主となっていくことである。すると新道德の目的は、人間の生命を完全にするにあるということになる。

つまり浮田は、人間一人ひとりが何らかの良きものをめざして、新時代に行使できるようになった自由を発揮して、人間生活を充実していくことが新道德であり、必要であるというようなことを述べていると思われる。その新道德は、知識によらなければならないものでもあるし、芸術と調和したものでなくてはならないということになる。

本論の序論では、さらに敷衍して新道德の必要性が語られている。具体的に旧道德というのは、欧米においてはフランス革命以前、日本においては明治維新以前の道德であり、君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友などの関係（五常の道）を基本とし、習慣に従うことが道德であった。それは団体の利益に一致し、団体の良心以上に出ることを許さないものであったから、結果として道德は保守的のものとなり、個人の自由を認めないものとなった。これに対して新道德は、進歩を要する時代の道德であり、科学的・進歩的の道德でなければならない。理想をもって道德の標準とするから、理想に近づくことが善となる。五常の道の奥にある根本に立ち入る必要があり、人格の概念を表に出す必要がある、自己目的と自由意志を尊重するものであるから、それは個々人の個人的良心をもって判断することを要求し、社会の平和秩序を破らない限り各人の自由に任せるものとなる。

特に新道德と国家との関係性について言えば、新道德も国家・家族を尊敬するのであって、最近の個人主義は、それまでの極端なる個人主義とは違うものである。法律を尊重すべきこと、納税すべきこと、兵役につくこと、公共的精神と愛国心を持つことは当然である。人間が人格を実現するためには、国家的生活が必要であるが、それは国家を絶対とするものではなく、立憲政治のもとで国家と政府の別が立っているということが前提である。立憲政治＝与論政治の下では、憲法で保障された人権・参政権を行使することが肝心なことであり、そのためには自由な討論が保障されねばならない。

新道德と家族との関係については、家族は人間社会の根本であり、特に男女は同様、夫婦も平等、親子は相互的に人格に認められる存在でなければならないとする。

そして最後に触れられるものが実業道德である。浮田は基本的には政治学者であるが、ラーネットの『経済学原理』を翻訳するなど経済問題についてもずぶの素人ではなかった。新道德について、特に実業道德という章を立てているのも、近代における経済活動の持つ重要性を認識していたからにはほかならないように思われる。日本の前近代は、士農工商という身分秩序のもとで商人は蔑まれてきたことを思い出してほしい。まだ明治維新から50年経っていなかった時期である。

浮田は、文明社会の実業は道德を基礎とするものでなければならないという。この場合の道德とは、信用のことであり、信用が経済の発展をもたらすと述べ、貨幣に対して相当な尊敬を必要とする。また労働に貴賤はなく、人格は労働によって成りたつとして、労働

を人間の品性を発達・完成させるために欠くべからざるものとする。このあたりは経済活動を、まだ賤しいとするような観念への反論であろう。つぎに商業道德や工業道德に話が及ぶが、商業道德といっても普通の道德と異なるもので、それは商業が目的の道德ではなく、人間の完成を目的とするものであるとしている。商業上において、すべての人を平等に扱わなければならないなどと述べられているが、時間を守る、内外の別を立てない（顧客に対する公平さ）、正直を尊ぶことなども挙げている。工業道德もほぼ同じである。そして最後に富の分配に関する新道德の理想が語られる。それは財産および富を社会的なものとし、富を有する人は、その富を社会のために用いなければならないとするものであった。

3. 各論における経済と道德

この『新道德論』には、新道德の一般原則を論じた本論のほかに、附論として12の文章が付けられている。これは「各般の實際問題に就て其れぞれ応用的に」所信を述べたものだという。その中に商業活動・経済活動に関する三つの文章があるので、これを見ておこう。これらも要旨を掲げるにとどまる。まず「実業上の帝国主義」という論文から。

浮田は、第一に、今日の実業は世界的なものとなり、実業を志すものは、その志の遠大なることを要するという。そのためには世界的知識の養成が必要である。第二に、今後の商工業家は、孤立の成功ではなく、一致共同、同業者全体の成功に努めるべきだということ。これは既に時代が国民単位の商工業の時代に入っているからで、国内の同業者は団結して国外の競争者にあたるべきだからである。これが実業上の帝国主義に関係していくことになる。実業上の帝国主義は、侵略的となりやすい政治上の帝国主義とは異なり平和的・四海同胞的であり、外国人と競争するからと言って、外国人を夷敵視するものではなく、他国を征服するものでもない。なるべく広く多く自国の貨物を他国に販売し、世界の人類を顧客とするものであり、世界人類の便利をめざして好尚する貨物を供給して、世界人類の幸福を増進するものである。日本は政治上の帝国主義を実行するには遅く、朝鮮・満洲以上に発展しようとすれば、国際均衡を危険にし平和を攪乱し、かえって自分自身が弊を蒙るおそれがある。もはや新たな植民地を得ることは難しいのであるから、今後日本人が海外発展をするには、たとえば移民として渡航して、その国に同化し、どのような民族とも一致協和して世界実業の発展に資し、世界人類の幸福を図る以外にない。この書物では使われていないが、これが倫理的帝国主義である。この語句を使っていないことは、事実上、浮田が帝国主義そのものを乗り越えようとしていたことを示すように感じられる。

次に「実業家の海外発展策」という論説では、さらに海外への商業的な発展が日本の発展につながることを説明している。現時の人口増加の趨勢から、日本はやがて食糧供給を外国に依存するようになる、その輸入のために生じる欠損は、第一に国内工業を盛んにし精製品を海外輸出することによって補うとともに、第二に増加する人口を海外に移民させることによって補うべきである。しばしば日本人は海外において、同化しないとして排斥されているが、これは日本人の弱点で、日本人の人類魂の少ないところに原因している。自愛自重の念に富むものは、他をも尊重し同化し親睦しなければならない。

ドイツ人に見習って、相手国を良く調査し学び、現地人とよく交際し、顧客のニーズを把握し、アフターサービスも充実するようなことが必要である。これまで日本人は、たと

えばアメリカに行けば劣等国民視されて同化できず、中国に対しては優等国民だとして中国人を蔑視して同化しなかったが、これは経済上でも国際政治上でも不利益となることが多い。このような偏狭な国民性を匡正し、世界的に発展することができる国民（「日本における日本人」ではなく「世界における日本人」）を養成することが必要である。特に南米は、日本人が移民を通じて今後発展していく望みのある地域である。また中国に対しては、移民ではなく商工業の側面において、これまでのような在留邦人を対象とするものではなく、上記のような姿勢で臨めば、まだまだ他に打ち勝って地歩を占める可能性がある。

さらに「新商業道德の二原則」では、今後の商業道德のあり方が、やはり海外との関係で論じられている。そこで浮田は、まず協同と競争が人類社会の進歩発展の二大要素であることを指摘する。次に商業に限らず、道德が協同団体内部におけるものと外部に対するものに分けられることを指摘し、その内部における商業道德が、内部における相互間競争を必要としながらも、基本的には相互に同情・助力して団体および各員の生存と進歩に努めることが必要だと述べる。したがって内部における競争は、単に自己を利するものではなく、団体を発展させるような目的を有するものであること、無制限で不正の競争は有害なことなどが指摘される。

そして外部に対する商業道德も、現在は国際貿易上守るべき不文律が存在するようになっている。この国際貿易上の武士道のようなものは、公正なる競争、契約・信義を守ること、相手の名誉を重んじることで、国内と同じである。国際貿易は、今や自から利せんと欲すれば必ず他を利せなければならなくなっているのである。国民一致して外国に当たることが必要なのだけれど、それは外国を敵視して損害を与えることではない。競争は、互いに相害する競争ではなく、互いに相利するものでなくてはならない。

浮田の議論は、近代への転換を重視するものであり、近代にふさわしい道德を必要とするものであったが、いっぽうでは、近代初期に起こった野放図な自由や競争の結果生じたさまざまな社会問題の登場と、その解決策の模索が始まったことを受けて、近代そのものを肯定しつつも、その限界性を踏まえて、それではいかにすべきかを論じたものであった。附論の三つの論説は、それを受けて、総じて言えば、日露戦後に大国の列に加わった日本人が、大国民にふさわしい品位をもって行動せよと説いたものである。

4. 大正前半期の廣池千九郎

後に『道德科学の論文』（初版、1928 年）を出版して、独自の道德体系を提唱した廣池は、大正前半期において道德をどのように位置づけ、どのような発言を社会に向かってしていたのであろうか。簡単にこの問題について触れておく。

廣池は、明治末期に天理教団と関わりを持つ。それは個人的信仰の側面も大きかったが、同教団の説く倫理が日本社会の発展に対して一定の貢献をなすものと理解し、同教団も深く関わっていた国民道德推進運動に深く関与していったことによる。斯道会という朝野の名士によって設立された団体が行う国民道德講演会の講師として活動したことは、かなり以前に指摘しておいた⁽²⁰⁾。1911（明治 44）年から 1917（大正 6）年頃までのことである。

(20) 拙稿「国民道德運動推進者としての廣池千九郎－斯道会における活動－」（『モラロジー研究』28 号、1989 年）、同「明治末期の社会・天理教・廣池千九郎－天理教入信の社会的背景－」（『モラロジー研究』25 号、1988 年）。

そのような活動の中から、廣池は新しい道德の必要性について思い至るようになる。その一つの画期に1913（大正2）年に行った帰一協会での講演があったと回顧している。帰一協会については後でも触れるが、これも日本各界の有力者（学者・宗教家）によって組織されたもので、明治末期の戊申詔書発布や三教会同政策などの影響のもとに、宗派や文明を超えた一つに帰することのできる思想を考えていこうとするものであった。

廣池は、この帰一協会での講演を、後に、その道德思想の一大要素となる「義務先行説」（極めて単純化すれば、権利は義務の遂行によって発生するもの、天賦人權説に対抗）を最初に講演・発表したものと位置づけている。やがて廣池は、大正中頃から道德の科学的研究（モラルサイエンス）をめざすようになり、それがほぼ形を現わすのが大正末期のことであった。「はじめに」のところで述べたように、廣池の道德論は、「普通道德」と「最高道德」という、道德に段階を設け、「最高道德」に世界倫理思想に通じるものを指定しようとしたところに特長があった。

浮田を論ずるにあたって、廣池を登場させるのは、両者が同じ大正時代という時代の雰囲気の中で道德を論じていたからだけでなく、幾つもの共通点を見いだすことができるからである。これは時代がそうさせたか、あるいは両者の考え方に共通する何物かがあったからである。もちろん相違点も多いが、ここでは共通点を重視して論を進める。

ここで取り上げるのは『近世思想近世文明の由来と将来』という1915（大正4）年の著作である⁽²¹⁾。ここでいう近世とは、我々が現在使用している近世（＝江戸時代）とは異なり、近代を意味する。すなわち近代文明論である。かなり長いものであるので第16章「近世思想近世文明の自覚と将来に於ける新道德の自覚」というところだけ言及しておこう。

廣池は、近世思想近世文明、すなわち近代思想・近代文明は自由平等の自覚にもとづいて起こったものであり、古代ギリシアのものに比較して個人主義的・社会主義的・自然主義的色彩が著しく強いもので、それが人類一般の利益と幸福を与えた、世界人類の一大新紀元となったとしている。しかしそれは19世紀までに、その任務を遂げたのであって、20世紀以後においては、顕著なる改革を断行しなければ、人類の進歩・幸福は停滞あるいは停止するだろうと述べる。これは自由・平等の半面には、不自由・不平等が存在しているからで、これを改善していくためには、人々は自由平等と不自由不平等を自覚しなければならないとする。自主自由を叫び、独立自尊を叫び、自我の発展を叫んで衝突や争論を避けないということが、現在の戦争（第一次世界大戦）の原因である。したがって人類の将来における新道德は、「慈悲寛大自己反省の心使ひにて、安心立命を致し、感謝生活の上に奮闘努力」することにあり、そういうような心使になることが強者となり成功することにつながるのだとしている。

ただしこの時期の廣池は、労働問題の解決のためには道德が必要であることは述べているが、商業的な成功を道德実行の結果だとか、浮田のような実業的道德について直接的に語ったものはない。『日本憲法淵源論』（1916年）⁽²²⁾の中で、経済は専門外としながらも、将来的な国際的競争は、経済的帝国主義の発展によるところが大きく、競争に勝つためには人物養成が重要だとして「人物採用の方法を、人格主義に改め」て、その人物に「充実

(21) 廣池千九郎『近世思想近世文明の由来と将来』（兵神青年会、1915年）。

(22) 廣池千九郎『日本憲法淵源論』（私家版、1916年）。

するに深遠なる学問技術、特に経済的技能」をもってすれば良いと述べていることだけを付け加えておく。

5. 浮田と廣池の関係

最後に浮田と廣池との関係である。最近までは、以下のように想像していた。1902年から廣池は、早稲田大学校外講師あるいは講師として、早稲田で東洋法制史の授業を行い、『早稲田学報』にも寄稿しているし、大隈重信の園遊会にも出席したことがあるので、どこかで会っている可能性はある。しかし廣池に宛てた書簡などは残っていないし、浮田について廣池が言及した記事も管見の限り見ていない。廣池が『太陽』を読んでいたかも不明である。知ってはいるけれども深い話をする機会があったとは言えないというようにである。

しかしそれでも両者を並べて語ることに意味があるのは、両者の議論が当時の思潮を共有していたように思えるからである。それは浮田の言う「旧道德と新道德」、廣池の提示した「因襲的道德と最高道德」という道德に段階的の区分をつける言い方、19世紀までの自由主義(近代思想)と20世紀以後のそれを異なるもの、あるいはその限界を指摘している点、ともに武断的帝国主義には批判的である点でも共通している。もちろん両者とも、明治日本の歩みについては肯定していた。

ところがこの稿を書いている最中に、資料を見直していたところ、両者が場を共有していたことが判明した。浮田は『新道德論』に「日米問題に就て、附日米交換教授及び帰一協会」という附論を付けている。これは1913年のもので、具体的にはカリフォルニア州排日土地法を扱った論説である。排日問題の原因をアメリカ人の政治上における日本に対する不信にあるとして、日本政府は日本人が現地に同化するよう移民政策を改めるべきだと述べている。そして解決のための動きとして、日米交換教授の試みを歓迎するとともに、帰一協会に言及している。この時に日米交換教授として第一号に選ばれたのは、新渡戸稲造であった。

帰一協会への期待は、その活動の中心となる成瀬仁蔵(日本女子大学創始者)の渡米や、フランシス・ピーボデー博士の来日ということを具体的には指す。浮田は帰一協会の評議員であり、5人の幹事の一人であった⁽²³⁾。帰一協会は1912年6月に設立されたもので、その規約には目的として「精神界帰一の大勢に鑑み、之を研究し之を助成し、以て堅実なる思潮を作りて一国の文明に資す」ことを掲げている⁽²⁴⁾。浮田は設立準備会で「自己の宗教的経験〔入信から離脱……櫻井註〕をあげ、諸宗教の特質は、之を認むると雖も、終には一致の帰着を得べきにあらざるか」という、宗教の理念には共通ものがあるという意見を述べている⁽²⁵⁾。その思想の方向性が、すなわち廣池の考えているものと一致する。

一度述べたが廣池の「帰一協会での講演」(1913年10月1日上野精養軒)は、「天啓について」と題したもので、具体的には天理教が新時代の宗教として優れている点を、国家との関係、その考え方が新しい道德を表しているとしたものであった。それを後に、義務

(23) 島田昌和「経営者における道德と宗教——渋沢栄一と帰一協会——」(『経営論集』第17巻第1号、2007年)。

(24) 「帰一協会の設立」(『竜門雑誌』290号、渋沢青淵記念財団竜門社『渋沢栄一伝記資料』第46巻432頁、1962年)。

(25) 「帰一協会会報」第一(同前、407頁)。

先行説の発表と位置づけたのである⁽²⁶⁾。この講演会に浮田は出席していたのである（ただし発言はなかったようである）⁽²⁷⁾。またこの会合には、会長であった渋沢栄一も参加し、「氏もこの先行説に賛成せられ」と廣池は述べている。なお阪谷芳郎も参加していた。そして同様の講演を東京帝大印度哲学会・宗教学会、京都大学・早稲田大学で行っている。

おわりに

以上、浮田の『新道德論』を手がかりにして以下のことを明らかにした。新道德という発想が、大正期に普通のものであったこと。浮田の言う新道德は、近代思想の欠陥を倫理的観点から補おうとしたものであったこと。そしてそれは廣池の考えたかと共通側面があったこと。すなわち日本国家や社会、経済の道德的な発達を願うというような思潮は、幅広く日本社会に広がっていたことが明らかになったと思われる。

(26) 廣池千九郎『最高道德の特質』（訂正3版213頁、1938年）。

(27) 例会出席者一覧の中に浮田の名前がある（「帰一協会記事一 十月例会」『渋沢栄一伝記資料』第46巻489頁）。

第3章 大正期の経済学者における道德経済一体思想 —田島錦治『経済と道德』を読み解く—

大野正英

はじめに

本稿は、京都帝国大学初代経済学部長であった経済学者田島錦治が大正9年（1920年）に出版した『経済と道德』を取り上げ、大正期の経済学者が経済と道德の関係をいかに捉えていたかを明らかにしようとするものである。

同書は、大正3年（1914）から大正8年（1919）年にかけて学会誌に発表された複数の論文を収録したものであるが、この時期は第一次世界大戦による、いわゆる大戦景気とその後の混乱の時期にあたり、日本資本主義にとって激動の時代であった。

この時期の前後に起きた主要な出来事は表1の通りである。

表1 大正3年から大正9年にかけての主要な社会事象

大正3年（1914）	第一次世界大戦に参戦
大正4年（1915）	対華21ヶ条要求、大戦景気始まる。成金の誕生。
大正6年（1917）	ロシア革命
大正7年（1918）	シベリア出兵、米騒動、原敬内閣成立、第一次世界大戦終戦
大正8年（1919）	ベルサイユ講和条約、友愛会が大日本労働総同盟友愛会に改称
大正9年（1920）	戦後恐慌始まる

この時期の日本経済は、以下のように概括できよう。明治期において富国強兵・殖産興業政策によって、軽工業を中心にして近代化を進めてきた日本経済であったが、日清・日露の両戦争を経験する中で対外債務が膨張し、経済は行き詰まりの状況を見せていた。そうした状況下で勃発した第一次世界大戦では、主戦場となったヨーロッパにおける生産、輸出の縮小と軍需の拡大が相まって、日本からの輸出が急増し、大正4年（1915年）後半から経済は活況を呈することとなった。その結果、造船業や鉄鋼業などの重化学工業が目覚ましい発展を遂げ、生産設備の急速な拡張が進められた。こうした中で、資本の集積が急速に進み、銀行資本による産業支配が促進される形で、財閥を中心とする独占資本主義体制が急速に構築されていく。また、急激な経済発展に伴い、いわゆる成金が数多く登場した時期である。

他方で、重化学工業の発展は多数の工場労働者を生み出すこととなり、都市への人口集中を促進した。しかし、インフレが続き、生活費が高騰する一方で、労働者の賃金はそれに見合うほどには上昇をしなかったために、大量に人口が増加した都市部において貧困に苦しむ下層労働者が大量に発生し、社会における経済格差が急速に拡大した。こうした都市の貧困層の実情を描いた河上肇の『貧乏物語』がベストセラーとなったのは、大正5年（1916年）のことであった。このような都市労働者の急増は、「大正デモクラシー」の風潮と相まって、労働運動の本格的な展開を招くこととなった。労働争議が頻発する中で、相互扶助的な組織だった友愛会は労働組合としての性格を強め、大正8年（1919年）には大日本労働総同盟友愛会に、さらに大正10年（1921年）には日本労働総同盟へと改称されている。

田島が『経済と道德』を刊行したのは、まさにこのような資本主義が隆盛を極める一方

で、その矛盾を露呈し始めた時期であった。河上肇は、田島が京都帝国大学経済学部招聘したのだが、河上が『貧乏物語』の中で明らかにした問題意識は、田島の『経済と道德』の底流において共通している。田島は、貧困による社会不安が、社会主義や共産主義、サンジカリズムのような過激な社会闘争へと発展することに対して、非常に強い危機感をもっていた。

田島が同書で、経済における道德の重要性を強く訴えたのは、このような社会情勢を背景としたものであり、特に大戦景気で浮かれる資本家などの社会の富裕階層に対して、強く道德的自制を呼びかける内容となっている。

1. 田島錦治の経歴と業績

ここで田島錦治の経歴と業績について、簡単に振り返っておく。田島が亡くなった昭和9年に京都帝国大学経済学会から出された『経済論叢』第39巻第2号において、田島錦治追悼の特集記事が組まれ、同僚や弟子たちからの追憶の文章が寄せられている。それらの記述を参考にしながら、田島の研究教育上の主要な経歴と業績を追っていくこととする。

田島は、慶応3年(1867年)東京に生まれ、帝国大学法科大学政治学科卒業後、同大大学院に進学し、「経済学上の社会主義」を専攻している。その後3年間ドイツに留学し、経済学を学んだ後、明治33年(1900年)京都帝国大学法科大学教授に着任した。大正8年(1919年)に法学部から経済学部が独立にあたって初代の学部長に就任し、経済学部の基礎固めにおいて中心的な役割を果たしている。昭和2年(1927年)京都帝国大学を退官の後、立命館大学学長に就任し、昭和8年(1933年)にその職を辞した後、昭和9年(1934年)に68歳で亡くなっている。

京都帝国大学においては、経済原論、財政論、経済学史などの経済学部の主要科目を担当した。門下生から多くの学者を輩出しており、特に関西の経済学界における重鎮として、長年にわたり尊敬を集めていた。若いころは主としてドイツ学派の経済学説を中心に教授しており、社会主義思想についてもかなり積極的に研究し、授業においても取り上げていた。教え子からは、経済原論の最初の授業において、経済学を「経国済民」の学と規定したとの回想が寄せられているが、これが田島の経済学に対する姿勢を明確に示している。極端な利己主義、拝金主義に走る当時の資本主義に対して、国民の公益を害し、社会の衡平を毀損することで、経済界を混乱に至らしめるとして、こうした傾向を強く批判したということであるが、こうした姿勢が『経済と道德』の基調となっている。

田島の業績をたどってみると、経済学や財政学を中心として多数の著書を出版するとともに、労働や貧困の問題を中心とした時事問題についても多くの論文を発表している。特に大正3年以降は、経済と道德の関係についての論文を多数執筆しており、経済における道德を重視する立場から労使協調を説いている。大正11年(1922年)以降は、特に中国古典に現れた経済思想についての研究を進めており、「大学」「中庸」「論語」などに見られる経済思想について『経済論叢』に次々と発表している。『道德と経済』は、このような東洋の道德思想と経済を関連付ける一連の著作の出発点に位置付けられる。

2. 『経済と道德』の全体構成

経済学者である田島が経済と道德との関係についてどのように捉えていたかについて、『経済と道德』の記述内容を詳細に見ていくこととする。まず同書の全体構成について概観する。

同書は、前述したように、京都帝国大学の学会誌である『京都法学会雑誌』ならびに『経済論叢』に掲載された論文を編集し刊行したものであるが、5つの章と附加編「孔孟の政治経済説管見」から構成されている。各章の題名は以下のとおりである。

第1章 総論

第2章 欲望及び財貨と道德との関係

第3章 財貨の消費と道德との関係

第4章 財貨の生産と道德との関係

第5章 財貨の分配と道德との関係

附加編 孔孟の政治経済説管見

第1章は、主として道德および経済それぞれの概念について独自の理解が展開されている。ここで重要なのは、人間存在について個人としての側面（小我）と社会の一員としての側面（大我）の両面で捉えている点である。このような私的側面と公的側面という図式は、本書の全体を一貫する捉え方となっている。第2章では、欲望について個人欲と社会欲の二つに大別されるとしている。この両者ともにそれを満たすために財貨が必要とされ、その議論の中で効用、余剰といった経済学上の基礎概念が説明されている。特に社会的余剰の増加が、経済上のみならず道德上も重要な意味を持つものとして論じられ、その増加の方策として、消費の適正化、生産費の節減、分配の公平化の3点が挙げられている。

第3章以下の3つの章では、消費、生産、分配のそれぞれの領域において、社会的余剰を増加させるための方策について議論されている。そこではそれらの方策の経済的側面のみでなく、道德的側面からの正当性が論じられる。特に儒教を中心とした東洋の思想が取り上げられ、それを現代の文脈に適用しようとする試みが繰り返し行われている。

第3章の消費に関しては、奢侈が議論の中心を占めており、その概念の明確化を行った上で奢侈の抑制の必要性が説かれている。第4章の生産に関しては、生産要素としての自然、労力、資本について、それぞれ道德的および経済的性質が論じられている。その上で3つの生産要素を結合して生産を行う企業について、同様に道德的および経済的側面から検討がなされる。企業の発達の利益が弊害よりもはるかに大きいことを指摘するとともに、その弊害を予防・除去するために、国民の社会道德の向上が不可欠であるとの主張がなされる。第5章の分配に関しては、報恩主義という、東洋思想に基づいた独自の視点からの議論が展開されている。そこでは分配行為の指導原理として、合衆の報恩主義が主張される。

3. 第1章「総論」の概要

以下では、各章の要点について整理して紹介していく。第1章第1節では、まず道德と経済についての田島の定義が示される。すなわち、道德とは、「人として行ふべき道、人として具えるべき徳」の総称であり、経済とは「人が外物を獲得・利用して、生存発達を遂げること」であるとされる。道德は善を目的とし、経済は利を目的としているが、

この善と利との関係が、本書全体を通じて繰り返し論じられる中心的テーマである。

ここで田島は、道徳と経済が縦糸と横糸のように密接な関係にあるが、道徳が本であり、経済が末であると明確に述べている。その上で、経済の議論においても、また現実の経済行為においても、道徳が無視され、それに反する行為が横行している状況を痛烈に批判している。特に極端な利己主義や拝金主義が、経済界をかく乱し、一部の階級の利害のみを重視する傾向を生み出している現状を憂いている。こうした風潮が、共産主義、社会主義、サンジカリズムなどの台頭を許しているとして、社会情勢に対して非常に強い危機意識を表明している。

第2節「道徳の本質」においては、荀子の説を援用しながら、社会を組織することが人間の特性であるとして、社会の秩序形成における道徳の重要性が強く主張される。この社会の秩序形成を重視する視点は、第3節の「大我及び小我」においてより明確に示される。自己を完成することは「小我を進めて大我とするにある」としているが、これは個人我を合衆我にすることであるとしている。すなわち、集団の利益、特に国民としての利益を自己の利益として捉えることの必要性を述べている。第4節「愉楽及び苦痛」では、苦痛を避け、愉楽を最大化しようとする傾向が人間の本性であり、それは経済的行為のみならず、道徳的行為にも共通する法則であると、功利主義に近い立場から論じている。その上で「恒産なければ恒心なし」との言葉を引用して、社会の道徳を維持していくためには確固たる経済的基盤が必要であり、その意味で経済政策や社会政策の趣旨は古典の教えに通じるものであるとしている。

第5節「道徳的行為及び経済的行為」では、道徳的行為が目的とする善と、経済的行為が目的とする利の間の関係について論じられている。善と利、あるいは道徳的行為と道徳的行為が融合する場合もありうるが、必ずしもそうなるとは限らないとされる。

ここで重要な点は、善と利についてそれぞれ、小善と大善、小利と大利の区別がなされ、その相互の関係を論じている点である。小善、小利とは個人的、部分的な善や利であり、大善、大利とは社会全体の善や利である。このとき、小善と小利、大善と大利は一致することが多いが、小善と大利が、あるいは大善と小利がそれぞれ衝突する場合が起こりうるとしている。社会の一部に対する道徳的行為が全体の利益をかえって害する場合や、私的利益の追求によって社会全体の善を毀損する場合である。特に後者の例として、私的独占によって貧富の格差を生じさせ、社会の均衡を破壊する場合が挙げられているが、この点は特に同書全体で問題とされる点である。

これに対して、大利は大善と必ず相合致すると主張する。言い換えると、公的な利と公的な善が究極的には一致するという視点である。具体的に言えば、経済力の発展とその成果の公平な分配は、社会の美風良俗を生み、それがまた経済の発展をもたらすとしている。つまり、社会全体にとっては道徳的要素と経済的要素が融合するとの主張がなされる。

4. 第2章「欲望及び財貨と道徳との関係」の概要

経済的要素を私的要素と公的要素に分類する見方は、経済行為の起点である欲望についても適用される。田島は、欲望に関して、自己を利するという個人欲と自己の所属する社会団体の利益を図ろうとする社会欲に分類して論じている。その主張は、以下のとおりである。

文明国民にとっての社会欲とは、社会の安寧秩序を保ち、国民全体の健康・知識・道徳の程度を高め、その経済上の福利を増進することにある。個人欲を満たすためには私有財産が、社会欲を満たすためには国有及び公有財産が主として用いられる。主として個人欲を満たすための財貨が、経済学上の交換価値を有するものとされ、金銭的価値に換算され、価格が付けられる。これに対して社会欲を満たす財貨は、それ自体の価値は保有しているが、金銭的価値を見積もることが困難な場合が多い。一般に経済学では、金銭的価格の高下をもってその価値を論じる場合が多く、したがって社会欲を満たす財貨に対しての評価が低くなる傾向があるが、それは誤りであるとしている。

以上のように、公共的価値を有する財貨が金銭的評価がつけがたいがゆえに市場において正当に評価されないと田島は主張するが、これは現代においても重要な示唆を持っている。各種社会資本、社会秩序、自然環境等の要素は、大きな利用価値をもつものの、金銭的価値に換算しがたいがゆえに、市場経済において軽視されがちであることは、現代においても、しばしば論じられる点である。

続いて、効用が取り上げられ、効用を「財貨における人間の欲望を満たす力」と定義する。この場合の欲望には、経済的と同時に道徳的なものも含まれ、したがって効用も経済的および道徳的意義を常に兼ね備えているとされる。

ここでは、限界効用、限界費用、効用逓減の法則などの経済学概念を用いて、基礎的な経済理論の説明が行われる。その上で消費者余剰と生産者余剰から構成される社会的余剰について論じられるが、田島の議論の中心は社会的余剰の実質について向けられ、そこに金銭的価値に還元できない価値が存在することを問題とする。

この議論において、経済における道徳を重視する田島の立場が明確に示される。すなわち、同一の生産活動を行い、同一の賃金を受け取る労働者であっても、その仕事に対する姿勢によって生産者余剰に差が出てくるというのである。また同量の消費を行う場合であっても、その消費が道徳的に行われるかどうかで消費者余剰に違いが生じるとしている。このように金銭的価値に見積もることができない要素が、生産者余剰および消費者余剰に含まれているというのが、田島の主張である。

このように、田島は社会的余剰の内容を金銭的価値で測ることのできないものにまで拡大しているが、これにより経済学における余剰の概念の中に道徳的要素を組み込んだ理論展開を行っている。これは明らかに一般的な経済学とは違う独特の捉え方である。このような独自の社会的余剰の捉え方にに基づき、経済活動に道徳的要素を導入することによって社会的余剰の増加が可能になるとの議論を、これ以後の章で展開していく。社会的余剰を増加させるための具体的な道徳的方策として、田島は以下の3点を挙げている。

- ① 消費を一層適宜にすること
- ② 生産の原費を節減すること
- ③ 分配を一層衡平にすること

以後の各章では、消費、生産、分配のそれぞれの経済活動における道徳との関係が、順次論じられていく。

5. 第3章「財貨の消費と道徳との関係」の概要

消費に関しては、適宜なる消費という概念が中心に置かれる。田島によれば、それは財貨の効用をなるべく多く享受することであり、言い換えれば消費者余剰をできるだけ多くすることである。

田島は、ここで消費の対象となる財貨に関して、東洋思想における「恩」の概念を導入する。文明国民であるならば、財貨を消費するに当たり、父祖の恩および社会の恩を感じるに違いないとするのが、田島の主張である。垂直的（時間的）に言えば、私たちが現在消費する財貨は、祖先の創意工夫や資本の蓄積の成果であるから、そこに父祖の恩が感じられるはずである。また水平的（空間的）に言えば、財貨は他者の生産活動の成果であり、そこには世界的な広がりが存在する。分業や交易が成立するには、国家の力が必要であり、そこに社会、特に国家の恩を感じるはずである。このように、さまざまな恩を感じることで、消費は経済的であると同時に、道徳的足り得るとされる。

具体的な消費の方法については、以下のような経済法則が適用されることが必要であると論じる。

適材選択の法則

適当な種類の財貨を適当な品質と分量で消費する

適所消費・適時消費の法則

適当な時と場所で消費する

共同消費の法則

個人単独でなく、共同で消費することで愉快にかつ廉価に消費することができる

財貨調和の法則

財貨を適合な配合によって、最大の効用を受けるようにできる

変更消費の法則

多様な財貨を適宜変更して消費することで、効用を享受する

田島によれば、これらの法則は、財貨から得られる効用を最大限に享受することにつながる。経済的であると同時に道徳的でもある。逆に、浪費、吝嗇、貪婪、奢侈などの不道徳的行為はその財貨の効用を失うものであるとされた。

以上論じた上で、特に不適当な消費の例として奢侈が取り上げられる。墨子や孔子・孟子の奢侈に関する説を紹介し、続いてロッシェル、ルロワ・ボーリユーら近代の学者の説を批判的に紹介した後、「奢侈とは、高価にしてかつ贅なる財貨の消費である」とするラブレーの定義が最も適切であると断ずる。この定義に従って、奢侈の第一の要素である「高価であること」は、獲得に多大の労力を要することであり、第二の要素の「贅沢なこと」とは、人の第一の必要に応じるものでないことであるとする。

ラブレーが悪しき奢侈として問題とするのは、その財貨を獲得するために必要となる社会的労力と、それによって満たされる社会的満足の間の不釣り合いである場合である。すなわち、贅沢品を製作するために多くの資源と労力が必要とあるにもかかわらず、それによって得られる満足が一部の富裕層に限定されてしまうことが問題とされる。これら富裕層はすでに多くの消費をしており、奢侈によって得られる追加的効用は小さくなる。

田島が奢侈を問題とするのは、このような富裕層が消費する奢侈的な財貨の生産が、社会の大多数の人々にとっての必需品に向けるべき生産力を奪ってしまう点である。何を

って贅沢とするかの基準は、時代や国、階級や個人によって異なり、相対的なものであることは認めるが、社会経済的視点から見た場合には、このように社会全体での労力とそれによる社会全体での満足との間の不釣り合いこそが問題であると、田島は指摘する。

田島によれば、贅沢品の生産が一部の人々の仕事の創出につながる場合はあるが、それは小利と小善の迎合にすぎないとされる。虚栄心や利己心のための奢侈は、経済的に言えば必需品のための生産力を奪うことになり、道徳的に言えば社会に悪い感化を与え、下層の人々の羨望や嫉妬、不満を生み、社会不安を引き起こしかねない。

こうした認識に基づき、田島は、富裕階級がその富が自己の労力よりは自然の賜物、国家の擁護、社会の恩恵に負うところが多いこと、したがって奢侈が不道徳であり、かつ不経済であることを自覚すべきであると説く。彼らが節制し、その富を納税や寄付を通じて社会的公益事業に貢献したり、投資を通じて国民経済上の必需品の生産にあてたりするならば、大利が大善と融和することとなり、それが経済的行為と道徳的行為の合致となるのである。

こうした田島の主張が、成金に代表されるような富裕層の急速な増加を背景としているのは明らかである。彼らの奢侈的な行動が、貧困にあえぐ労働者層に対して悪しき影響を及ぼしていることを強く危惧して、その自制を求める。このような田島の主張は、河上肇が『貧乏物語』の中で、貧困の解決策として富裕層の奢侈の自制を説いているのと軌を一にしている。

奢侈に対する以上のような批判は、富裕層の浪費に対する単純な道徳的批判という形をとるのではなく、経済学の社会的余剰という概念と関連付けて、社会全体の生産力と社会全体の効用とつり合いという形で説かれている点が、田島の議論の独自の点である。

6. 第4章「財貨の生産と道徳との関係」の概要

次に生産と道徳との関係に議論は進む。まず、生産の意義は、人間の力による効用の作出と増加にあるとし、それが一般に金銭的価値の作出や増加を伴うものの、必ずそうであるとは限らないと論ずる。生産費が減少する場合には、効用が増加しても価値は減少することがあり、逆に独占が存在すると、価値が増加するにもかかわらず効用が減少する場合もありうるからである。

ここで、田島は営利と生産を区別して捉える。生産が営利的生産と公益的生产（不営利的生産）に分けられるとした上で、営利的生産を中心に置きながらも、公益的生产も社会的に必要であるとしている。社会主義ではすべての生産を公益的生产とすべきであると主張するが、これは人間の性情を無視した偏った主張であると批判する。公益的生产は、主として国や地方自治体が担うものであるが、個人や私法人においても公益的生产を行なっている場合があり、これは私利と公益を融和させるという意味で、経済と道徳の合致の一つの形であるとされた。

また一方で、営利であっても生産を伴わない不生産的営利も存在する。田島は、賭博、高利貸し、空相場、買い占め、私的独占などが不生産的営利にあたり、こうした行為に対してはできるかぎり抑制して、営利的生産と公益的生产に代わらせることが必要であると説く。営利的生産と公益的生产が適当なつり合いを保ち、発達することが、経済的發展と道徳的進歩につながると主張する。

続いて、生産要素としての自然、労力（労働）、資本のそれぞれについて道徳との関係について論じていく。まず自然については、人間による「自然の征服」という西洋的な捉え方に対して正面から批判し、人間が自然に順応しながらそれを利用していくことを主張する。広大な自然の恩恵を活用することによって、経済的に進歩し、その恩恵を感じ、報恩することで道徳的に進歩すると説く。

自然から得られる資源には、補充が可能なものと補充が困難で有限なものが存在する。前者については、自然を助けて適切な管理をして自然の生産力を増加させることが、後者に対しては、濫用をつつし枯渇を防ぐよう管理することが、最もよく自然の恩恵を受けることとなり、自然に対して報恩することとなる。

このような自然の捉え方は、現在の資源・エネルギー問題を考えるためのエコロジ的な視点の先駆けとなるものである。それを東洋の視点からの西洋の自然観に対する批判となっている点は、現代においてもなお示唆的であると言えよう。

次に生産要素としての労力（労働）については、近代化が進む中で職業の自由や移動の自由、契約の自由といった労働の自由が拡大してきていることについて、田島は評価している。労働組合に対しても好意的立場に立ち、経営者組合と労働組合の間で対等な形での真正な労働協約を早期に成立させるように努力すべきであると主張する。そのためには、経営者、労働者ならびに一般社会に対する教育を進めて、労働自由の真の意義を広く認識させることが重要であると論じる。

田島によれば、労働の自由とは、平等と責任という二つの条件の下に成り立つものでなければならぬとされた。平等なき自由は強者による圧制につながり、責任なき自由は放縦につながるからである。田島が理想とする労働のあり方は、労資が対等の形で契約を結びながら、協調的行動を取ることである。経営者の側は労働者の酷使や私的独占を抑制し、労働組合の側もいたずらに労働争議に訴えない。こうして労資相互間の責任とともに消費者を初めとする一般社会に対する責任を労資双方が果たすことを、田島は強く求める。

第三の生産要素である資本についても、同様に道徳と関係した説明を試みている。

田島によれば、資本は迂回生産のための中間生産物の総体とされる。すなわち過去の生産物のうち生産の増強に充てられるものである。資本の増加は、自然及び労働の生産力を増加させ、消費を精良豊富し、経済を発展させるという経済的性質を有するが、同時に経済発展によって国民の道徳程度は高まり、勤勉儉約となることから、道徳的性質も含まれていると論じる。

田島によれば、過去の生産の成果である資本は、過去の自分や祖先の勤勉や節約の成果であることを意味している。すなわち、生産の成果の一部を節約し貯蓄することによって資本が創出され、それが自然と労働を活用することによって、さらなる資本を生むことになるからである。

田島は、資本を最もよく保存し利用するためには、生産的営利が最も有効であると考ええる。生産的営利のための資本の私有を認めることで、各人が勤勉節約に励むことになり、資本の増加と生産の拡大が循環的に生じた結果として社会全体の資本の増加をもたらすからである。ただし、公有の資本に関わる汚職や濫用、また不正競争や私的独占による生産的営利資本の悪用など、公益を害して私利を図る手段となっている場合を指摘し、すべての資本が常に善用されるとは限らないことにたいする注意を喚起している。

自然、労力、資本の3つの生産要素を適当に結合して生産に結びつけるのが、企業の役割であるとして、田島は、最後に企業の経済的・道徳的性質を論じる。

田島は、企業活動が活発化しつつあることを社会の進歩として評価するが、その一方で企業家に広く見られる過度の利益追求の傾向が大きな弊害のあることを指摘し、道徳的精神の向上を強く訴える。その論旨は以下のとおりである。

自由競争と企業の営利欲は、一面では良品を低廉に提供するものの、一方では粗製乱造という逆の結果も生む。こうした弊害を根本的に除去するためには商工業者の道徳程度を高めるしかなく、そのためには国民的道徳の高揚が必要である。またさまざまな形で企業合同が進められているが、往々にして独占的地位の誤用、悪用によって一般消費者や労働者、中小企業の利益を犠牲にし、抑圧する事態が生じている。こうした独占の濫用を防ぐためには、法律による規制や事業の公有化などの手段が講じられるべきであるが、根本的には企業者の愛他的・公益的精神を涵養することが必要である。

以上のように、田島は企業活動が社会の利益を害する場合を提示し、企業家の精神の道徳化の必要を説いているが、特に田島が深刻な問題と捉えているのが企業家と労働者の利害の衝突である。この当時、両者の対立は年々深刻の度を増し、特に労働者側の運動の先鋭化が目立つようになってきた。こうした状況に対して前時代の家族的温情主義を復活させる主張する者もいるが、田島はそれには明確に反対の立場をとる。一方では労働保護法や仲裁裁判制度などの具体的な方策の導入を提言するが、それ以上に田島が強調するのは、社会教育を推進して社会道徳の向上を図ることである。真正なる国民経済の発達、真正なる社会道徳の進歩に並行するものであるとの認識に基づいて、社会教育の力による国民の社会道徳の向上の重要性を説く。このように道徳性が向上することによって、経営者の側が労働者を厚遇すること、また労働者の側も経営者や一般消費者に対する責任を感じるようになることが重要であると、田島は主張する。経営者・労働者の道徳的自覚に基づく

7. 第5章「財貨の分配と道徳との関係」の概要

最終章にあたるこの章では、分配と道徳との関係を論じるが、特に分配における重要な仲介者としての企業の役割に議論の重点が置かれる。特に社会における階級間の分配の問題を問題として論じていくのだが、田島は、問題解決のための原理として、報恩主義という独自の主張を展開する。自然の恩、父祖の恩、社会民衆の恩、国家の恩、先覚の恩等を列挙し、財の生産と交易においてこれらの恩を受けており、分配とは、それぞれの恩に対して報いていくことであるとする捉え方を提示する。田島によれば、経済における報恩は、個別のものでなく、多数の人々が共同で行う合衆的報恩が中心的な報恩概念となる。

以下、それぞれの恩に関する田島の議論を順に見ていく。

第一に自然の恩に関しては、リカードの経済的地代の議論に対して異を唱え、土地の生産力の違いから地代が発生するとの論は認めるが、その結論として地主がその経済的地代をすべて受け取るべきであるという考えを否定する。土地の価値の上昇という利益を享受しているのは、自然の恩の他に、国家の保護や社会全体の進歩などの恩恵を強く受けているからである。地代から得る利益の一部は、租税や寄付、借地人への還元などを通じて、国家や社会民衆への報恩とすべきである。

第二に、社会民衆の恩に対する報恩に関しては、企業者と労働者の間の関係として論じ

る。企業者全体が労働者全体に対して、直接的、間接的に利益を提供することが、社会民衆に対する報恩行為となる。労働者の待遇の向上や労働者保護の法律の遵がそれにあたる。労働者の側も「徳に報いるに徳を以ってす」との精神に立って行動するとき、互いにその利益を得ることとなる。また国家の安寧につながり、一般社会の民衆にとっても大きな利益となる。このような見方から、社会主義やサンジカリズムが唱導する階級闘争に対して、田島は真っ向から否定する。階級対立は事実認識として、また当為として誤った思想であるとしている。

第3に父祖の恩、先覚の恩、国家の恩について、資本の所有や使用と関係づけて論じられる。資本は、父祖の勤勉と節約、先覚の発明や発見、国家の保護奨励によって蓄積されたものであるので、私有の資本であってもすべてが自己のものであるとは言えないとする。

第4に国家の恩に報いるための方法としては、経済的かつ道徳的行為として積極的に納税することが該当する。

このような報恩の精神に基づいて経済活動の成果を分配していくことが必要であり、それが経済的行為と道徳的行為の合致につながり、小利を大利にし、小善を大善にする道であるとして、田島は本書の結びとしている。

この章で展開されている分配論においては、報恩という視点を導入して非常に道徳的性格の強い独自の議論を展開しているが、別の見方をすれば、自然、労働、資本といった各生産要素について、その根源にさかのぼって分配を考えるという議論であるとも理解できる。いずれにしろ、特に実際に分配の中心となる企業家に対して、その意識の変革を訴えることがこの章の狙いであると言えるであろう。

まとめ

以上見てきたように、田島は西洋の経済学理論と東洋の古典思想を融合する形で、経済における道徳の重要性を説いているが、それは急速に発展する資本主義経済に対して社会道徳の進歩が不可欠であるとの強い問題意識の現われであった。経済発展に応じて社会道徳が進歩していくことが必要であり、同時に道徳的進歩がさらなる経済発展に導くという点が、彼の主張の主眼点であった。

こうした主張の背景には、現実の経済がそのようではなく、成金に代表されるような極端な利己主義や拝金主義が横行しており、道徳なき経済という状況が社会の混乱を招いているという時代状況があった。本書の執筆した動機が、資本主義経済が発展を遂げる一方で貧富の差が拡大していく社会状況に対する強い危機感にあったことは間違いない。自己利益の過度の追求に走る企業家に対して警鐘を鳴らすことを目的としたが、それを単なる道徳的説得という形ではなく、経済学理論と関係付けて論じようと試みた点に、同書の特徴がある。しかし、実際にそこで展開された経済理論はそれほど精緻なものではなく、また経済学の理論と東洋の古典思想との融合という田島のねらいも、必ずしも成功しているとは言えない。

それは典型的には、貧困問題に対する解決策に関して現れている。田島が提示しているのは、主として企業家の側の道徳的自覚の促進である。すなわち、消費に関して言えば奢侈の抑制、生産に関しては企業家の社会的責任意識の涵養、分配に関しては報恩の観念に基づいた分配の実行といった諸点について、富裕層の道徳的自覚を喚起している。具体的

な社会体制についても、経営者組合と労働組合との労働協約の促進や労働保護法の制定など、社会政策的な制度面での整備の促進についても論じるが、社会主義的な急進的改革には否定的で、あくまでも漸進的な改革を主張する。

これは、同時期にベストセラーとなった河上肇の『貧乏物語』の主張と非常に良く似ている。貧困問題の現状と原因の分析に当てられた上・中篇に続いて、「如何にして貧乏を根治し得べきか（下篇）」において解決策について論じているが、河上は「社会組織の改造よりも人心の改造がいっそう根本的の仕事である」との認識に立って、富者の奢侈廃止を重視する立場を表明した。それは贅沢品の生産の増加が、結果として生活必需品の生産の不足を招き、それが貧困の原因になっているとして、貧困を分配ではなく、生産の問題として捉えた。したがって富者が自ら進んで奢侈・贅沢を抑制することが貧困問題の解決にとって最も有効であるとした。このような『貧乏物語』における河上の解決策は、富裕層の道徳的抑制を促す人心の改造であり、これは田島の主張とも基本的に一致している。

河上の場合には、かつての教え子であった櫛田民蔵に代表されるマルクス主義経済学者側からの強烈的な批判にさらされることとなる。河上の人道主義的立場は、マルクス主義からすれば、あまりにも精神主義的・理想主義的であり、現実の資本主義の過酷さを無視しているとされた。こうした批判を受け入れた結果、河上はマルクス主義に転向することとなり、大正8年(1919年)には突然『貧乏物語』を絶版することとなった。

河上に向けられた批判は、田島に対しても該当するものである。田島の議論においても、分配に関する分析は報恩という概念を中心にして論じられており、他の議論と比べても道徳的性格が特に色濃く出ている。

しかし、田島は河上とは異なり、その後も一貫して資本主義という枠組を維持する立場に立ち、その中での道徳的啓発に重点を置いた研究を続けた。特に『経済と道徳』執筆以後は、中国古典における経済思想に関する研究に本格的に取り組んでいる。それは、社会主義的な急進的な社会変革が、社会秩序を破壊してしまうことに対して、一貫して強い危機感を持っていたことの現れであろう。『経済と道徳』の中にも、その危機意識は散見される。そして、社会主義の急速な拡大を防ぐためにも、社会の支配層の意識変革に基づく人道主義的な社会改革を漸進的に進めていくことが必要であると考え、その理論的根拠を東洋思想と西洋の経済学の融合の中に求めたのである。

この融合における中心的な主題は、「公」という意識であると捉えることができる。私的利益を超えた公的な利益を、自由な経済活動を通じて実現していくことが経済の目的として捉え、それを「大利と大善の一致」という形で田島は提示した。またそれは経済学の枠組みの中では社会的余剰の増加という形で示された。しかし、公的な利益を実現するための手段として、社会主義のような生産手段の公有という形は拒否して、あくまでも私的な営利活動を肯定し、それを促進することによって社会の発展を進めることで実現するという立場に立った。

その上で、私的利益の追求に傾きがちな企業家に対しては、道徳的な啓発教育を通じて「公」に対する意識付けが試みられる。それを説くために田島が持ち出した道徳的概念が「恩」である。経済学的には私有財産とされるものであっても、過去の人々や同時代の人々の努力や智恵が具現化されたものであるとされた。こうした捉え方は、特に分配と道徳の関係に関する最終章の議論において詳しく展開されており、企業活動の成果を広く社会の

多方面に還元していくことを報恩として捉え、その重要性を主張している。

企業が私的な存在でありながら公的な性格も帯びるというこの捉え方は、渋沢栄一や松下幸之助に見られる「企業は社会の公器である」という思想につながるものである。また、それは田島とほぼ同時代の廣池千九郎の思想においても共通して見られる。自己利益追求を是とする資本主義の中でいかにして社会全体の秩序を調和的に維持していくのか、その課題に取り組む一連の流れとして「道德経済一体思想」を捉えることができる。田島の『経済と道德』は、経済学の立場からの一つの試みであり、そこには、現在においても意味ある問いかけがなされていると捉えることができる。

参考文献

田島錦治『経済と道德』有斐閣、1910年

京都帝国大学経済学会『経済論叢』第39巻第2号、1934年8月

河上肇『貧乏物語』弘文堂書房、1917年(岩波文庫、1947年、改版、1965年)

第4章 修身教科書における道徳と経済についての基礎的研究 —国定教科書に焦点を当てて—

江島 顕一

はじめに

本稿は、修身教科書における道徳と経済についての言説を検討する上での一試論である。具体的には、1904（明治37）年から1941（昭和16）年までに五期にわたって改訂、刊行された国定修身教科書の中の道徳と経済に関する項目および内容を抽出し、整理を行った。

国定修身教科書に示された道徳と経済についての言説を歴史的に追うことは、各時期において、国家がいかなる経済的道徳を教えようとしていたのか、子どもはいかなる経済的道徳を学んでいたのかを明らかにすることである。またそれは、教育（修身教育）が、経済的道徳観念の形成にいかなる役割を果たしたのか、あるいはいかなる影響を及ぼしたのかを問うことにも繋がっていくと考える。

本稿は、近代学校教育の中で、経済的道徳がどのように提示され、教授されていたのかを分析する前提となる基礎作業の一環であるが、その延長線上には、一方で1910（明治43）年に第二期の国定修身教科書の使用とともに本格的に唱導されていく国民道徳論と、他方で1929（昭和4）年に世界恐慌によって大不況下に陥り、労働問題が深刻化していく中で昭和10年代にかけて展開される経済道徳論（とりわけ「道徳経済一体」論）との思想的関連の検討をも射程に据えている。

1. 国定修身教科書における道徳と経済に関する項目内容

本稿で取り上げる道徳と経済についての言説であるが、日本教育史研究の大家であり、教科書研究の第一人者でもある唐澤富太郎の分類法を参照した（唐澤富太郎『教科書の歴史—教科書と日本人の形成』創文社、1956年、別冊『国定教科書の内容分析表』所収、第一表「五期国定修身教科書に現われた道徳内容の分析」、第三表「五期国定修身教科書に現われた人物の階層」）。

まず、「五期国定修身教科書に現われた道徳内容の分析」によれば、道徳の実行の場となる「生活領域」が7、具体的な道徳の項目が51として以下のように分類されている。

家庭：【祖先と家】【孝行】【兄弟】【男女】【親類】【召使】

個人：【勉学】【迷信】【規律】【忍耐】【勇氣】【自信】【謙遜】【立志進取】【自立自営】
【職業】【倅約】【勤勉】【発明工夫】【正直】【習慣】【健康衛生】

学校：【学校】【師弟】

社会：【寛容】【朋友】【信義】【責任】【近所の人郷土】【敬老】【礼儀】【公正】【規則】
【博愛】【謝恩】【協同】【公益】【産業】

国家：【我が国体】【天皇】【皇室】【皇大神宮】【祝祭日】【国旗国歌】【忠義】【海外発展】
【国憲国法】【公民】【教育】

国際社会：【国交国際愛】

総括：【よい日本人】

本稿では、この中から「個人」と「社会」の「生活領域」の【自立自営】【職業】【倅約】
【勤勉】【発明工夫】【公益】【産業】の7つの項目を任意に取り上げ、これらの項目が国定修身教科書の中で、どのような内容として描かれているのかを明らかにする。

具体的な記述については、資料「国定修身教科書における道徳と経済に関する7項目の抜粋」を参照されたい。

(1) 【自立自営】

【自立自営】の項目を代表する人物は、第一期から第三期までの高学年において三度登場するアメリカのベンジャミン・フランクリンである（Ⅰ・高1・18、Ⅱ・尋6・12、Ⅲ・尋6・11、はじめのローマ数字は各期を、真ん中が教科書名の略称を、最後の数字が課数を示す。以下同様。）。フランクリンが、幼少期より刻苦勉励し、自ら様々事業を手がけて、名をあげていく生涯が紹介されている。末尾には、サミュエル・スマイルズの『西国立志編』の中にある「天は自ら助くるものを助く」などの格言が付記されている。なお、後述するように、フランクリンの人生とその功績は、【公益】の項目においても取り上げられている。

また、日本人では、第二期から第四期までの中学年において三度登場する近江の商人であった高田善右衛門である（Ⅱ・尋4・12・13、Ⅲ・尋4・13・14、Ⅳ・尋4・13）。善右衛門が、商家である家業を継ぎながら、正直、儉約、勤勉などを旨として立派な商人になっていく生涯が紹介されている。

第四期の第六学年においては、渋沢栄一が一度ではあるものの登場している（Ⅳ・尋6・8）。近世から近代まで日本の実業界を牽引した人物として、その生涯が詳細に解説されている。

(2) 【職業】

【職業】の項目は、全五期を通じて二つのみである。一つは、第一期の高等第二学年において、職業に従事し、自らの幸福はもちろん、国家の発展に寄与する重要性和職業の選択に当たっては、自身の能力と事情に応じた適当なものを選ぶことが説明されている（Ⅰ・高2・25）。

もう一つは、第四期の第六学年において、1910（明治43）年に起こった第六潜水艇の沈没事故が取り上げられている（Ⅳ・尋6・11）。艇長であった佐久間勉海軍大尉の遺書および乗員の行動から、職分を守ることの重要性が説明されている。なお、佐久間艇長は、本稿では対象外としたが、第二期および第三期の第六学年において【勇気】、第五期の第五学年において【責任】の項目においても登場している。

(3) 【儉約】

【儉約】の項目に関しては、全五期を通じて低学年において、物を粗末に扱うことを戒めることが簡潔に説明されている（Ⅰ・尋2・17、Ⅱ・尋1・10、Ⅱ・尋2・7、Ⅲ・尋1・10、Ⅳ・尋1・12、Ⅴ・ヨ上・11）。

【儉約】の項目を代表する人物は、中学年における徳川光圀と高学年における上杉鷹山である。光圀は、第二期から第四期までの第三学年において三度登場しており、いずれも城内の女中が紙を粗末に扱うのをみかねて、紙すき場へ見学を命じるエピソードが取り上げられている（Ⅱ・尋3・17、Ⅲ・尋3・17、Ⅳ・尋3・19）。なお、光圀自身日頃から裏紙を用いたり、日用の品を大切にすることが付記されている。

鷹山は、第一期から第四期までの第五学年において四度登場しており、自身の日常、そして領内に儉約を推奨したこととともに、ある側役が知人の家に宿泊した際に風呂場で立

派な襦袢を見つけ、主人に問うたところ、鷹山からの頂き物であることを聞き、その儉約ぶりに感動したことが取り上げられている（Ⅰ・高 1-12、Ⅱ・尋 5-10、Ⅲ・尋 5-8、Ⅳ・尋 5-9）。

（４）【勤勉】

【勤勉】の項目を代表する人物は、二宮金次郎、伊能忠敬の二人である。金次郎は、全五期を通じて低・中学年において五度登場しており、幼少期から両親を手伝い、村の河川の改修工事に出た際に、子どもゆえに十分な働きができず、他人の世話になったお礼に草鞋を作ってわたしたことや両親亡き後も勤勉に働いたことが解説されている（Ⅰ・尋 3-5、Ⅱ・尋 2-4、Ⅲ・尋 3-4、Ⅳ・尋 3-5）。そして菜種を自分で植え、それを油に代え、それで火をおこして本を読んでいたというエピソードも取り上げられている（Ⅴ・初 1-13）。

忠敬は、第二期から第五期までの中・高学年において四度登場しており、伊能家を継いで衰退した家業に懸命に励み、家運を再興したことと五十歳の時に長男に家を譲った後も隠居することなく、天文・暦法をたゆまず学び、最終的には七十二歳にして日本全国の測量を成し遂げ、日本地図を完成させた生涯が紹介されている（Ⅱ・尋 6-18・19、Ⅲ・尋 6-22、Ⅳ・尋 6-6、Ⅴ・初 4-9）。こうした偉業が、忠敬の勤勉の賜物であったことが「精神一到何事カ成ラザラン」という格言によって示されている。

【勤勉】の項目には、その他にも多くの有名・無名の人物が登場しており、豊臣秀吉は、第一期と第二期の中・高学年において二度登場し、信長に仕えて、城壁の修理の際に統率力を発揮したことが職務への勉励として説明されている（Ⅰ・高 1-4、Ⅱ・尋 4-6）。

江戸時代中期の絵師である圓山応挙は、第三期と第五期の中学年において二度登場し、京都の祇園に赴いて、鶏の写生に打ち込み、周囲の教えを聞き入れながら、その技能を高めて高名な絵師に成長していく生涯が紹介されている（Ⅲ・尋 4-16、Ⅴ・初 1-18）。

また、伊予の出身の農夫の作衛兵は、第三期から第五期までの中・高学年において三度登場し、幼少期から家の借財を返すために懸命に働き、成人して借財を完済した後に、村の下田を買い上げ、手をかけて上田に仕上げ（Ⅲ・尋 5-13、Ⅳ・尋 5-8）、後に自ら税を納めたことが解説されている（Ⅴ・初 3-5）。

その他には、第一期の高等第二学年において「僥倖」との題目で、投機などの成功によって、莫大な富を得る者などがあるが、本来は堅実に職務に務め、正しい生活をするのが人の務めであると説明されている（Ⅰ・高 2-26）。

また、第四期の第二学年において「なまけるな」との題目で、いわゆるアリとキリギリスの寓話が取り上げられている（Ⅳ・尋 2-11）。

（５）【発明工夫】

【発明工夫】の項目では、低学年においては、遊び道具に工夫を凝らした子どものエピソードがいくつか取り上げられている（Ⅲ・尋 2-23、Ⅳ・尋 2-3、Ⅴ・ヨ下-5）。

【発明工夫】の項目を代表する人物は、井上伝と田中久重の二人である。伝は、第一期から第四期を除いた第五期までの中・高学年において四度登場しており、幼少期から織機に努め、試行錯誤を経て、久留米絣として世に広めた功績が紹介されている（Ⅰ・高 2-24、Ⅱ・尋 6-16、Ⅲ・尋 6-10、Ⅴ・初 2-18）。

久重は、第四期と第五期の中学年で二度登場しており、伝の近所の少年であり、手先の

器用さで、伝の機織りに改良を施し、絵柄のある絣の作成への貢献が紹介されている（Ⅳ・尋 6-23、Ⅴ・初 2-19）。

以上に加えて、第五期の第三学年において、楠正成が一度登場している（Ⅴ・初 1-14）。また、第四期の第四学年において種痘法を開発したジェンナーが登場している（Ⅳ・尋 4-8）。なお、ジェンナーは、本稿で対象外としているが、第一期、第二期、第三期では【自信】、第五期では【立志進取】の項目でも登場しており、全五期を通じて登場する唯一の外国人であり、第五期において登場する唯一の外国人でもある。なお、その内容である種痘法の発明にいたる際に、自身の息子に牛痘を接種させたエピソードは、周知の通り誤謬である。

（６）【公益】

【公益】の項目では、全五期を通じて低学年においては、公衆において人に迷惑かけてはならないことが簡潔に説明されている（Ⅰ・尋 1-21・25、Ⅰ・尋 2-26、Ⅱ・尋 1-24、Ⅲ・尋 1-24、Ⅳ・尋 1-18、Ⅴ・ヨ下-15）。

中学年から高学年においては、天災や人災によるインフラの整備、改良などの公共事業に積極的に取り組んだ地方の人物が数多く登場している。その名を挙げれば、何某佐太郎（Ⅰ・尋 3-26、Ⅱ・尋 3-26、Ⅲ・尋 3-25、Ⅳ・尋 3-25）、角倉了以（Ⅰ・尋 4-19）、栗田定之丞（Ⅱ・尋 4-24、Ⅲ・尋 4-25、Ⅳ・尋 4-19）、古橋源六郎（Ⅲ・尋 5-5）、布田保之助（Ⅳ・尋 5-7、Ⅴ・初 3-6）、岩谷九十老（Ⅴ・初 4-10）などである。なお、徳川吉宗も入っている（Ⅰ・高 2-22）。また、国外での活動であるが、明治三十年代にフィリピンに入植した日本人たちの生活を助けたダバオ開拓の父といわれる太田恭三郎の生涯が紹介されている（Ⅴ・初 4-13）。

こうした中で、第一期から第四期までの高学年において四度登場するのがフランクリンである（Ⅰ・高 1-20・21、Ⅱ・尋 6-14、Ⅲ・尋 6-12、Ⅳ・尋 6-9）。先述したように、フランクリンは【自立自営】の項目でも登場していたが、それに続きフランクリンが成し遂げた、消防法の整備、新聞、暦本の発行、学校図書館、病院の建設、ストーブ、避雷針の発明といった数多の功績が紹介されている。

若干異色であるのは、第四期の第五学年において登場する乃木希典である（Ⅳ・尋 5-4）。乃木が、ある時電車に乗って移動している場面で、車内で人から席を譲られた際に、自身の外套が雨で濡れていたため、丁寧にお礼を述べて、腰掛けなかったエピソードが取り上げられている。社会が進展する中で数多くの公共の乗り物や施設ができていくが、そうした際に公衆のマナーやルールを守らなければならない（本文中ではそれを「公德心」と表現）ことが説明されている。

（７）【産業】

【産業】の項目では、第一期から第四期までの高学年において上杉鷹山が四度登場している（Ⅰ・高 1-13、Ⅱ・尋 5-11、Ⅲ・尋 5-9、Ⅳ・尋 5-10）。先述したように、鷹山は【儉約】の項目でも登場していたが、それに続き産業を興そうと荒地を開墾して農業を営もうとする者に家作料や種粃を与え、租税を免じるなど農業を推奨するとともに、自分の衣食の費用を儉約して、養蚕の事業に充て、女子に職を与えて、米沢織という織機産業への寄与が紹介されている。末尾には、上杉の有名な「なせばなる なさねばならぬ何事も ならぬは人のなさぬなりけり」の言葉が付記されている。

2. 国定修身教科書における道徳と経済に関する項目内容に登場する人物

次に「五期国定修身教科書に現われた人物の階層」によれば、階層は、まず国別として、日本、東洋、西洋の3つから成り（それに加えて「その他」）、さらに社会階層として、皇室、為政者、官僚役人、実業家、勤労者、文化人、武人という7つに、さらに文化人は学者、芸術家、社会教化社会事業家の3つに、武人は武人武士、軍人の2つにそれぞれ分けられている。なお、東洋は、君主、政治家、学者の3つ、西洋は、政治家、実業家、学者、社会事業、軍人の5つに分けられている。

以上の分類に基づいて、上段で整理した7つの項目内容において登場する人物の階層を整理すると、次の通りとなる。

日本

皇 室：

為政者： 豊臣秀吉、徳川光圀、徳川吉宗、上杉鷹山

官僚役人： 何某佐太郎、岩谷九十老

実業家： 高田善右衛門、渋沢栄一

勤労者： 何某作衛兵

文化人

学 者： 伊能忠敬

芸術家： 圓山応挙

社会教化社会事業家： 二宮金次郎、井上伝、栗田定之丞、田中久重、角倉了以、
布田保之助、太田恭三郎、古橋源六郎

武人

武人武士： 楠正成

軍 人： 乃木希典、佐久間勉

東洋

君 主：

政治家：

学 者：

西洋

政治家：

実業家： ベンジャミン・フランクリン

学 者： ジェンナー

社会事業：

軍 人：

その他：

まず、7つの項目内容で登場する人物は、合計で24人である。その内、人物が全く登場しない階層は、日本の皇室と東洋の君主、政治家、学者、西洋の政治家、社会事業、軍人である。この中で、渋沢、太田、古橋、乃木、佐久間を除く人物は、基本的に江戸時代に活躍して、名を残した人物である（例外としては、豊臣秀吉、楠正成）。また、社会教化、社会事業家の人物に顕著のように、地方出身者も多く登場している。

3. 項目および人物に関する再整理

以上の整理を踏まえ、項目内容と登場人物についてあらためて整理したい。

はじめに項目について、数量的な結果を整理しておく。各項目数を集計したものが、下記の表である。（なお、各期の総項目数は、第一期：163、第二期：161、第三期：159、第四期：162、第五期：120、である）

	自立自営	職業	儉約	勤勉	発明工夫	公益	産業	計
第一期	3	1	2	5	1	8	2	22
第二期	3	0	4	4	1	4	1	17
第三期	3	0	3	4	2	5	1	18
第四期	3	1	3	4	3	6	1	21
第五期	1	0	1	5	4	4	0	15
計	13	2	13	22	11	27	5	93

※本稿では、初等教育六カ年を対象とした。したがって、次のような処理を行った。

第一期は、尋常小学四カ年に、高等小学二カ年を加えた六カ年で算定した。また、第一学年は、教師用に依拠した。

第五期は、国民学校初等科六カ年で算定した。

一つの項目が二つの課にわたっている場合には、それぞれを1として算定した。

次に登場人物について、その登場頻度の合計を高位から順に整理しておく。

8回：上杉鷹山【儉約】4、【産業】4

7回：ベンジャミン・フランクリン【自立自営】3、【公益】4

6回：

5回：二宮金次郎【勤勉】

4回：伊能忠敬【勤勉】、井上伝【発明工夫】、何某佐太郎【公益】

3回：高田善右衛門【自立自営】、徳川光圀【儉約】、何某作衛兵【勤勉】、
栗田定之丞【公益】

2回：豊臣秀吉【勤勉】、圓山応挙【勤勉】、田中久重【発明工夫】、布田保之助【公益】

1回：渋沢栄一【自立自営】、佐久間勉【職業】、ジェンナー【発明工夫】、
楠正成【発明工夫】角倉了以【公益】、古橋源六郎【公益】、岩谷九十老【公益】、
徳川吉宗【公益】、太田恭三郎【公益】、乃木希典【公益】

おわりに

本稿では、唐澤の分類を参照して、【自立自営】【職業】【儉約】【勤勉】【発明工夫】【公益】【産業】の7つの項目を取り上げ、これらの項目が具体的に国定修身教科書の中で、どのような内容として記述されているのか、さらにそこにはどのような人物が登場していたのかを明らかにしてきた。もっとも、項目の観点からすれば、上記の7つの項目以外にも取り上げるべき項目（例えば、【立志進取】など）を吟味することが必要であり、また人物の観点からすれば、人物の階層から取り上げるべき人物（例えば、「実業家」など）を見

出すことも必要であろう。そうした基礎作業の蓄積の先には、筆者の分析枠組みを設定し、それに基づいた考察があらためて要請されよう。

また、本稿のテーマを究明するには、教師用の修身書や、各期の「編纂趣意書」の検討も必須の課題となるであろう。さらには、初等教育における修身科以外の学科目の教科書における道徳と経済についての言説の検討、また、中等教育における修身教科書の分析、そして、師範学校や実業学校などの各種学校での道徳と経済についての教育動向の把握なども挙げられる。これら多くの課題については、今後順次稿をあらためて論じていきたい。

資料について

典拠『復刻 国定修身教科書』大空社、1990 年

改行および読み仮名は省略した。

旧字体は適宜新字体に改め、仮名遣いは原文のままとした。

課数および題目の横に【 】で、唐澤の分類表記を付した。

資料 国定修身教科書における道徳と経済に関する 7 項目の抜粋

第 I 期

尋常小学修身書 第一学年 (教師用)

第二十一 人の妨をするな【公益】

第二十五 人に迷惑をかけるな【公益】

尋常小学修身書 第二学年

ダイ十七 モノヲソマツニアツカフナ【儉約】

コノコガ、ベントーバコヲナゲダシタノデ、コハレマシタ。「モノヲ、ソマツニ、アツカッテハナリマセン。」ト、ネエサンガ、ヲシヘテイマス。

ダイ二十六 ヒトニメイワクヲカケルナ【公益】

コノコガ、ミチバタニ、ゴミヲステヨウトスルヲ、オトウサンガトメテイマス。セケンノヒトニ、メイワクヲカケテハナリマセン。

尋常小学修身書 第三学年

だい五 きんべん(勤勉)【勤勉】

金次郎は、十二のとき、どてのふしんにでました。力がたらなので、他の人のせわになりましたから、わらちをつくって、その人たちに、おくりました。その人たちが、やすんでいるあひだにも、じぶんは、やすまずに、はたらきました。

だい七 じえい(自営)【自立自営】

金次郎が、じぶんの家に、かへりましたとき、その家は、あれはてていました。金次郎は、それを、じぶんで、なほして、すみしました。金次郎は、せいだして、はたらいて、しまひ

には、えらい人になりました。

だい二十六 こーえき（公益）【公益】

佐太郎の村に、どばしがありましたが、たびたび、そんじて、村の人たちが、なんぎをしました。佐太郎は、人人とそーだんして、それを石ばしに、かけかへました。それから、こはれることもなく、村の人たちは、たいそー、よろこびました。よのためになることをするのは、人のつとめであります。

尋常小学修身書 第四学年

第九 きんべん（勤勉）【勤勉】

高田善右衛門といふ人は、十七のとき、じぶんではたらいて、家をおこさうとおもひたち、父にたのんで、わづかのかねをかりました。それをもとでにして、とーしんと、かさとを、しいれて、とほいところまで、あきなひに、でかけました。善右衛門は、けはしい山や、さびしい野原をこえ、雨風の日にも休まず、ながい間、せいだして、はたらきましたので、たいそー、かねをまうけました。それから、そのかねで、呉服をしいれて、売りました。いつも、正直で、けんやくで、あきなひに、べんきよーしましたから、たいそー、りっぱな商人になりました。なにごとに、ほねををしまずに、はたらくと、りっぱなしごとができます。

第十九 こーえき（公益）【公益】

京都の西に、大堰川といふ川があります。ながれもたひらかでなく、川の中に、多くのいはがあって、舟をかよはすことができませんでした。三百年ほど前に、角倉了以といふ人が、はじめて、この川をひらいて、舟のかよふよーにしました。これには、いろいろと、くふーして、しとげたのであります。その後、了以は、また、富士川の川ざらへをいひつけられ、それをもしとげました。また京都の賀茂川にそって、高瀬川といふ川をほりわったので、それで、大坂と京都とのうんそーの便利が、よくなりました。これらは、すべて、こーえきを、はかったのであります。

高等小学修身書 第一学年

第四課 職務に勉励せよ【勤勉】

秀吉は、信長につかへし後も、人にすぐれて、働きたり。信長、ある日、あけがたより、狩にいでんとし、「誰かある。」と呼びしに、秀吉は「藤吉郎、これにあり。」と答へて、たちいでたり。ある年、清州の城の塀、百間ばかりも、くづれしことあり。信長、部下のものにいひつけて、これをふしんせしめしに、二十日ばかりをすぐれども、工事はかどらず、よって、あらためて、秀吉にその役を命じたり。秀吉は人夫を十組にわかち、組組に工事をわりあてて、いそがししかば、翌日になりて、のこらず、できあがりたり。秀吉は、つねに、かく、職務に勉励せしかば、信長の信用をえて、しだいに、おもくもちひらるるにいたれり。

第十二課 儉約【儉約】

鷹山は令をいだして、儉約をすすめしが、みずから、まづ、これを実行せんとて、大いに、その衣食の料などを減じたり。鷹山の側役のものの父、ある時、いなかに行きて、したしき人の家にとまり、ふろに入らんとして、着物をぬぎしが、粗末なる木綿の襦袢のみは、ていねいに、屏風にかけておきたり。主人、あやしみて、そのわけをたづねしに、「この襦袢は藩主のおめしさげにて、わが子がたまはりしを、さらに、もらひしものなり。それゆえ、ていねいに、取扱ふなり。」と答へたり。主人はこれをききて、ふかく、鷹山の儉約に感じ、その襦袢を示して、家内の人人をいましめたり。

格言 塵モツモレバ、山トナル。

第十三課 産業をおこせ【産業】

鷹山は産業をおこさんとて、新に、あれ地を開きて、農業をいとなまんとするものには、家作料、種籾などを与へ、三年の間、租税を免じたり。また、村村に馬をかはせ、馬市を開きなどして、農業のたすけとしたり。鷹山は、また、養蚕をもすすめしかど、はじめの間は、桑を植うることあたはざるもの多かりしかば、わが衣食の料の中より、年年、五十両づつをいだし、その中にて、桑の苗木を買ひ上げて、わかちあたへ、また、新に、桑畑を開くものには、金を貸して、その業をはげましたり。そのうへ、奥向にて、蚕をかひ、女中に絹を織らせなどしたり。鷹山は、また、女子にも職業を与へんとて、越後より機織にたくみなるものをやとひ入れて、その法を教へしめたり。これ、世に名高き米沢織のはじめなり。

第十八課 自立自営【自立自営】

フランクリンは北アメリカの人にして、自立自営の心に富みたりき。その家、貧しくして、兄弟多かりしかば、十歳のとき、学校をしりぞき、家業のてだすけをなしたり。されど、学問をこのむ心深く、小使錢をたくはへて、書物を買ひ、すこしのひまにも、これを読みたり。十二歳のとき、兄の家に行きて、印刷業の職工となり、よく、働きて、やがて、一人まへの仕事をなすにいたれり。その間にも、暇あれば、書物を読むことを怠らざりき。十六歳のとき、兄の家をいでしが、生活の費用を儉約し、書物を買ひ、時を惜みて、これを読みたり。されば、よく、その職業をはげみし間にも、学問をなすことを得たり。

格言 困難ハ最良ノ教師。

第二十課 公益【公益】

フランクリンは、その住みたるフィラデルフィヤ市中の人人と相談し、金を出しあひて、図書館をたて、大いに、公衆の便益をはかりたり。その後、また、日常の教となるべき格言を書き加へたる暦を発行せしかば、家に一冊の書物を有せざるものも、これによりて、有益なることがらを知るを得たり。フランクリンは、また、新聞紙を発行したり。そのころの新聞紙には、人の名誉をきずつくるがごときことをするもの多かりしが、フランクリンが発行せし新聞紙は、すこしも、さることなく、世を益することのみをのせたり。

第二十一課 公益（つづき）【公益】

そのころは、消防の法、なほ、いまだ、そなはず、火事あるごとに、多くの家焼けて、損害、おびたばかりき。フランクリンは有志のもの三十人と相談して、消防組をつくり、器械をそなへつけて、消防のことに力をつくし、フィラデルフィヤ市中の人人に、大いなる利益を与へたり。また、市中の道路、はなはだ、あしくして、通行に不便なりしかば、フランクリンはこれを改良する方法をかんがへ、また、街灯を、家家の前に、たつことをもすすめれば、通行人は、これがために、大いなる便利を得たり。フランクリンは、これのみならず、金をあつめて、学校をたつなど、つねに、市民の利益をはかれり。

第二十二課 勤労【勤勉】

人、ややもすれば、勤労をいとひて怠惰に流ることあれども、これ心得ちがひなり。人、もし、何事をもなさずして、なまけくらすときは、身体も弱くなり、心も楽しからざるべし。また、りっぱなる仕事は、勤労によらざれば、なしとぐべからず。人は、しょーがい、勤労をいとふべからず。まして、これより、志を立て身をおこさんとするものは、早くより、勤労の習慣をつくるべし。

格言 勤労、門ヲ出ヅレバ、貧苦、窓ヨリ入ル。

高等小学修身書 第二学年

第九課 自立自営【自立自営】

人は、成長の後、みな、業ををさめ、家をととのへざるべからず。これ人たるの務めなり。されば、幼きときより、わが力にかなふことは、みずから、これをなすの習慣をつくるべし。幼きときより、かかる習慣をつくりおかば、成長の後も、よく、自立して業ををさめ、家をととのふる人となり得べし。かかる自立自営の民多き国はさかえ、少き国は衰ふ。

格言 天ハ、ミヅカラ、タスクルモノヲ助ク

第二十二課 公益【公益】

徳川吉宗は公益に心を用ひし人なり。当時、江戸の市中に火災多く、人人の難儀、少からざりしが、伊賀蜂郎次といふもの、人家の板葺、茅葺を禁じて、瓦葺になさんことを建言せり。吉宗は、蜂郎次が、世のために、心を用ふことの深きをほめて、その説を用ひ、かつ、火災にかかりしものには、金を貸して、瓦屋根をつくる費用を助けたりき。吉宗、また、辺鄙の地方にては、医薬にとぼしかるべしとて、医書をつくらしめて、これをわかちあたへ、また、ある医師の議をいれ、江戸に施薬院を設けて、貧民の、病にかかりて、薬価に苦めるもの、看護人なきものなどに治療をうけしめ、食物、衣服、臥具等をも与ふることとせり。

第二十三課 産業をおこせ【産業】

吉宗は、つねに、人民の利益を重んじ、国産をふやさんことをはかりたり。そのころは、わが国人、砂糖を製造することを知らざりしかば、外国品のみを用ひたり。吉宗は、かかる日用品を外国に仰ぐは、不利なりとて、甘蔗の栽培法、砂糖の製造法をたづね、やがて、甘蔗の苗を琉球よりとりよせ、これを植えて、砂糖を製造せしめたり。これより後、

諸国に甘蔗を植うることひろまり、しだいに、よき砂糖を製造するにいたれり。そのころまでは、甘藷も、わづかに、西国にのみ伝はりて、ひろく、世に知られざりしが、吉宗は、米穀のとぼしきとき、これを補ふの効、大なることをきき、その栽培の法をしらべ、青木昆陽等をして、薩摩より種いもを取りよせ、これを植えしめて、世にひろめたり。吉宗、また、はぜの木は蠟をつくるに有用なればとて、その実を、紀伊より取りよせて、これが繁殖をはかりたり。

第二十四課 産業に工夫をこらせ【発明工夫】

久留米がすりは、井上デンといふ婦人の、はじめて、織りいだししものなり。デン、ある日、白糸を、ところどころ、くくり、藍汁にひたして、これを取りいだし、くくり糸をほどこきて、布を織りしに、白き模様、ところどころに、あらはれて、おもしろき織物となりたり。その後、なほ、しだいに、工夫を加へて、これを改良し、つひには、種種の模様あるかすりをも、織りいだすにいたれり。この織物は久留米がすりとて、その販路、ますます、ひろがりたり。デンが、かく、産業に工夫をこらししは、感ずべきことならずや。

第二十五課 職業【職業】

人は、かならず、職業に従事せざるべからず。職業に従事して、よく、勉励するときは、その身の幸福となるのみならず、人にも利益を与へ、また、その国を盛ならしむるものなり。されば、富めるも、貧しきも、みな、一定の職業に従事して勉励すべし。職業を定むるには、自己の能力と事情とに応じ、適当なる職業をえらぶべし。一度、定めし職業は、かるがるしく、かふることなく、よく、勉励して、これが改良進歩をはかるべし。

第二十六課 僥倖【勤勉】

世には、投機などによりて、一時に、大いなる富を得んとするものあり、あるひは、勤労を積むことなく、万一の僥倖をたのみて、事業をくはだつるものあり。これ等は、多くは、成功せず、たとひ、成功する人ありとも、模範とするに足らざるなり。着実にして、僥倖をもとめず、職業に勤勉し、正しき生活をなすは、人たるものの務なり。

第Ⅱ期

尋常小学修身書 卷一

十 モノヲソマツニアツカフナ【儉約】

二十四 ヒトニメイワクヲカケルナ【公益】

オチヨガミチバタニゴミヲステヨウトスルノヲ、オトウサンガトメテイマス。

尋常小学修身書 卷二

四 シゴトニハゲメ【勤勉】

キンジラウハ十二ノトキ、川ブシンニデマシタ。ホカノ人タチノセワニナリマスカラ、ワラヂヲツクツテキテソノ人人ニオクリマシタ。

七 キンケン（勤儉）【儉約】

キンジラウハモトノイヘニカヘツテキテ、ソノアレハテテイルノヲジブンデナホシテスマシタ。ソレカライツソウセイダシテハタラキ、マタケンヤクヲシテ、ノチニハエライ人ニナリマシタ。

尋常小学修身書 卷三

第十七 けんやく【儉約】

徳川光圀は、ちよちゆうたちが、紙をそまつにするので、紙すきばを見せにやりました。ちよちゆうたちは、紙すき女が冬の寒い日に、水の中ではたらいしているのを見て、紙をこしらへるのは、たやすい事でないとさとりしました。それからは紙をむえきに使はないやうになりました。

第二十六 こうえき（公益）【公益】

佐太郎は村役人になりました。村のわうらいの土橋が度々そんじて、人人がなんぎをするので、佐太郎は仲間の人たちとさうだんして、それを石橋にかけかへました。それからは、こはれることもなくて、皆皆よろこびました。そのほかにもいろいろ村のこうえきになる事をしましたので、佐太郎は村役人のかしらにあげられました。

尋常小学修身書 卷四

第六 職務に勉励せよ【勤勉】

秀吉は信長に仕へてからも、人にすぐれてよくはたしました。そのころ木下藤吉郎秀吉と名のつていましたが、ある日信長が敵を攻めるため、夜の明けないうちに、城を出ようとした時、秀吉はただ一人馬に乗つて待つていました。ある年城のへいが百間ばかりくづれました。信長はけらいにいひつけてふしんをさせましたが、二十日ほどたつてもはかどりませんので、あらためて秀吉にその役をいひつけました。秀吉は人夫をいそがせて、あくる日にそれをしあげました。秀吉はこんなに仕事にはげみましたから、次第に重く用ひられました。

第十二 自立自営【自立自営】

高田善右衛門は十七歳の時自分ではたらいて家をおこさうと思ひ立ちました。父からわづかの金をもらひ、それをもとでにしてとうしんとかさを買入れ、遠い所まで商売にでかけました。そこには山が多くて道がけはしかつたので、大きな荷物をかついで通るには大そうなんぎでありました。善右衛門は苦しい思をしていく度もけはしい山坂をこえました。又時々さびしい野原を通つたこともありました。このやうになんぎをして村村をまはつてあるき、雨が降つても、風が吹いても、休まずに、何年もはたらいしたので、わづかのもとでで多くの利益をえました。

第十三 自立自営（つづき）【自立自営】

善右衛門はその後呉服をしいれて売りにあるきました。いつも正直で、けんやくで、商売に勉強しましたから、りつばな商人になりました。ある時善右衛門は商売の荷物を持たな

いで、ある宿屋にとまりました。知合の下女が出て来て、「今日はおつれがございませんか。」といひました。善右衛門はふしぎに思つて、「いつも一人で来るのに、おつれとは誰のことですか。」とたづねましたら、下女が、「それはてんびんぼうのことでございます。」と云ひました。善右衛門はつねに自分の子供に「自分が家をおこすことの出来たのは、精出してはたらいて、けんやくを守り、又正直にしてむりな利をむさぼらなかつたからである。」といつてきかせました。

第二十四 公益【公益】

昔栗田定之丞といふ役人がありました。海岸の村村では暴風が砂を吹飛ばして、家や田畑をうづめることが毎度あつたので、定之丞は之をふせがうといろいろくふうしました。先づ海岸の風の吹く方に、わらたばを立てつらねて砂をふせぎ、その後に、やなぎやぐみの枝をささせました。皆めをふくやうになつてから、更に松の苗木を植えさせましたら、次第に大きくなつてりつばな林になりました。定之丞は十八年の間この事に骨折りましたが、そのために風や砂のうれへがなくなつて、畑も多く開けました。この地方の人人は今日までもその恩をありがたがり、定之丞のために栗田神社といふ社をたてて、年年のお祭を怠りません。

尋常小学修身書 卷五

第十課 儉約【儉約】

鷹山は令を出して儉約を勧めしが、自ら先づ之を実行せんとて、大いに衣食の料などを減じたり。鷹山の側役の者の父、或時在方におもむきて知合の人の家に泊りたることあり。其の人ふろに入らんとして着物をぬぎしが、粗末なる木綿の襦袢のみは丁寧に屏風にかかけおきたり。主人あやしみて其のわけをたづねしに、「此の襦袢は藩主の召されたるものにて我が子に賜はりしを更に我のもらひしものなればかくはするなり。」と答へたり。主人は之をききて深く鷹山の儉約に感じ、其の襦袢をしめして家内の人人をいましめたり。

格言 儉ヲ尚ブハ福ヲ開クノ源。

第十一課 産業を興せ【産業】

鷹山は産業を興して領内を富ましめんとばかり、新に荒地を開いて農業をいとなまんとする者には農具料種粃等をあたへ、三年の間租税を免じたり。又村村に令して馬をかはせ馬市を開きなどして農業を勧むる上のたすけとせり。鷹山は又養蚕をも勧めしかど、領内の民貧しくして桑を植うること能はざる者多かりしにより己の衣食の料の中より年年五十両づつを出し、其の中にて桑の苗木を買上げてわかち与へ、又は桑畑を開く者にかし付けて其の業を励ましたり。なほ鷹山は奥向にて蚕をかはせ、絹・紬を織らせなどしたりしが、更に領内の女子に職業を与へんと思ひ、越後より機織にたくみなる者をやとひ入れて其の法を教へしめたり。これ世に名高き米澤織のはじめなり。

尋常小学修身書 卷六**第十二課 自立自営【自立自営】**

フランクリンは、今より二百年程前北亜米利加のボストン市に生まれたる人にして、最も自立自営の心に富みたり。其の家貧しき上に兄弟多かりしかば、十歳の時学校を退き家業の手助をなしたり。されど学問を好む心深く、小遣錢を貯へおきて書物を買ひ、暇ある毎に之を読みたり。十二歳の時より兄の許にて印刷業の職工となり、よく働きてやがて一人前の仕事をなすに至れり。其の頃、懇意なる人より種種の書物を借受け、昼の仕事を終へたる後之を読むを樂みとせり。十六歳の時自炊して生活の費用を節約し、有益な書物を買ひ、僅かの時間をも惜しみて之を読めり。されば職業を励みし間にも、学識次第に進みて、遂に世に名高き人となりたり。

格言 天ハ自ラ助クルモノヲ助ク。

第十四課 公益【公益】

フランクリンは己が住へるフィラデルフィヤ市の知人と相談し、資金を出しあひて、図書館を設立し、世人の知識を開発せり。フランクリンは又新聞紙を発行したり。其の頃の新聞紙の中には他人の名誉を傷つくるが如き記事多かりしが、フランクリンは一切かかる事を載せず、ただ世を益することのみを図りたり。当時は消防の方法未だ備らず、火事ある毎に多くの家焼けて、損害おびただしかりしかば、其の予防法を調べ、之を印刷して配布し、又同志の者を集めて消防組をつくり、規約を設けて之を励行せり。これより火災の損害少く、為に市の人人は大なる利益を受けたり。又当時は学校の制度も未だ整はざりしが、フランクリンは寄付金を集めて中学校を設立し、多くの少年を教育したり。其の他有益なる曆本を発行し、フィラデルフィヤ市の街路を改良する等公益の為に尽せし功多く、特に電気を研究し、雷は電気的作用なることを証明し、又避雷針を発明して天下後世に鴻益を与へたり。

第十六課 産業に工夫をこらせ【発明工夫】

久留米絣は井上でんといふ婦人の始めて織出したるものなり。でんは幼き時より機織を習ひしが、何とぞ目新しき物を織出さんと朝夕工夫を凝しいたり。或時でん白糸を処々くくり、藍汁にて染めて、くくりたる糸を解去り、斑に染りたる糸にて布を織りしに、白きかすり模様あらはれて、面白き織物となりたり。其の後益々工夫を加へて之を改良し、遂には種種の畫模様ある絣をも織出すに至れり。かくて久留米絣の名は四方に伝はり、其の販路益々ひろがりて今日の如く盛になり、地方の繁栄を来したれば、人人其の功德を称し、でんの死後其の名を千載に伝へんとて記念碑を建てたり。

第十八課 勤勉【勤勉】

伊能忠敬は上総の人なり。十八歳にして下総佐原村なる伊能氏をつげり。伊能氏は世世酒・醤油の醸造を業とし、富有を以て聞えしかど、忠敬の家をつぎし頃には家道頗る衰へたり。忠敬深く之を憂へ、何とぞして家産を恢復せんとして、其の好める碁・将棋を止め学問をさへさしおきて、一意専心家業に勤勉し、家法を定め儉素を旨とし、躬を以て衆を率いしかば、次第に家運を挽回し、其の四十歳の頃には旧に倍する資産を造るに至れり。され

ば関東に二回の飢饉ありし際、毎回多くの金穀を出して窮民を救ひ官より厚く賞せられたり。

格言 精神一到何事カ成ラザラン。

第十九課 勤勉（つづき）【勤勉】

忠敬久しく家業を励みて五十歳に至りぬ。それより以後は専ら学問に従事せんとて、家を其の子に譲りて江戸に出でたり。忠敬は深く天文・暦法を好みしが、一日高橋東岡といふ学者を訪ひて其の説をきき、西洋暦法の精密なるに感じ、遂に東岡を師として学べり。東岡は忠敬より十九年若き人なりき。かくて東岡の門に学ぶこと数年、観測の術に至りては同門中其の右に出づる者なき程になりぬ。これより実地の測量に従事せんとて、五十六歳の時幕府の許可を得て蝦夷地に赴き、其の東南沿海の測量を終へ、之を図に製して幕府に上れり。其の後幕府の命を奉じて諸方の沿海を測量し、功を以て幕府の役人に挙げられ、益々力を測地製図の事に尽し、七十二歳に及びて日本全国の測量を終へ、それより大中小三種の地図を製することに力を尽せり。此の如く忠敬は七十余歳の老齢を以てなほ東西に奔走し、風雨寒暑を冒して測量に従事し、又家にありては自ら精密なる地図を製して毫も倦むことなかりき。

第Ⅲ期

尋常小学修身書 卷一

十 モノヲソマツニアツカフナ【儉約】

二十四 ヒトニメイワクヲカケルナ【公益】

オチヨガミチバタヘゴミヲステヨウトシマシタ。オトウサンガ「ゴミヲソンナトコロヘステルト、人ガメイワクシマス。」トイツテトメテイマス。

尋常小学修身書 卷二

二十三 クフウセヨ【発明工夫】

十吉ハジブンデクフウシテ色々ノオモシロイモノヲツクツテタノシンデイマス。アルトキハダイクノキリストタ木ノキレヲクミアハセテイヘヲコシラヘマシタ。マタアルトキハ木ノキレデ舟ヲツクリ、ソレカラ竹ヲケヅツテホバシヲ立テ、白イキレヲ母ニモラツテホニシテカケ、イケノ上ヲハシラセマシタ。

尋常小学修身書 卷三

第四 しごとにははげめ【勤勉】

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶしんに出ました。しごとをすまして、家へかへると夜おそくまでおきていてわらちをつくりました。さうしてあくる朝そのわらちをしごとばへもつて行つて、「私はまだ一人前のしごとが出来ませんので、皆さまのおせわになります。これはそのお礼です。」といつて人々におくりました。父がなくなつてからは、朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきぎをとつて、それをうりました。又夜はなはをなつた

り、わらちをつくつたりしてよくはたらきました。

第十七 けんやく【俚約】

徳川光圀はちよちゆうたちが紙をそまつにするのをやめさせようと思ひ、冬のさむい日に紙すきばを見せにやりました。ちよちゆうたちは川のうへのさじきに居て、さむい風にふかれながら、紙すき女が水の中ではたらくありさまを見てかへりました。そこで光圀は「一まいの紙でも、紙すき女がくろうしてこしらへたものであるから、むだにつかつてはならぬ。」といつてきかせました。ちよちゆうたちはなるほどさとつて、それからは紙をそまつにしないやうになりました。

第二十五 こうえき【公益】

佐太郎のすんでいた村のわうらいの土橋は度々そんじて、人人がなんぎをしました。佐太郎は村役人となつた時、役人なかまとさうだんをして、めいめいのきふれうを少しづつたくはえておいて、その金で石橋にかけかへました。それからはながく橋のそんじることがなくなつて、大そうべんりになりました。その外にも、佐太郎はいろいろと村のためになることをしたので、人々にたつとばれ、村役人のかしらに取立てられました。

尋常小学修身書 卷四

第十三 自立自営【自立自営】

近江に高田善右衛門といふ商人がありました。十七歳の時、自分ではたらいて家をおこさうと思ひ立ちました。父からわづかの金をもらひ、それをもとでにして、とうしんとかさを買入れ、遠いところまで商売にでかけました。道にはけはしい山さかが多かつたので、善右衛門はかさばつた荷物をかついで登るのに、大そうなんぎをしました。片荷づつはこび上げて、やうやう山をこえたこともあり。又時々はさびしい野原をも通つて、村々をまはつてあるき、雨が降つても、風が吹いても、休まずにはたらいたので、わづかのもとで、多くの利益をえました。その後呉服類を仕入れて方々に売りにあるきました。いつも正直で、けんやくで、商売に勉強しましたから、だんだんと、りつばな商人になりました。

第十四 自立自営（つづき）【自立自営】

善右衛門は人にたよらず、一すぢのてんびんぼうをかたにして商売にはげみました。ある時善右衛門は商売の荷物を持たないで、いつもの宿屋にとまりました。知合の女中が出て来て「今日はおつれはございませんか。」といひました。善右衛門はふしぎに思つて、「しじゆう一人で来るのに、おつれとは誰のことですか。」とたづねましたら、女中が、「それはてんびんぼうのことでございます。」といひました。善右衛門はつねに自分の子供にをしへて、「自分のはじめから人にたよらず、自分の力で家をおこさうと心がけて、せいだしてはたらき、又其の間けんやくを守り、正直にしてむりな利益をむさばらなかつたので、今のやうな身の上となつたのである。」といつてきかせました。

第十六 仕事にはげめ【勤勉】

圓山応挙は毎日京都の祇園社へ行つて、多くの鶏の遊ぶ有様をちつと見ていたので、人々がばかものではないかと思ひました。こんなにして一年もたつて、ついたてに鶏の絵をかいたら、生きているやうにできました。そのついたては祇園社にをさめました。これを見る人々はみんなりつぱだとほめるだけでしたが、或日野菜売の老人がしばらく見ていた後、「鶏のそばに草のかいてないのが大そうよい。」とひとりごとをいひました。応挙は老人の家へたづねて行つてそのわけをたづねると、老人は「あの鶏の羽の色は冬のものです。それでそばに草のかいてないことが大そうよいと思つたのです。」と答へました。或時応挙は又ねている猪をかかうとしました。八瀬の柴売女が自分の家のうしろの竹やぶに一匹の猪がねていると知らせたので、すぐ一しよに行つて、その有様をかきました。鞍馬から来た炭売の老人が、その絵を見て、「この猪はせなかの毛が立つていないから、病気にかかつているのでせう。」といひました。そのあとで八瀬の女が来て「あの猪はあそこで死んでいました。」とつげました。そこで応挙はあらためてたつしやな猪のねているところを見てかきましたら、せけんの人がほめそやして、一時に応挙のひやうばんがあがりました。

第二十五 公益【公益】

昔、羽後の海べの村々では、暴風が砂をふき飛ばして、家や田をうづめることが度々ありました。栗田定之丞のいふ人が、或郡の役人であつた時、その害をのぞかうといろいろくふうしました。先づ海べの風のふく方に、わらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろに、やなぎや、ぐみの枝をささせましたら、皆めをふくやうになりました。そこでさらに松の苗木をうえさせました。それがしだいに大きくなつて、つひにりつぱな林になりました。その後定之丞はほかの郡の役人になりましたが、そこでもこの事を土地の人にすすめました。はじめははげしいはんたいを受けたけれども、いろいろとさとし、自分が先に立つてはたらいたので、また松林がしげるやうになりました。定之丞は十八年の間もこの事に骨折りました。そのために風や砂のうれへがなくなつて、麦・粟などの畑もところどころに開け、又しようろや、はつだけでも生ずるやうになりました。この地方の人々は今日までもその恩をありがたく思ひ、定之丞のために栗田神社といふ社をたてて、年々のお祭をいたします。

尋常小学修身書 卷五

第五課 公益【公益】

古橋源六郎は三河の稲橋村の人で、家は代々酒造を業としていました。我が国に始めて市制・町村制が実施された時、村長に選挙されました。後に稲橋村が武節村と組合になつてからも組合長に選挙され、死ぬまで引きつづいて、この職をつとめ、公益のために力を尽しました。源六郎は三河の土地が馬を飼ふに適していることを知つて、奥羽産や外国産の良い馬を数十頭飼ひ、馬の改良をはかりました。ところが、「改良馬は大きいばかりで、女や子供が使ふにも困るし、其の上にのろくて役に立たない。」と悪口を言ひふらす者がありました。しかし、源六郎は馬の市場を開きなどして、改良馬が大きくて力も強い上に、おとなしくて使ひやすいことを世間に知らせたので、悪口を言ふ者がなくなりました。其の後、組合をつくつてだんだん事業をひろげて行くうちに、一時馬のねだんが下つて大損を

しました。源六郎は長い間、昼夜苦心してその回復をはかったので、とうとう損をとりかへすことが出来ました。三河に良い馬をたくさん産するやうになつたのは源六郎の力であります。源六郎は又父の志をついで、此の地方の人々に養蚕を勧めて、繭の産額が村の内だけでも、年々八九万円以上になるまでにしました。又自分で多くの費用を出して、山に木を植えさせました。それが今ではりつぱな森林になつています。源六郎は農事の改良をはかる為に、まだよそにないうちに村内に農会を設けて、その発達に力を尽しました。農会はそれからだんだん全国にいきわたりました。源六郎は又村に勤儉貯蓄の風を興さうとつとめました。或時、村の人々と申し合はせて毎日一厘ずつ積立てる一厘貯金といふことを始めました。それを賛成する者が多く、後には全村で二万円以上の貯金となりました。又村に悪い風がはいつて来て、仕事を嫌つて遊ぶ者や借金に苦しむ者が出来ました。源六郎はそれを心配して、村の人々と規約を設け力をあはせて、この悪い風をなほすことに骨折つたので、村の風儀もよくなりました。

第八課 儉約【儉約】

上杉鷹山は十歳の時に、秋月家から上杉家へ養子に来て、十七歳で米沢藩主となり、よい政治をして評判の高かつた人であります。鷹山が藩主となつた頃は、上杉家には借財が大そう多く、其の上、領内には不作がつづいて、人民も難儀をしていました。鷹山は此のままにしておいてはならないと思ひ、儉約をもととして家を立直し、人民の難儀を救はうと決心して、まづ江戸にいる藩士に其の志を告げました。しかし、藩士の中には鷹山に従はないで、「殿様は小藩にお育ちになつたから、大藩のふりあひを御存じない。」などと言ふ者がありました。鷹山は少しも志を動かさず、領内に儉約の命令を出し、まづ自分のくらしむきをずつとつづめて、大名でありながら食事は一汁一菜、着物は木綿ものばかりときめて、実行の手本を示しました。鷹山の側役の者の父が、或日、在方に行つて、知合の人の家に泊つたことがありました。其の人がふろにはいらうとして着物をぬいだ時、粗末な木綿の襦袢だけは、ていねいに屏風にかけて置きました。主人はふしぎに思つてたづねますと、「此の襦袢は殿様がお召しになつていたもので、それを拝がいただいて帰つたのを、私がもらつたのです。」と答へました。主人はそれを聞いて、大そう鷹山の儉約に感心し、其の襦袢を家内の人たちにも見せて、いましめました。

第九課 商業を興せ【産業】

鷹山は人民の難儀を救ふために、儉約を勧めた上に、なほ産業を興して領内を富まさうとはかりました。荒地を開いて農業をいとなまうとする者には農具料・種籾などを与へ、三年の間、租税を免じました。又命令を出して村々に馬を飼はせたり、馬の市場を開かせたりなどして農業を盛にするたすけとしました。鷹山は又養蚕を勧めました。領内には、貧しくて桑を植えることの出来ない者が多かつたので、自分の衣食の費用の中から年々五十両づつを出して、桑の苗木を買上げて分けてやり、又は桑を植える者に貸付けてやつて、其の業を励ましました。なほ鷹山は奥向で蚕をかはせ、その糸で絹や紬を織らせました。又領内の女子に職業を授けるために、越後から機織の上手な者をやとひ入れて、其の方法を教へさせました。これが世に名高い米澤織のはじめであります

なせばなるなさねばならぬ何事も　ならぬは人のなさぬなりけり

第十三課 勤勞【勤勉】

伊予の筒井村の農家に作兵衛といふ人がありました。祖先からの借金がたくさんあつたので、その日その日のくらしもなかなか難儀でした。作兵衛は幼い時から、何とかして家の借金を返したいと思つて、一生けんめいに働きました。十五歳の時に、母は病気でなくなりました。その後、作兵衛は朝夕食事の世話をし、昼は父と一しよに田畑を耕しました。又夜おそくまで草鞋を作り、それを軒下につり下げて置いて、往来の人に売りました。その草鞋の丈夫なのと、はき工合のよいのが評判になつて、いつもすぐに売切れました。作兵衛はかやうに夜昼一心に働いたので、村の人は皆、若い者の手本だといつて、ほめない者はありませんでした。そのうちに家のくらしも次第に楽になり、長い間の借金も残らず返してしまひ、其の上に少しばかりの田地を買ふことが出来ました。其の時の親子の喜はたとへやうもありませんでした。作兵衛は勇んで村役人の所へ行つて、買った田地を公に自分のものとする手続をしました。村役人たちは作兵衛の買った田地が悪くて収穫が少いの、税を納めさせることを気の毒に思ひました。しかし、作兵衛は、「どんな田地でも骨折つて作つたならば、決してよくならないことはありますまい。此の村に荒れた田地の多いのは、私どもの骨折がまだ足りない為だと思ひます。私は出来るだけ働いて、悪い田地をよい田地に仕上げ、村の為になるやうにしたいと思ひます。」と言ひましたので、村役人たちは作兵衛の心掛に感心しました。其の後、作兵衛は、はたして其の田地をよい田地に仕上げました。なほ其の上に、よい田地をたくさん買ふことが出来ました。

尋常小学修身書 卷六

第十課 工夫【発明工夫】

久留米絣を発明したのは井上でんといふ人です。でんは機織が好きで、子供のうちに早くも一通り織れるやうになりました。しかし生まれつき勝気でしたから、どうかして世間はない目新しい物を織出さうと、常に工夫をこらしていました。或日でんは、着古した黒い地の仕事着があちこち白くすれて模様かと思はれるやうになつてゐるのに気がつきました。これは面白いと思つて、ほぐして糸にしてみると、黒い糸が所々白くなつてゐるので、黒と白の斑の糸で織れば、きつと面白い模様の織物が出来るに違ないと考へつきました。そこでために白糸を所々くくり、藍汁につけて斑に染め上げ、その糸を機にかけて、どんな織物が出来るかと胸を躍らせながら織つてみると、かすり模様があらはれて面白い織物が出来ました。それからいろいろと改良を加へて、後には非常に手の込んだ模様でも織れるやうになりました。久留米絣は、今日では誰でも知らない者がいない位に広く用ひられています。

第十一課 自立自営【自立自営】

フランクリンは、今から二百余年前に北アメリカのボストンで生まれました。家が貧乏な上に兄弟が多いので、十歳で学校をやめて家業の手伝をしました。しかし幼い時から読書が好きで、小遣金をためては本を買ひ、少しでも暇があると、熱心にそれを読みました。そのために早くから倹約と勉強のよい習慣がつけました。十二歳の時、兄の印刷工場の仕事習ふことになりましたが、子供ながらもよく働いて仕事を覚え、間もなく一人前の職工になりました。其の間にも知合の人からいろいろな本を借受けて、一日の仕事がすむと、

それを読むのを楽しみにしていました。十七歳の時、ボストンからフィラデルフィヤに行つて、ある印刷工場に雇はれました。そこで一生けんめいに働いて、遂に二十四歳の時には独力で印刷業を経営し、長くフィラデルフィヤに住居するやうになりました。それから後も、常に学問を怠らず徳行に励んだので、遂にはりつばな人になり、アメリカ合衆国の独立の際に大功を立てました。

格言 天ハ自ラ助クル者ヲ助ク。

第十二課 公益【公益】

フランクリンは自分の住んでいるフィラデルフィヤをりつばな所にするためにいろいろと力を尽しました。フランクリンは知人と相談し、資金を出しあつて、図書館をこしらへました。これがもとで方々に同じ様な図書館が出来て、そのおかげでこの地方の人々の知識がだんだん進んで来ました。フランクリンはまた新聞紙を発行しました。その頃の新聞紙の記事には間違や無益なことが多かつたが、フランクリンは正しい有益な記事を自分の新聞紙に載せたので、大そう世間のためになりました。またその頃は一般に消防の方法が不十分でしたから、火事があると、きつとその度に大きな損害がありました。そこでフランクリンは、火事の予防法を調べ、それを印刷して配りました。又同志の者を集めて消防組を作り、火事があるとすぐにかけて消防につとめることにしました。かやうな消防組がだんだん出来たので、フィラデルフィヤでは火事の損害が少くなりました。フランクリンはまた工合のよいストーブを発明したので、「専売特許を願ひ出てはどうか。」と言つてすすめる友人もありましたが、「広く行渡れば人々のためになることだから。」と言つてきき入れませんでした。其の外フランクリンは、寄付金を集めてフィラデルフィヤにはじめて中学校を立てたり、有益な暦を工夫して発行したり、街路を改良したり、病院を開いたりして、公益の為に力を尽しました。中でも電気を研究して、雷が電気的作用であることを証明し、避雷針を発明して広く世人を益したことは有名な話です。

第二十二課 勤勉【勤勉】

伊能忠敬は上総に生まれ、十八歳の時下総佐原村の伊能氏の家をつぎました。伊能氏は代々酒や醤油を造り、土地で評判の資産家でしたが、その頃は大家が衰へていました。そこで忠敬はどうかしてもとのやうにしようと思つて、一生けんめいに家業に励み、自分が先に立つて儉約したので、家も次第に繁昌して、四十歳になる頃には、もとよりも豊になりました。それで関東に二度も飢饉があつた時、二度とも金や米をたくさん出して、困っている人々を助けました。また公職について村のために尽しました。五十歳になると家を長男に譲りました。しかしそのまま楽をしようとはせず、これから一心に学問をしようと思つて江戸に出ました。忠敬はもともと天文・暦法が好きで、これまでも仕事のひまには少しづつ勉強をつづけて、その知識がかなり深くなつていました。江戸に出ると間もなく、高橋至時といふ天文学者をたづね、その精密な西洋暦法の話聞いて大そう感心し、自分より十九も年下の至時の弟子になつて、数年間倦まずたゆまず勉強したので、同門中及ぶものがない程学問が上達しました。五十六歳の時、幕府の許を受けて北海道の東南海岸を実地に測量し、地図を作つてさし出しました。その後、幕府の命で諸方の海陸を測量することになり、寒暑をいとはず遠方まで出かけて、とうとう七十二歳で日本全国の測量をす

ませました。それからもからだの自由がきかないやうになるまでは、大中小三種の日本地図を作ることにつとめました。我が国の正しい位置や形状が始めて明らかになったのは全く忠敬の手柄です。

格言 精神一到何事力成ラザラン。

第Ⅳ期

尋常小学修身書 巻一

十二 モノヲダイジニ【儉約】

ユウキチガ、カバンヲ、エンガハニナゲダシマシタ。クレヨンガ、ミンナヲレマシタ。

十八 人ニメイワクヲカケルナ【公益】

マサヲガ、トモダチト、トホリデ、マリナゲヲシテイマス。マサヲノオトウサンガ、「ソナトコロデアソブト、人ノジャマニナル。」トイッテ、トメテイラッシャイマス。

尋常小学修身書 巻二

二 ジブンノコトハジブンデ【自立自営】

ウメ子ガ、オトウトノ一郎ニ、「サア、学校ヘイキマセウ。」トイッテ、サソヒマシタ。一郎ハ、マダヨウイガデキテイマセンノデ、アワテテ、「ネエサン、ソノホンヤチャウメンヲ、カバンニ入レテクダサイ。」トタノミマシタ。オカアサンハ、ソレヲオキキニナッテ、「ジブンノコトハジブンデナサイ。」トオッシャイマシタ。一郎ハ、ジブンデカバンノシマツヲシテ、ネエサントーショニ、学校ヘイキマシタ。

三 クフウ【発明工夫】

太郎ハ、ジブンデクフウシテ、イロイロノモノヲツクッテタノシンデイマス。アル日、コウエンノイケニ、フンスイガイキホヒヨク出テイルヲ見テ、「フンスイノ水ハ、ドウシテ出ルノデスカ。」ト、オトウサンニタヅネマシタ。オトウサンハ、フンスイノ出ルワケヲハナシテクダサッテ、「カンタンナモノナラ、ウチデモデキル。ツクッテゴランナサイ。」トオッシャイマシタ。太郎ハ、サツソク、ジブンデフンスイヲコシラヘテミヨウトオモッテ、イロイロクフウシテミマシタ。マヅ、バケツニ水ヲクンデ、エンダイノ上ニオキ、バケツノ中カラ、ホソ長イゴムノクダヲ下ヘタラシマシタ。サウシテ、クダノサキニロヲアテ、水ヲスヒコムト、バケツノ水ガ、フキ出シテ来マシタ。ソコデ、水ノ出口ヲ上ヘムケルト、水ガ、フンスイニナッテアガリマシタ。コノフンスイヲモットタカクアゲルタメニ、水ノ出口ヲホソクシタリ、バケツヲタカイ所ニオイタリシテミマシタ。太郎ハ、カウシテデキタフンスイヲ、ハコニハノ中ヘシカケテ、ウチノ人人ニ見テモラヒマシタ。

十一 ナマケルナ【勤勉】

ナツノアツイ日ザカリニ、アリノオヤ子ガ、アセヲナガシナガラ、イモムシヲジブンノウチニヒイテイキマシタ。キリギリスハ、ソレヲ見テ、アザケリワラヒマシタ。サウシテ、ジブンハ、ウツクシイクサ花ノカゲデ、テフトーショニ、ウタッタリ、ヲドッタリシテイ

マシタ。子アリガ、「アンナニアソデクラシタイナ。」トウラヤマシガルト、オヤアリハ、
「ナツウタフモノハ、フユ泣クノダ。ナマケテハナラナイヨ。」トイッテ、イヒキカセマシ
タ。ナツモスギ、ヤガテフユガ来マシタ。アリハ、タベモノニコマリマセンガ、キリギリ
スハ、タベルモノガナクナッテ、アリノ所ヘモラヒニ来マシタ。

尋常小学修身書 卷三

五 しごとにはげめ【勤勉】

金次郎の村のさかひを流れている川には、たびたび大水が出て、土手をこはしました。そのために、村では、どの家からも一人ずつ出て、毎年、川ぶしんをしました。金次郎も、年は若い、この川ぶしんに出てはたらきました。しかし、まだ力がたらないので、おとなにはかなはないと思つて、どうかしてしごとのたしになることはないかとかんがへました。さうして、昼のしごとをすまして家へかへると、夜おそくまでおきていてわらちをつくり、あくる朝、それをしごとばへ持つて行つて、「私は、まだ一人前のしごとが出来ませんから、みなさんのおせわになります。これはそのおれいです。」といつて、みんなの人におくりました。しかし、金次郎は、人の休んでいる間でも、休まずはたらいたので、土や石をはこぶことは、かへつておとなよりも多いほどでした。金次郎は、家のしごとにもよくはたらきました。朝は早くから山へ行つて、しばをかり、たきぎをとり、それを売つて金にかへました。また、夜はなはをなつたり、わらちをつくつたりして、少しのじかんもむだにしませんでした。かうして、母を助けて、小さい弟たちをやしなひました。

十九 けんやく【儉約】

徳川光圀は、水戸のとのさまで、大日本史といふ名高いれきしの本を作つて、皇室のたふといことを広く世に知らせた人であります。光圀は、何ふじいうのない身分でありながら、いつも、けんやくをまもりました。へいぜいの着物やたべ物も、そまつなものでした。居間の作りもそまつで、其の上せまく、てんじやうやかべは、すつかりほぐではつてありました。それも、ごみさへ落ちなければよいといふので、よそから来た手紙などをつかつて、自分ではつたのでした。光圀は、紙をていねいにつかひました。へいぜい、ものを書くには、大てい、ほぐのうらをつかひました。それに、女中たちは、紙をそまつにつかふので、光圀は、それをやめさせようと思ひ、或冬の日、紙すき場を見せにやりました。其の日は、寒い寒い日でしたが、紙すきの女中たちは、川風に吹かれながら、つめたい水にはいつて、手も足もまつかにしてはたらいて居ました。女中たちは、此の様子を見て、自分たちのつかふ紙が、どんなに人々のくらののおかげで出来るかといふことがわかつたので、それからは、一枚でも、そまつにしないやうになりました。

二十五 こうえき【公益】

佐太郎は、しごとになつてから、佐太郎の作る田や畠は、毎年よく出来ました。それで、人々は、佐太郎に尋ねて物を作るやうにしました。佐太郎は、作物の作り方を人に聞かれると、しんせつに教へてやりました。また、田に水を引く頃は、よく田を見まはりましたが、人の田でも、水がかわいて居るとせき入れてやり、あまつて居るとはづしてやりました。また、夜ひまな時には、村の子供たちを集めて、「いろは」や「九々」を教へ

ました。其の頃、村には学校がなかつたので、親たちは大そう喜びました。やがて、人々は、佐太郎にたのんで、村役人になつてもらひました。佐太郎は、いそがしい中から、よく村のせわをしました。其の頃、村の川に一つの土橋がかかつて居りましたが、それが度々そんじて、人々がなんぎをしました。佐太郎は、仲間の役人たちとさうだんして、めいめいのもらふきふれうの中から、少しづつためて、其の金で、土橋を石橋にかけかへました。それから、ながく橋のそんじることがなくなつて、大そうべんりになりました。其の外にも、佐太郎は、村のためになることをいろいろしたので、人々にたつとばれ、村役人のかしらに取立てられました。

尋常小学修身書 卷四

第八 発明【発明工夫】

種痘の法を発明した人は、ジェンナーといふ医者であります。ジェンナーがこれを発明するまでには、長い間、いろいろと苦心をしました。ジェンナーは、今からおよそ百九十年ほど前、イギリスに生まれました。少年の頃、或医者の弟子になつていました。或日、牛乳しぼりの女がしんさつをしてもらひに来ました。其の女は、顔一面にひどい吹出物が出て、見るもあはれな様子をしています。ジェンナーは、何といふ気のどくな病気だらうと思ひました。これをしんさつした医者は、「疱瘡です。」と申しました。すると、其の女は、「私は牛痘にかかつてことがありますから、疱瘡にかかるはずはありませんが。」と、ふしぎさうに申し立てました。ジェンナーは、そばで聞いていて、「これはふしぎな話だ。ひよつとしたら、此の女の言ふことには、何か深いわけがあるかも知れない。もしさうであつたら、それを研究して、何かよいちれう法を発明し、かういふ気のどくな病人をすくつてやりたい。」と考へました。それから人の体に牛痘をうえて、疱瘡をよばうすることを思ひ立ちました。友達に話をしますと、皆あざけつて、「つき合ひをやめる。」とまで言ひました。ジェンナーは、それでもかまはず、二十年余りの間、いろいろと牛痘や疱瘡のことをしらべ、さまざまにくふうをこらしました。其のかひがあつて、とうとうたしかな種痘の法を発明しました。それで先づ、自分の子に牛痘をうえてみて、それから疱瘡のどくをうつさうとしましたが、うつらなかつたので、其の事を本に書いて世間の人に知らせました。ところが、世間の人は、此のよい発明を信じないで、かへつて、「牛痘をうえられた子供は、顔が次第に牛ににて来て、声も牛のほえるやうになる。」などと、悪口を言ふ者がありました。しかしジェンナーは、此の発明が人々のためになることを信じて、ますます一心に研究を続けました。其のうちに、ジェンナーの発明した種痘が人助けのよい法であるといふことが知れて、広く世間に行はれるやうになりました。今では、私たちも、皆其のおかげを受けているのです。

第十三 自立自営【自立自営】

近江に、高田善右衛門といふ人がありました。家は、醤油をつくるのを業としていました。善右衛門は、少年の頃から、よく家業の手伝をしました。末子でしたから、「後にはひとりだちをして、自分で働いて、あらたに家をおこさう。」と決心しました。そこで、十七歳の時、父からわづかの金をもらひ、それをもとでにして、燈心と笠を仕入れ、遠い山国まで商売に出かけました。道には、けはしい山坂が多かつたので、善右衛門は、かさばつた

荷物をかついでのぼるのに、大そうなんぎをしました。或時など、片荷づつ運び上げて、やつと山坂をこえたこともありました。又、時には、さびしい野原も通らなければなりませんでしたが、けれども、善右衛門は、手足のこごえるやうな寒い日でも、やけつくやうな暑い日でも、少しもいとひませんでした。雨が降つても、風が吹いても、一日も休まず村々を廻つて、商売にせい出しました。後には、商売を手広くして、呉服類まで仕入れて、売歩きました。かやうにして、善右衛門は、人にたよらず、ただ一本のてんびんぼうをたよりにして商売にはげみましたから、だんだんとりつぱな商人になりました。或時、善右衛門は、商売の荷物を持たないで、いつもの宿屋にとまりました。知合の女中が出て来て、「今日は、お連れはございませんか。」と言ひました。善右衛門はふしぎに思つて、「いつも一人で来るのに、お連れとは誰のことですか。」と尋ねました。すると、女中は、「それは、てんびんぼうのことでございます。」と言ひました。善右衛門は、いつも自分の子供たちに、「自分は、始から人にたよらず、自分の力で家をおこさうと心がけて、せい出して働き、又けんやくを守り、正直にしてむりな利益をえようとよくばらなかつたので、今のやうな身の上となつたのである。」と言つてきかせました。

第十九 公益【公益】

日本海方面の海岸では、秋の末から春先にかけて、海から烈しい風がよく吹きます。其のために、砂の多い海岸では、広い広い砂山が出来ている所もあります。今の秋田県の海べの村々では、其の風がことに烈しく、吹寄せた砂のために、昔は家も田畑もうづめられ、くらしの立たなくなる家も、たくさんありました。或年、栗田定之丞のいふ人が、其の地方の砂留役となりました。定之丞は、先づ村々を見て廻りましたが、海べは、見とほしもきかない程の広い砂山でした。「これだけの砂をどうして防ぐことが出来よう。」とただ驚きあきれるばかりでした。けれども又、これから後、此の砂山が田畑をうづめ、百年も二百年も、村々が苦しめられどほしに苦しめられることを思ふと、じつとしてはいられない気がしました。「よし、戦場に出たつもりで、根限り風や砂と戦つてみよう。」とかたく決心をしたのでした。そこで、これまで砂留に骨折つた年よりを呼んで、いろいろ話をきき、ここに先づぐみややなぎなどを植え、いくらか砂がしまつたところで、松の苗木を植えることにしました。さうして又季節を考へ、植え方にくふうをして、寒中、それもあるべく風の吹く日をえらんで、人々を呼集めて仕事をさせました。風の吹く日には、砂の吹寄せられる方向がよくわかりますから、風上の方に、かやのたばなどで風よけをして砂を防ぎ、其のかげに、最初はぐみややなぎの枝をささせましたら、皆芽をふくやうになりました。そこで、さらに松の苗木を植えさせました。定之丞は、此の方法で仕事を進めて行きました。ところが、人々は、風の吹く寒い日に働くのがつらいのと、うまく松林になるかどうかといふことが心配なのとで、なかなか定之丞のいふことをききません。定之丞は子供をさとすやうにやさしく道理を言ひきかせ、其の上自分から先に立つて働きました。朝は、夜の明けないうちから仕事場につめかけ、夜は、人々を帰らせた後まで居残つて明日の仕事のくふうをしました。時には、冷たい砂の上にふして、風の当りぐあひをたしかめたこともあります。やがて村の人々も定之丞のねつしんに動かされて、仕事をはかどり、たくさん苗木を植込むことが出来ました。それが次第に大きくなつて、つひにりつぱな松林になりました。定之丞は二十余年の間、引続き方々で、砂留の事に骨を折りました。其の

ために、風や砂の心配がなくなつて、麦・粟などの畑もところどころに開け、又しようろや、はっだけも生えるやうになりました。此の地方の人々は其の恩をありがたく思ひ、定之丞のために栗田神社といふ社を建てて、今日まで年々のお祭をいたします。社は今の秋田市の町はづれにあります。そこから見渡す海へには、定之丞が三百万本を植込んだといふ松原が続いて、青々とした美しい色をたたへています。

尋常小学修身書 卷五

第四 公德【公益】

公園の樹木を折りつつたり、塀や壁に落書をしたり、人ごみの中で人を押しのけて進んだりするのは、公德心にかけた行です。公園の樹木を折る人も、隣の庭の花はとらないでせう。又どんな人ごみの中でも、知合の人を押しのけるやうなことはしないでせう。知合っている間では決してしないことでも、見ず知らずの人の間となると平気でするのは、つまり自分が公衆と一体の生活をしているといふ考がなく、かやうなことをしては恥づかしいと感じないからです。私たちは、自らつつしんで、知っている人に対しても、又知らない人に対しても、決して迷惑をかけるやうなことをせず、常に公衆の一人として、何事をするにも公衆のためを考へて、世の中の幸福を進めるやうに心掛けなければなりません。乃木大将が学習院長であつた時、大将は、常に生徒に、少しでも人の迷惑になるやうなことをしてはならないと言ひきかせました。さうして、自分も決して人の迷惑になるやうなことはしませんでした。或日、大将は、電車に乗つて上野へ行きました。ちやうど雨降で、大将の着ていた外套は雨にぬれていましたので、車内で人から席をゆづられても、ただでいいいにお礼を言ふだけで、腰を掛けようとはしませんでした。大将についていた人が、外套を持ちませうかと言ひましたが、それもことわつて、ずっと上野まで立つたままで行きました。人々が互に公德を重んずれば、世の中の秩序はととのひ、みんな楽しく生活することが出来ます。世の中が開けて、汽車・汽船・電車・自動車・飛行機等の乗物の便がよくなり、図書館・博物館等が各地に設けられ、公園も諸所に作られて来ますと、これらの公共の物を利用する機会が多くなりますから、私たちは一そう注意して、公德を守らなければなりません。

第七 公益【公益】

熊本の町から東南十数里、緑川の流に沿うて白糸村といふ農村があります。一帯の高地で、緑川の水は、此の村よりもずっと低い所を流れていますし、又緑川に注ぐ二つの支流も、此の村のまはりの深いがけ下を流れています。白糸村は、かやうに川にとり囲まれていながら、しかも川から水が引けないので、昔は水田が開けないのはいふまでもなく、畠の作物もよく出来ず、場所によつては飲水にも困る程でした。村人たちは、毎年、よその村々の田が緑の波を打つのを眺めるにつけ、又それがゆたかに実のつて黄金色になつて行くのを見るにつけ、どんなにうらやましく思つたことでせう。さうして、村のまはりを、朝も晩も勢よく流れてやまない水の音を、どんなにうらめしく聞いたことでせう。今からおよそ百年程前、矢部郷と呼ばれた此の地方の総荘屋に、布田保之助といふ人がありました。保之助は、矢部郷の村々のために、道路を開き、橋をかけて交通を便にし、堰を設けて水利をはかり、大いに力をつくしましたが、同じ矢部郷の中である白糸村の水利だけはどう

することも出来ず、村人たちと共に水のとぼしいことをただ歎くばかりでした。保之助は、思案の末、緑川の一つの支流の深い谷をへだてた向かふの村が、白糸村よりも高く、水も十分にあるので、其の水をどうかして谷を越えて白糸村へ渡すより外に方法はないと考へました。しかし、小さいかけひの水ならばともかく、田畑をうるほす程の多量の水を渡すことは、容易なことではありません。保之助は、先づ木で水道を作つて水を渡してみました。が、はげしい水の力で、水道は一たまりもなく吹破られ、木片は深い谷底へばらばらになつて落ちてしまひました。しかし、そんなことで志をくじくやうな保之助ではありませんでした。保之助は、今度は石で水道を作らうと思つて、いろいろの実験をしました。水道にする石の大きさや水道の勾配を考へ、水の力のかかり方や吹上げ方などをくはしく調べました。とりわけ石のつぎ目から一滴も水をもらさない工夫には、最も苦心をしました。さうして、これならばといふ見込がついたので、先づ谷に高い石橋をかけ、其の上に石の水道を設ける計画を立てて、藩に願ひ出ました。いよいよ藩の許を得たので、一年八箇月を費して、大きなめがね橋をかけました。高さが十一間余り、幅が三間半、全長四十間。さうして此の橋の上には三すぢの石の水道が仕掛けられてありました。始めて水を通すといふ日、保之助は礼服を着け、短刀を懐にして其の式に臨みました。万一此の工事が失敗であつたら、其の場を去らず腹をかき切つて死ぬ覚悟でした。工事の見届けに来た藩の役人も、集まつた村人たちも、他村からの見物人も、保之助の様子を見て、はつと襟を正しました。足場が取払はれました。しかし石橋はびくともしませんでした。やがて水門が開かれました。水は勢込んで長い石の水道を流れて来ましたが、石橋は其の水勢にたへて、相変らず谷の上に、高く、どつしりとかかつていました。さうして水は望み通りにこちらの村へ流れ込んで来ました。「わあ」と喜の聲があがりました。保之助は、今こそ、長い間苦心を重ねた難工事が出来上つたのだと、涙を流して喜びました。さうして、水門をほとぼしり出る水を手にくんで、押しいただいて飲みました。間もなく、此の村に百町歩程の水田が開けました。さうして人はふえ、村は富み、藩も大いに収益を増しました。それからは、保之助が村を通ると聞くと、家の中に居る者まで走り出て、ていねいにあいさつをしたといふことです。橋の名は通潤橋と名づけられ、今もなほ深い谷間に虹のやうな姿を横たへ、一村の生命を支へる柱となつています。

第八 勤労【勤勉】

伊予の筒井村の農家に、作兵衛といふ人がありました。祖先の代からの借金がたくさんあつたので、其の日其の日のくらしもなかなか難儀でした。作兵衛は少年の頃から、何とかして借金を返し、家を盛にしたい思つて、一生けんめいに働きました。作兵衛は、毎日、父と一しよに田畑を耕しました。又、夜はおそくまでわらちを作り、それをのき下につるしておいて、ゆききの人に売りました。其のわらちの丈夫なのと、はき工合のよいのがひやうばんになつて、いつも、すぐに売切れました。作兵衛がかやうに夜昼一心に働くので、村の人たちは、皆、作兵衛を若い者の手本だと言つてほめました。其のうちに家のくらしも次第に楽になり、長い間心をいためた借金も、残らず返すことが出来ました。其の時の親子の喜はたとへやうありませんでした。それから、作兵衛は、村内の荒地を買求めました。もとより人が耕さない程の荒地のことですから、開くのに手のかかることは非常なものでした。それを、仕事のひまひまに、骨身ををしまず耕して、とうとう作物が出来る

までにしました。少しの田地も持たなかった作兵衛は、これで、わづかながらも田地持となつたのですから、其の喜は大したものでした。それにつけても、此の田地を全くの作り取りにすることは、気がすみませんでした。そこで、田地調のあつた時に、自分の持高として入れてもらふやうに、役人に願ひ出ました。役人は、しきりに相談していましたが、作兵衛に向つて、役「よい心掛ぢや。しかし、あの田地はまだお前の持高には入れられない。」作「それは又、なぜでございませうか。」役「聞けば、其の田地は非常な下田で、いくらもみいりがないさうだ。外に良い田地を持つている者ならよいが、それだけでは、さしあたって、租税を納めるにも困るであらう。まあ、せいぜい手入をして、四年なり、五年なり、作つてみてから願つたがよい。」作「ありがたいお言葉でございしますが、みいりの多い少いは、手入次第でございします。十分手入をすれば、決して租税に困るやうなことはないつもりです。此の村には、まだ荒地がたくさんあります。それを荒れたままでおくのは、まだまだ農家の働が足りないからだと思ひます。荒地ばかりではありません、下田でも、下田下田と言つて手を入れないから、いつまでたつても上田とならないのです。私は汗とあぶらで、きつと上田に仕上げますから、どうか、持高に入れて、租税を取立てていただきます。」役人も作兵衛のよい心掛に感心して、とうとう其の願をきき入れました。其の後、作兵衛は毎朝早く起きて野に出て働き、とうとう其の田地を上田に仕上げました。なほ次第に多くの田地を開いて、遂にりつばな一人立の農家になりました。

第九 儉約【儉約】

上杉鷹山は、十歳の時に、秋月家から上杉家へ養子に來ました。十四歳の時から、細井平洲を先生として学問にはげみました。十七歳の時、米沢藩主となり、よい政治をしてひやうばんの高かつた人であります。鷹山が藩主になつた頃は、上杉家には借財が多く、其の上、領内には凶作が続いて、領民も大そう難儀をしていました。鷹山は、此のままにしておいては家の亡びるのを待つより外はないと考へて、儉約によつて家を立て直し、領民の難儀をすくはうとかたく決心しました。鷹山は、先づ江戸にいる藩士を集めて、「此のまま当家の亡びるのを待つていて、人々に難儀をかけるのは、まことに残念である。これ程衰へた家は立て直す見込がないと誰も申すが、しかし此のまま亡びるのを待つよりも、心をあはせて儉約をしたら、或は立ち行くやうになるかも知れない。将来のために、今日の難儀は忍ばなければならない。志を一にして、みんな一生けんめいに儉約を実行しよう。」と言ひきかせました。しかし、藩士の中には、鷹山に従はないで、「殿様は小藩におそだちになつたから、大藩の振合を御存じない。」などと悪口を言ふ者もあり、又、「皆の喜ばないことは、おやめになつた方がよろしうございませう。」といさめる者もありました。しかし、鷹山は少しも志を動かさず、藩士たちに儉約の大切なことをよく説ききかせました。なほ平洲に教を受けますと、平洲は、「勇気をはげまして志を決行なさいませ。」と言ひましたので、鷹山は益々志をかたくして、領内に儉約の命令を出しました。さうして、先づ自分のくらしむきをずつとつづめて、大名でありながら、食事は一汁一菜、着物は木綿物ときめて、実行の手本を示しました。鷹山は、或日平洲に向かつて、「先生、私は人々と難儀を共にしようと思つて儉約をしています。しかし、衣服も、上に木綿の物を着て下に絹・緞をかさねては、ほんたうの儉約になりませんから、下着も皆木綿の物を用ひて居ります。」と申しました。かやうに鷹山は誠実に儉約を守つていましたが、りつばな大名が、ま

さか、上衣はもちろん下着までも木綿を用ひようとは、側役の人たちの外、誰も信じませんでした。或日、鷹山の側役の者の父が在方に行つて、知合の人の家にとまつたことがありました。其の人がふろにはいらうとして着物をぬいだ時、粗末な木綿の襦袢だけは、ていねいに屏風に掛けて置きました。主人はふしぎに思つて、「どうして襦袢だけそんなに大事になさいますか。」と尋ねますと、客は「此の襦袢は、殿様がお召しになつていたものをいただいたのですから。」と答へました。主人は、それを聞いて、大そう藩主の儉約に感じ入り、其の襦袢を家内の人たちにも見せて、儉約をするやうにいましめました。それから、藩士はもちろん、領内の人々が此の話を伝へ聞いて、鷹山の儉約の普通でないことを知り、互につつしみ、よく儉約を守るやうになつたので、しまひには、上杉家も領内一般もゆたかになりました。

第十 産業を興せ【産業】

鷹山は、領民の難儀をすくふため、儉約をすすめた上に、なほ産業を興して領内を富まさうとはかりました。荒地を開いて農業をいとなまうとする者には、農具の費用や種籾などを与へ、三年の間の租税を免じました。鷹山は、自ら荒地を開く所を見てまはり、或は村々に入つて、耕作の有様を見て人々の苦勞をなぐさめました。時には、老婆の稲刈にいそがしいのを見て、其の運搬を手伝つてやつたこともありました。又命令を出して、村々に馬を飼はせたり、馬の市場を開かせたりなどして、農業を盛にする助としました。鷹山は、又養蚕をすすめました。領内には、まづしくて桑を植えることの出来ない者も多くいましたが、藩には貸与へる金がないので、鷹山は役人を呼んで、「物事は、急に成しとげようと思つてはならない。小を積んで大を成し、ながく続くやうにすることが大切である。自分の衣食の費用は出来るだけきりつめてあるが、なほしんばうして、毎年五六十両づつ出さう。それを養蚕奨励の費用にあてて、十年二十年とたつたならば、どれ程か結果があらはれよう。自分が儉約して養蚕をすすめると聞いたなら、財産のある者は、進んで土地を開き、桑を植えて蚕を飼はうとする考を起すであらう。」と言ひました。役人は、大いに感じ入つて、養蚕役場を設け、鷹山の衣食の費用の中から年々五十両づつ出して、其の金で桑の苗木を買上げて分けてやり、又は桑畑を開く費用として貸付けてやつて、其の業をはげましました。なほ鷹山は、奥向で蚕を飼はせ、其の糸で絹や紬を織らせました。又領内の女子に職業を授けるために、越後から機織の上手な者をやとひ入れて、其の方法を教へさせました。これが名高い米澤織の始であります。鷹山はかやうに心を産業に用ひましたから、領内は次第に富み、養蚕と機織とは盛に其の地方に行はれ、米澤織は、全国に名高い産物の一つとなりました。

なせばなるなさねばならぬ何事も　ならぬは人のなさぬなりけり

尋常小学修身書 卷六

第六 勤勉【勤勉】

伊能忠敬は上総に生まれ、十八歳の時下総佐原の伊能氏の家をつぎました。伊能氏は代々酒を造るのを業とし、土地で評判の資産家で、いろいろ地方のためにも尽くしていましたが、忠敬が家をついだ頃は半分衰へていました。そこで忠敬は、どうかしてもとのやうに盛にしようと思つて、一生けんめいに家業にはげみ、自分が先に立つて儉約したので、家

は次第に繁昌して、四十歳になる頃には、以前よりもゆたかになりました。忠敬は関東に二度もききんがあつた時、其の都度、家風に從つて、金や米をたくさん出して、困っている人々を助けました。又公職に就いて、村のためによく尽くしました。忠敬は、五十歳の時家を長男にゆづり、翌年江戸に出ました。其のまま引込んで楽をしようといふのではなく、専ら学問をして世のために尽くさうと志したのであります。忠敬はもとから天文・暦法が好きで、これまでも仕事のひまひまには怠らず勉強をしていたので、其の知識はかなり深くなつていました。或日、高橋至時といふ天文学者をたづね、其の西洋暦法にくはしいのに感心して、自分よりも十九も年下の至時の弟子になつて教を受けることとしました。それから数年間倦まずたゆまず勉強したので、学問が大いに進み、特に観測の術にかけては、同門中彼に及ぶ者が無い程に上達しました。五十六歳の時、人跡稀な北海道の南東海岸を測量し、地図を作つて幕府にさし出しました。其の後、幕府の命を受けて諸方の海陸を測量することになり、寒暑をいとはず遠方まで出かけて、とうとう全国の測量を成し遂げました。其の時すでに七十二歳に達していましたが、それからもからだの自由のきかなくなるまで、日本地図を作ることにつとめて、遂に大中小三種の精密な地図を作り上げました。我が国の正しい位置や形状が始めて明らかになつたのは、全く忠敬の勤勉のたまものである。

格言 精神一到、何事カ成ラザラン。

第八 自立自営【自立自営】

澁澤榮一は、明治になる少し前、利根川のほとり、熊谷の近くの血洗島といふ村に生まれました。家は農耕・養蚕を業とし、かたはら藍玉商を営みました。榮一は勤勉で誠実な父と慈愛深い母とに大切に育てられましたが、決してそれにあまえてはいませんでした。少年の頃から学問が好きで、又剣道にもはげみました。同時に農事に勤め、熱心に商売の手伝いもしました。十四歳の時の事です、父が藍玉取引のため遠くへ出向いた留守に、榮一はかねて望んでいたやうに自分で商売を試みるのは此の時だと思ひ、父が年々取引をしている近くの村々へ、父に代つて藍の買入に出かけました。ところが、人々はこんな少年に藍の良否がわかるものかと侮つて、一向相手にしてくれません。それに構はず、榮一は行つた所で藍を取上げて、これはかわかし方が足りないとか、下葉があがつているとか、肥料がきいていないなどと、藍の出来ばえを一々上手に品評しました。すると人々は驚いて、さすがにおとうさんのお仕込で見方がうまいと言つてほめ、それからは容易に取引の相談がまともりました。かうして父の帰つた時には、近在の取引先の藍はことごとく買入がすんでいたので、父は非常に喜びました。幕末の風雲はいよいよ急を告げて来ました。それまで家業に身を入れていた榮一も、じつとしては居られなくなり、遂に父の許を得て国事に奔走することとなりました。時に年二十四でした。二十八歳の時、はからずも、パリーで開かれる万国博覧会へおもむく幕府の使節の一行に加ることとなりました。一年半の間、ヨーロッパに滞在して、諸国の政治・経済・制度・文物を研究しているうちに、幕府が亡びたので、帰朝しました。父は我が子の身の上を案じ、大金をふところにして東京まで会ひに来ましたが、榮一はたのもしく独立の覚悟を語つて、其の金を受けませんでした。榮一がパリーにいた間に最も深く心を動かしたのは、或銀行家と或将軍とが肩をたたいて談笑している有様でした。榮一が驚いたのも無理はありません。日本ではまだ「士農

工商」ととなへて、武士と商人との間には身分の上に非常な隔りがあり、両者が一堂に会して談笑するなどとは思ひもよらず、又商人は自ら軽んじて、「うそももとでの中。」などと言つて平氣でいる者がたくさんいた頃であつたからです。榮一は、「将来我が国が盛になるには、どうしても実業の発展をはからなければならない。それがためには、実業道徳を振るひ起し、士魂商才で行かなければならない。」と考へて、それから約六十年の間、あらん限りの努力をそれに払ひました。榮一の手にかけた仕事は、銀行・海運・鉄道・紡績・織物・製紙・製鉄・造船・電気等の各方面にわたり、我が実業界の今日の隆盛は、其の功によるものがどれ程多かつたかわかりません。其の上朝鮮の開発や国交の親善に尽くすところが多く、又教育及び社会事業にたづさはつて生涯力を尽くしたので、功により男爵を授けられ、ついで子爵にのぼされました。更に昭和四年九十歳に達した時には、特に宮中に召されて御陪食の榮を賜はりました。実業家の地位を高めることを一生の願とした榮一にとって、これが彼一人の光榮に止らなかつたのは、いふまでもありません。

第九 公益【公益】

アメリカ合衆国の建国に大功を立てたフランクリンは、西暦千七百六年、北アメリカのボストンに生まれました。幼い時は、家が貧乏な上に兄弟が多いので、学校へは二年間行つただけでした。しかし、読書が好きで、小づかひ錢をためては本を買ひ、少しでもひまがあると、熱心にそれを読みました。十二歳の時から兄の印刷工場に出て、仕事を習ひましたが、子供ながらもよく働いて仕事をおぼえ、間もなく一人前の職工になりました。其の間にも知人からいろいろな本を借受けて、一日の仕事がすむと、それを読むのを楽しみにしていました。十七歳の時、フィラデルフィヤへ行つて、或印刷工場にやとはれ、そこで一生けんめいに働いていましたが、遂に二十三歳の時、独力で印刷業を始めました。それから長く此の地に住むこととなりました。今ではアメリカ合衆国屈指の大都会であるフィラデルフィヤも、フランクリンが来た頃には、まだ不便で落ちつきのない新開の田舎町に過ぎませんでした。フランクリンは其の頃こんな考を持つていました、「風の強い日に、ほこりが一人の目にはいつたとか、一軒の店先に飛込んだといふだけでは、大した事ではない。しかし、人口の多い町で、かうしたことが始終起るとすれば、もはや些細な事とはいはれない。だから、些細な事にも、ふだん心をとめるがよい。およそ人間の幸福といふものは、時たま起るすばらしい幸運よりも、かへつて日々に受ける些細な利便の方にあるものだ。」と。そこで、公共のためになると思つたことは、何事についても、熱心に自分の意見を發表して、人々の賛成を求め、共に市民の幸福を進め、平和をはかることに骨折りました。フランクリンは、フィラデルフィヤに図書館をこしらへました。始は知人と相談して、めいめいの蔵書を持寄つて、それを取りかへて読むことにしていましたが、後には会員をつのり、資金を出し合つて共同の図書館を設け、書物をたくさん買集めて備へつけ、会員に貸出しました。これにならつて、方々に同じやうな図書館が幾つも出来て、人々の知識を進める上に大そう役立ちました。フランクリンは又新聞紙を発行しました。其の頃の新聞紙の記事には、まちがひや有害な事が多かつたが、フランクリンは、正しい有益な記事を自分の新聞紙にのせたので、大そう世間のためになりました。又其の頃は一般に消防の方法が不十分でしたから、火事があると、きつと其の度に大きな損害がありました。そこでフランクリンは、火災を防ぐ方法を調べ、それを印刷して配りました。又有志の者

を集めて消防の組合を作り、火事があるとすぐにつけて消防につとめることにしました。それにならって消防の組合がだんだん出来て、フィラデルフィヤでは火事の損害が少くなりました。フランクリンは、又便利なストーブを発明しました。それは従来のものよりもよく部屋があたたまるし、燃料の薪も大そう節約になるので、多くの家庭に喜んで用ひられて、間もなく広まって行きました。其の外、フランクリンは寄付金を集めて此の地に始めて大学を立てたり、有益な日用暦を工夫して発行したり、街路を改良したり、病院を開いたりして、公益のために力を尽くしました。中でも電気を研究して、雷が電気の作用であることを証明し、避雷針を発明して広く世人を益したことは、有名な話であります。

第十一 職分【職業】

明治四十三年四月十五日、第六潜水艇は演習のため、山口県新湊沖に出ました。午前十時、潜航を始めると間もなく、艇に故障が出来て海水が浸入し、艇は十四名の乗員をとどこめたまま、海底深く沈んで行きました。艦長海軍大尉佐久間勉は、直ちに部下に命じて浸入して来る海水を防がせました。同時に浸入した水を排出させようとしたのですが、浸水のためすでに電灯は消えて艇内は暗く、かつ動力の使用も出来ないので、ただ手働ポンプをたよりに、必死に排水を続けさせました。艇はどうしても浮きあがりません。母艦が発見して助けに来るかも知れぬといふかすかな望はありましたが、海上との連絡が絶たれているので、それをあてにすることは出来ません。其のうちに悪ガスが発生して、呼吸は次第に苦しくなつて来ました。部下は一人二人とたふれて行きます。もうこれまでと覚悟した艇長は、司令塔の覗孔からもれて来るかすかな光をたよりに、鉛筆で手帳に遺言を書きつけました。遺書には、第一に天皇陛下の艇を沈め部下を死なせるに至つた罪を謝し、乗員一同がよく職分を守つたことを述べ、又此の出来事のために潜水艇の発達をくじくやうなことがあつてはならぬと考へて、特に沈没の原因や海底に沈んでからの様子をくはしく記してあります。次に部下の遺族についてのお願を述べ、上官・先輩・恩師の名を書連ねて告別の意を表し、最後に「十二時四十分」と書いてあります。艇が引きあげられた時、艇長以下十四人の乗員が、最後まで職分を守つて出来る限りの力を尽くした様子が、まだありありと残つていました。遺書は此の時、艇長の上衣から取出されたのでした。

格言 人事ヲ尽クシテ天命ヲ待ツ

第二十三 創造【発明工夫】

田中久重は久留米の人です。九歳の時、寺子屋で使ふ自分の硯箱に、ちよつとねぢを廻しておけば、誰もふたをあけられないやうな仕掛をして、人々を驚かしました。それは、ちやうど今の金庫のちやうに似た仕掛でした。久重の家の近所には、久留米絣の発明者井上でんが住んでいました。久重はでんの織出した絣に工夫を加へたら、絵模様のある美しい絣を織ることが出来ようと考へて、でんに其のことを話し、器具を工夫してやり、織方や下絵の書き方まで教へてやりました。それは久重が十五歳の時の事でした。でんは、それから珍しい柄を織出して、一そう久留米絣の評判を高くしました。久重は幼い時から箱・たんすなどの細工が上手でしたが、後には水仕掛のいろいろのからくりを造り、これをあやつつて見せて人々を喜ばせました。二十六歳以後は、大阪・京都へ上つて、勉強しましたが、其のかたはら、からくり人形を造り、これを動かして人々を驚嘆させました。其の

頃、黒船がしばしば我が近海にあらはれ、世の中が騒がしくなりました。久重は試みに汽船の模型をこしらへ、それを琵琶湖に浮かべて走らせましたが、なかなかよい成績でした。佐賀藩主鍋島直正がそれを聞いて、久重を召抱へ、汽船の建造を命じました。久重は二箇年かかつて船体を造り上げ、これに自分で造った蒸気機関をすえつけました。かうして出来た佐賀藩の凌風丸は、日本人の手に成った最初の汽船であります。其の外軍艦の汽罐を造つたり、大砲・小銃を鑄たり、汽車の模型をこしらへたり、電気機械を工夫したりしました。とりわけ時計の細工は得意で、其の苦心に成る万年時計は精巧を極めたものでした。明治になつてから、東京に出て種々の機械を製造し、又人々の註文に応じて工夫をしました。其の頃の事です、或人が、金はいくらでも出すから、精巧なからくり人形を造つてくれと頼みました。すると久重は、「あれは一時のたはむれにやつたので、精根を尽くして工夫すべき仕事ではない。自分は国家有用の物には何でも工夫ををしまないが、あんな慰み物は、もういやだ。」と言つてことわりしました。

第Ⅴ期

ヨイコドモ 上

(十一) (オコメ)【儉約】

コトシノオコメガデキマシタ。日本デハ、ヨイオコメガ、タクサンデキマス。オホムカシカラ、日本ノヒトタチハ、オコメノオカゲデソダチマシタ。ワタクシタチハ、一ツブノゴハンモ、ソマツニシテハナラナイトオモヒマス。

(十九) (ヒトニタヨルナ)【自立自営】

ネエサンガ、「サア、学校へ行キマセウ。」トイッテ、サソヒマシタ。私ハアワテテ、「ネンサン、ソノ本ヤチャウメンヲ、カバンニイレテクダサイ。」トタノミマシタ。オカアサンハ、「ジブンデナサイ。」トオッシャイマシタ。私ハ、ジブンデカバンノシマツヲシテ、ネンサントイッショニ、学校へ行キマシタ。

ヨイコドモ 下

五 カミノ舟【発明工夫】

正男サンハ、イロイロノモノヲ、考ヘテ作ルコトガスキデス。正男サンハ、舟ヲ作ラウト思ヒマシタ。木デ作ルノハムヅカシイノデ、グワヨウシデ作ルコトニシマシタ。グワヨウシヲタテニ二ツニナルヤウニシテ、ノリデウマクハッテ作りマシタ。小サイホヲ作ッテ、舟ニトリツケマシタ。カミデ作ッタノデスカラ、ソノママ水ニウカベタノデハ、スグコハレテシマヒマス。正男サンハ、オカアサンニラフノクヅヲモラヒマシタ。ソレヲハマグリノカヒガラニイレテ、火バチデトカシマシタ。トケタラフヲフデノサキニツケテ、カミノ舟ニヌリマシタ。モウ水ニツケテモダイチャウブダト、正男サンハ思ヒマシタ。ソコデ池ニウカベテミルト、舟ハカタムキマス。正男サンハ、舟ノソコニコマカイスナヲイレマシタ。コンドハ、マッスグニウカビマシタ。風ガ吹イテ来テ、正男サンノ舟ヲシヅカニ走ラセマシタ。

十五 コウエンノシバフ【公益】

正男サンハ、友ダチト町ノコウエンヘ遊ビニ行キマシタ。スベリダイデスベツタリ、ブランコニ乗ッタリシテ、タノシク遊ビマシタ。シバフガアリマシタ。モウ黄色ニナッテイマシタガ、キレイニ手イレガシテアリマシタ。友ダチハ、「アノシバフデ遊バウ。」トイヒマシタ。正男サンハ、「シバフニハイルナト書イテアル。ハイルノハヨサウ。」トイヒマシタ。

初等科修身 一

八 夏の夕方【勤勉】

夕方になりました。ねえさんが、「庭に水をまきませう。」といって、私を呼びました。夏が来てから、夕方に、水をまくのは、ねえさんと私のしごとになっています。私は、すぐに元気よくへんじをして、庭へ出ました。はだしになってみると、地面は、夕方になって、まだやけつくやうです。ねえさんは、ほうきとちり取りを持って来て、「私がはくから、水をくんでおいで。」といひました。私は、小さなバケツをさげて、水をくみに行きました。ねえさんは、せつせと庭をはいています。私は、その後から、勢よく水をまきました。庭をはいてしまふと、ねえさんが、「私もまきませう。」といって、バケツを取って来ました。今度は、二人でまきました。木の根もとにもかけました。くわだんの草花にも、水をやりました。草や木が、みんな昼間の苦しみを忘れて、生きかへったやうになりました。水まきをすますと、私たちは、だうぐをもとのところへかたづけました。ねえさんといっしょに、きれいな水をくんで、からだをふいたときには、何ともいへないよい気持ちになりました。

十三 一つぶの米【勤勉】

二宮金次郎のおとうさんは、金次郎が十四の時になりました。金次郎は、おかあさんの手つだひをして、小さな弟たちのせわをしました。さうして、よく家のためにはたらきましたが、まもなく、おかあさんも死んでしまひました。金次郎の兄弟は、別れ別れになって、よその家へもらはれて行きました。金次郎は、をぢさんのうちで、せわになることになりました。をぢさんのうちにいて、金次郎は、昼は田や畠をたがやし、夜は、なはをなったり、わらちを作ったりしました。悲しいことがあつても、つらいことがあつても、金次郎はよくしんばうしました。「家をおこし、国をさかんにするには、心をゆるめないではたらかなければならない。」と考へたのでした。ある時、金次郎は、川ばたのあれ地を開いて、なたねをまきました。なたねは少ししかありませんでしたが、あくる年の春になると、一面に美しい花が咲いて、春も終るころには、なたねがたくさん取れました。金次郎は、あぶら屋に頼んで、それをあぶらに代へてもらひました。夜のしごとがすむと、そのあぶらで火をともし、本を読みました。ある時、大水が出たことがありました。金次郎は、水のためにあらされてしまったところを、よくたがやし、すててあつた稲の苗を拾ひ集めて、そこに植えつけました。秋になると、それがよくみのつて、一俵のお米が取れました。「一つぶの米でも、次から次へと育てて行けば、たくさんの米になる。同じ土地でも、よく手入れをすれば、りっぱな田ができる。なまけると、草がはえて、土地があらえてしまふ。」と考へて、金次郎は、それからいっそう精を出してはたらきました。

十四 多聞丸【発明工夫】

楠木正成は、小さい時の名を、多聞丸といひました。ある日のこと、多聞丸は、自分のへやで、何かこしらへていました。わき目もふらないで、木を切ったり、けづったり、ほったりしていました。やがて、できあがったのは、小さなかめでした。多聞丸は、それを持って池へ行きました。近所の子どもたちが、四五人集って来て、「何をしているの。」とたづねました。「かめをこしらへたのだ。よく見てごらん。」「なるほど。うまくできている。」「このかめは、生きているやうに動くよ。動かしてみようか。」といって、多聞丸は、ぼんぼんと手をうちました。すると、かめは動いて、ぶくりと水の中へ沈んで行きました。「ふしぎだなあ。」「これはおどろいた。」みんなが目をみはっていると、多聞丸は、にこにこしながら、「今度は、かめを呼んでみよう。」といって、ばらばらとえさをまきました。するとかめは、ぽかりと浮いて、ぐるぐる泳ぎまはりました。子どもたちは、ただあきれてしまひました。「このかめは、ふなをつるよ。つらせてみようか。」みんなは、まさかそんなことはできないであらうと思ひました。多聞丸は、平気な顔で、かめをそばへよせて、静かに引きあげました。かめの腹には、一本の長い馬の毛が、結びつけてありました。さうして、その先には、ひれをつながれたふなが、ぴんぴんはねていました。「ああ、ふなが結びつけてある。」みんなは、始めてしかけがわかって、すっかり感心しました。

十八 圓山応挙【勤勉】

応挙は、京都のぎをんの社に出かけて行って、毎日、鶏の遊んでいるやうすを見ていました。じっと、鶏ばかりみつめているので、人はふしぎに思ひました。一年ばかりたってから、応挙は、鶏の絵をかい、社におさめました。お参りに来た人たちは、「よくかけている。」「まるで生きているやうだ。」といって、ほめました。ある日、やさいを売って歩くおぢいさんが通りかかって、しばらく見ていました。「鶏はいいが、草があるのはをかしい。」鶏と、おぢいさんは、ひとりごとをいひました。応挙は、そのことを聞いて、おぢいさんの家へたづねて行きました。おぢいさんは、「私など、絵のことは少しもわかりませんが、ただ、長い間、鶏を飼っていますので、羽の色つやが、きせつによつてちがふことを、ぞんじてをります。あの鶏の羽は、冬のやうですが、そばに夏の草がかきそへてあるので、ふしぎに思ったのでございます。しつれいなことを申しまして、まことにすみませんでした。」といひました。応挙は、「よいことを教へてくださった。」と、ていねいにお礼をいつてかへりました。応挙は、そののち、また鶏の絵をかい、あのおぢいさんに見せました。おぢいさんは、すっかり感心しました。それよりも、自分のやうな者にでもよく聞いて、絵をかかうとする応挙を、ほんたうにりっぱな人だと思ひました。

初等科修身 二

十八 くるめがすり【発明工夫】

でん子は、自分の着ふるした仕事着をつくろつていました。まだ十二歳ですが、ひじやうにりかうで、ほがらかな子どもです。七八歳の時から、はたおりのけいこをして、今では大人に負けないほど、上手になりました。つくろっている仕事着は、ひざのあたりが、すり切れかかっています。よく見ると、黒い糸が、ところどころ白くさめて、しぜんと、もやうのやうになつています。「まあ、おもしろい。」と思ひながら、でん子の目は、急に生

き生きとしました。仕事着の糸をていねいにときほぐして、黒と白との入りまじったぐあひを、熱心に調べ始めました。それから後は、御飯をたべるのも忘れて、一心に工夫していました。四五日たつてでん子は、おり残りの白い糸を、ところどころ堅くくくつて、「これを、このまま染めてください。」と、こうやに頼みました。染めができると、くくり糸をといて、縦糸と横糸とに、うまくとり合はせて、はたに掛けました。おつてみると、でん子の思つたとほりに、こん色の地に、雪かあられの飛び散つたやうな、美しいもやうが現れました。できあがつたものは、しまでもなければ、しぼりでもありません。今までだれも見たことのない、めづらしいおり物でありました。父母や近所の人たちは、目をみはつて、「これは、かはつたものだ。めづらしいものを思ひついたね。」といつて、ほめました。でん子は、いろいろながらを、次々に工夫しておりあげました。でん子の父は、「くるめがすり」と名をつけて、それを世にひろめました。「めづらしいがらだ。女の子が思ひついたのでさうだ。」「十二の娘が作つたとは、えらいものだ。」世間では、たいそうなひやうばんです。そのうちに、おり方を習ひたいといふ者が、出て来るやうになりました。

十九 工夫する少年【発明工夫】

でん子の家から少しはなれたところに、久重といふ少年がいました。細工をすることがすきで、毎日二階にとちこもつて、からくり人形を作つたり、ばね仕掛けのすずり箱を作つたりし喜んでいました。久重は、ときどき、でん子の工場へ遊びに来ました。でん子は、今では大人になつて、かすりをおるのにいそがしく、大勢の人を使つてはたをおつていましたが、久重は、それをおもしろさうに見ていました。ある日、この少年が、でん子にひきました。「ねえ、をばさん。かすりで絵をおることはできないでせうか。」「絵とは、もやうのことですか。」「はい。花でも、鳥でも、絵にかいたとほりを、もやうにおり出すのです。」「あなたは、小さいのに、えらいことをいひますね。」「なぜ。」「わたしは、ずっと前からそれを考へていました。しかし、絵をおるには、いろいろ仕掛けもいるし、工夫もむづかしい。わたしは、このとほりいそがしいので、まだそこまで考へるひまがないのですよ。」「それならひとつ、私が考へてあげませうか。」「さう、久重さんは考へることもうまいし、細工も上手だから、どうか頼みますよ。」久重は、すつかりのみこんだやうな顔をして、帰つて行きました。どんなに、考へることがうまいといつても、まだ小さな子どものことです。でん子は、頼みはしたものの、あてにはしないでいました。すると、十日あまりたつて、何かいろいろのものを持つた久重が、にこにこしながらやつて来ました。「をばさん、できました。」「何がさ。」「この前、約束したものですよ。」「さう。」といつて、持つて来たものを調べ、その説明を聞いてみると、でん子もびつくりしないではいられませんでした。「まあ、久重さん。一人で考へたのですか。」「ええ、ちよつと骨が折れました。」「えらいね。ありがたう。ほんたうにありがたう。」でん子は大喜びで、久重に何べんもお礼をいひました。それから、二人が力を合はせて工夫したので、りつばな絵がすりができるやうになりました。

初等科修身 三**五 農夫作兵衛【勤勉】**

伊予の筒井村に、作兵衛といふ人がありました。先祖の代から、借金がたくさんあつたので、その日その日のくらしも、なかなか骨がをれました。作兵衛は、少年のころから、何とかして借金を返し、家をさかんにしたいと考へて、一生けんめいに働きました。作兵衛は、父といつしよに、毎日田や畠を耕しました。夜は、おそくまでわらぢを作り、それを軒下につるしておいて、ゆききの人に売り、家のくらしを助けました。そのわらぢの丈夫なのと、はきぐあひのよいのが、ひやうばんになつて、いつもすぐに売り切れました。作兵衛が、このやうに夜昼一心に働くので、村の人たちは、「若い者の手本だ。」といつて、ほめました。骨をりのかひがあつて、長い間心をなやましていた借金も、残らず返すことが、できるやうになりました。親子の喜びは、たとへやうありません。まもなく、作兵衛は、村内の荒地を買ひ求めました。もとより村人のかへりみない、ひどい荒地のことですから、開くのにはたいへん手がかかりました。それでも、仕事のひまひまに、骨身を惜しまず耕して、やうやく作物のできるまでにしました。作兵衛は、わづかながらも田地持になつたので、大喜びでした。それにつけても、この田地をまったくの作り取りにすることは、気がすすみません。そこで、田地調べのあつた時に、この田地からも、税が納められるやうにと、藩の役人に願ひ出ました。藩の役人は、しきりに相談していましたが、作兵衛に向つて、「感心な心がけだ。しかし、あの田地は、まだお前の願ひどおりにはならない。」

「それは、また、なぜでございませう。」「聞けば、その田地は下田で、いくら作物もとれないさうだ。ほかに、よい田地を持つている者ならよいが、わづかこれだけでは、さしあたって税を納めるにさへ困るであらう。まあ、せいぜい手入れをして、四年なり五年なり、作つてみてから、申し出たらよからう。」と、しんせつにいひました。作兵衛は、「ありがたいおことばでございしますが、みいりの多い少いは、手入れしだいでございます。十分手入れをすれば、税を納めるのに困るやうなことは、ないつもりです。この村には、まだもつたない荒地がたくさんあります。これを荒れたままでおくのは、お国に対しても申しわけないことでございます。この荒地を耕したり、下田を上田にしあげたりするのは、農家としてお国への御奉公であります。私は、汗とあぶらで、かならず上田にしあげますから、どうか税を取り立てて、いただきとうございます。」と、まごころこめて申しますので、役人もその心がけに感心して、とうとう願ひを聞き入れました。そののち、作兵衛はよく働き、多くの田や畠を開いて、つひにりつばな農家になりました。作兵衛が四十五歳になつた時、ひどいききんがおそつて来て、たくさんの人が死にました。その時、作兵衛もまた、同じわざはひにたふれましたが、枕もとには、最後まで手をつけなかつた一粒よりのりつばな種麦の袋が置いてあつて、みんなを深く感動させました。

六 通潤橋【公益】

熊本の町から東南十数里、緑川の流れにそうて、白糸村といふところがあります。あたり一面高地になつていて、緑川の水は、この村よりもずっと低いところを流れています。また、緑川に注ぐ二つの支流が、この村のまはりの深いがけ下を流れています。白糸村は、このやうに川にとり囲まれながら、しかも、川から水が引けないところです。それで、昔は、水田は開けず、畠の作物はできず、ところによつては飲水にも困るくらいでした。村

人たちは、よその村々の田が、みどりの波をうつのを眺めるにつけ、ゆたかにみのつて、金色の波がうつつを見るにつけ、どんなにか、うらやましく思つたでせう。今からおそ百年ほど前、この地方の総荘屋に布田保之助といふ人がありました。保之助は、村々のために道路を開き、橋をかけて交通を便にし、堰をまうけて水利をはかり、大いに力をつくしましたが、白糸村の水利だけはどうすることもできないので、村人たちといつしよに、水のとぼしいことを、ただなげくばかりでした。いろいろと考へたあげくに、保之助は、深い谷をへだてた向かふの村が、白糸村よりも高く、水も十分にあるので、その水をどうかして引いてみよう、と思ひつきました。しかし、小さなかけひの水ならともかくとして、田をうるほすほどのたくさんの水を引くのは、なまやさしいことではありません。保之助は、まづ木で水道をつくつてみました。ところが、水道は、はげしい水の力で、一たまりもなくこはされ、かたい木材が深い谷底へばらばらになつて落ちてしまひました。けれども、一度や二度のしくじりで、こころざしのくじけるやうな保之助ではありません。今度は、石で水道をつくらうと思つて、いろいろと実験してみました。水道にする石の大きさや、水道の勾配を考へて、水の力のかかり方や、吹きあげ方などをくはしく調べました。とりわけ、石のつぎ目から、一滴も水をもらさないやうにする工夫には、いちばん苦心しました。さうして、やつと、これならばといふみこみがついたので、まづ谷に高い石橋をかけ、その上に石の水道をまうける計画を立てて、藩に願ひ出ました。藩の方から許しがあつたので、一年八箇月をつひやして、大きなめがね橋をかけました。高さが十一間余り、幅が三間半、全長四十間。さうして、この橋の上には、三すぢの石の水道がつくつてありました。始めて水を通すといふ日のことです。保之助は、礼服をつけ、短刀をふところにして、その式に出かけました。万が一にも、この工事がしくじりに終つたら、申しわけのため、その場を去らず、腹かき切る覚悟だつたのです。工事を見とどけるために来た藩の役人も集つた村人たちも、他村からの見物人も、保之助の真剣なやうすを見て、思はずえりを正しました。足場が取り払はれました。しかし、石橋は、びくともしません。やがて水門が開かれました。水は、勢こんで長い石の水道を流れて来ましたが、石橋はその水勢にたへて、相変らず谷の上に高くどつしりとかかつていました。望みどほりに、水がこちらの村へ流れ込んだのです。「わあ。」といふ喜びの声があがりました。保之助は、長い間、苦心に苦心を重ねた難工事ができあがつたのを見て、ただ涙を流して喜びました。さうして、水門をほとぼしり出る水を手に汲んで、おしいたいて飲みました。まもなく、この村にも、水田の開ける時が来て、百町歩ほどにもなりました。しだいに村はゆたかになり、住む人はふえて、藩も大いに収益を増すやうになりました。橋の名は通潤橋と名づけられ、今もなほ深い谷間に虹のやうな姿を横たへて、一村の生命をささへる柱となつています。

初等科修身 四

九 伊能忠敬【勤勉】

伊能忠敬は上総に生まれ、十八歳の時、下総佐原の伊能氏の家をつぎました。伊能氏は、代々酒を作るのを業とし、土地で評判の資産家で、いろいろ地方のためにもつくしていましたが、忠敬がついだころは、だいぶ家運がかたむいていました。忠敬は、どうかしてもとのやうにさかんにしようと思つて、一生けんめいに家業にはげみ、自分が先に立つて儉約しました。それで、家はしだいにはんじやうして、四十歳になるころには、以前よりも

ゆたかになりました。忠敬は関東に二度もききんがあつた時、その都度、家風にしがたつて、金や米をたくさん出して、困っている人々を助けました。また公職について、村のためによくつくしました。五十歳になつた時、忠敬は家を長男にゆづり、翌年江戸に出ました。そのまま引き込んで、らくをしようといふのではなく、もつばら学問をして世のため人のためにつくさうと、こころざしたのであります。忠敬はもとから天文・暦法がすきで、これまでも仕事のひまひまには怠らず勉強をしたので、その知識はかなり深くなつていました。ある日、高橋至時といふ天文学者をたづね、その西洋暦法にくはしいのに感心して、自分よりも十九も年下の至時の弟子になつて、教へを受けることとしました。それから数年間うまずたゆまず勉強しましたので、大いに上達し、特に観測の術にかけては、同門中忠敬におよぶ者がいないほどまでになりました。五十六歳の時、人跡まれな北海道の南東海岸を測量し、地図を作つて幕府にさし出しました。そののち、幕府の命を受けてあちらこちらの海陸を測量することになり、寒暑をいとはず遠方まで出かけて、とうとう全国の測量をなしとげました。その時すでに七十二歳に達していましたが、それからもからの自由がきかなくなるまで、日本地図を作ることにつとめて、つひに大中小三種の精密な地図を作りあげたのでした。わが国の正しい位置や形状が始めて明らかになつたのは、まったく忠敬が勤勉であつたたまものであります。

十 岩谷九十老【公益】

岩谷九十老は、石見国安濃郡川合村に生まれた。家は、世々地方指をりの豪農であつたが、九十老は生まれ落ちる時から母の乳が出なかつたため、あるまづしい農家の里子として育てられた。やや長じて家に帰つたのちの九十老は、すこぶるわんぱく者であつた。けれども、父はさすがに九十老の非凡なことを知つて別にこれをとがめず、かへつて、この子こそよく岩谷家をつぐ者であるといつて九十老を愛した。父は九十老をしつけるのに、ひたすら勤労に服させる方法を取つた。八歳の時、始めて村医について読み書きをまなばせたが、日課が終つて家に帰ると、すぐ奉公人といつしよに田や畠で働き、夜はかならず草履一足、または縄二十尋をなはせるといふ風であつた。二十六歳で家をつぐと、川合村四組総年寄役にあげられ、また濱田・福山・鳥取三藩の御用達を命ぜられた。九十老の一生を通じての事業は、この時に始つたのである。九十老の事業は、すこぶる多方面であつた。中でも、この地方の人たちが今でもその徳をたたへているのは、飢饉救済のことである。もともと、石見国は土地がやせ、五穀がゆたかでないから、一度天候がわるくなると、たちまち飢饉になつた。九十老が家を受けついで天保四年から、家をその子にゆづつた明治二年まで、米や金をほどこし、米の安売をして、難儀な人をすくつたことが数十回、世の人は九十老を呼んで、「米安様」とか、「米安大明神」とか、呼んだといふ。天保七八年の大飢饉には、くらをからにして、難儀な人人をすくひ、さらに福山藩の兵糧米五百俵の払ひさげを受けて、やつと、その年の急場をすくふことができた。明治二年の大凶作のりには、私財二万貫文をなげ出して、自分の子といつしよに全力をつくして救済につとめた。慶應二年のことであつた。幕末維新の機はせまつて人心も不安であつたをりから、引き続いての不作になやんだ難民は、集つて暴動を起し始めた。この知らせを受けると、九十老は、村内の小作人を集めて深く暴挙をいましめ、もししひて、かの暴民に加はらうとするなら、まづこの岩谷家をこはしてから行けといつた。けれども、だれ一人として、ことば

をかへす者はない。村の人たちにおわる気のないことを知った九十老は、当時郷人が生神として仰ぐ石見国の一の宮、物部神社の神職といつしよに暴民の群を待ち受けて、その前に立ちふさがった。九十老は、神職にさとさせたのち、声をはげまして、「今日のところは、私たち二人にまかせてもらひたい。それとも、きみたちが暴挙を続けるなら、たとへ、きみたちの槍先にかかっても、私たちは、ここを動かない。二人を殺すか、その竹槍を捨てるか、二つに一つの返答をせよ。」と、大声で叫んだ。この氣勢にのまれた暴民たちは、にはかに、しりごみし始めた。「一の宮の生神様と米安大明神に出られては、おまかせするよりほかはない。」だれいふとなく、かう返事をした。かうした救済の反面に、九十老は、一日も勤儉と貯蓄を怠つたことがなかつた。ほとんど毎年不作凶変にであつた九十老は、少しのひまもむだにせず働いただけでなく、遊んでいる者を見てはきびしくこれをいましめ、金のない者には金を与へ、職のない者には職を授けて、そのための出費とわづらはしさを少しもいとほなかつた。しかも自分自身は非常な儉約家であつた。九十老は、筆まめであり、ことに和歌を作るのがたくみであつたが、原稿はすべて帳面の余白または、ほごの裏にしたためた。「紙を粗末にする者は、身代をたもつことができない。」と、九十老は、つねに人をいましめていた。美衣美食をさけたことは、いふまでもない。「それ財を積まんと欲せば、必ず貧を守れ。貧を守れば、よく儉約を行ふを得、必ず富を致すを得べし。富を致すは、微を積み、大に至るを要とす。」とは、九十老がその子に教へたことばであつた。

十三 ダバオ開拓の父【公益】

明治三十六年、二百五十人ばかりの一団を先頭に、日本人渡航者が相ついで、フィリピンへ向かつた。フィリピンの首都、マニラからおよそ三百キロ北の高い山の中に、バギオといふ町を新しく建設するため、その手始めとして、けはしい山坂を切りひらき、三十五キロといふ長い道路をつくらうとしたのである。岩が落ちて来て、人がけがをする。できかかつた道は、すぐにくづれる。そのため、フィリピン人も、アメリカ人も、支那人も、これまで果すことのできなかつた難事業を今はしとげてみせようといふのである。日本人は、しんぼう強く、よく働いた。けれども、やつぱりこの仕事はなまやさしいことではない。何人も病気になつたり、けが人もたくさんできた。その上、日本人がいちばん困つたのは、急に食物が変つたことである。このまま仕事を続けていたのでは、みんな病気になつてしまふかも知れない。このやうすを知つて、義侠心を起したのは、マニラの町に住んでいた太田恭三郎であつた。恭三郎は、早く明治三十四年からマニラへ渡つて、そこで日本雑貨の輸入業をいとなんでいた。渡航した時は、まだ二十六の若者であつたのである。恭三郎は日本人渡航者たちの苦しみを見ては、じつとしていられず、フィリピン政府に相談して、これをすくふ工夫をするとともに、自分でれふしからいわしを買ひ求めて送ることにした。続いて梅干やたくあんづけなどをたくさんに送り届けた。このことを聞いた日本人たちは、「太田さんは、えらい人だ。太田さんは、ありがたい人だ。」と、心から感謝して元気づき、一生けんめいに働いたので、まもなくフィリピンの島に、ベンゲット道路といふりつぱな道路が、日本人の力でできあがつたのである。ところが、今度はその日本人たちに、仕事のなくなる時が来た。早くもこのやうすを見た恭三郎は、またしてもこれをすくつてやらうと思ひ立ち、「ダバオこそ日本人の新しく働くところだ。」かう考へて、行末を心配する日本人たちをはげましながら、まづ百八十人だけをダバオに送り、マニラ麻を作らせるこ

とにした。そのころ、ダバオは非常にさびしいところであつた。恭三郎は、まだ二十九歳にしかなっていない。三十八年には、二度ほど日本人をベンゲットからダバオへ送つたが、二度めの時には、自分もいつしよになつてミンダナオ島のダバオに移り住むことにした。さうして、いままでの輸入業をやめて、太田興業といふ新しい会社をつくり、広大な畠に麻を栽培し始めたのである。「日本人にマニラ麻がうまく作れるものか。」と、ばかにしていたアメリカ人やスペイン人をしり目にかけて恭三郎の会社はだんだん大きくなつて行つた。それだけでなく、腕のある日本人たちは、引っぱりだこで、みんなに麻の作り方を教へるやうにさへなつた。「ありがたい。これで日本人は、ダバオにおちつくことができる。」恭三郎は、心から喜んだのである。恭三郎の一生の望みは、どうしたら日本人が、海外でよくさかえることができるか、といふことであつた。この望みに向かつて、いつも全力をつくした。ダバオにおちついてのちも、せつかく苦心した麻が暴風のため一夜で倒されてしまつたことがある。その時恭三郎は、「こんなことで、負けてなるものか。」と、ををし、い気持ちをふるひ起して、日本人たちをはげましながら、一生けんめいになつて復旧につとめた。また、かんばつの時に困らないやう、畠に水を引く大きな工事を始めたり、いつも先々のことを考へながら、こまかく気をつかつて、仕事をした。恭三郎は日本人のために学校をつくつたり、慰安の設備をしたりした。その上、フィリピン人も日本人にならつて、しあはせになるやうにといふ大きな心から、病院を建てたり、道を開いたり、港をつくつたりした。大東亜戦争になつて、フィリピンの島々から、アメリカ人を追い払ふことのできる前、すでに恭三郎は、ダバオ開拓の父と仰がれる大きな事業をなしとげたのである。ダバオのミンタルといふところ、フィリピン群島第一の高峯アポを背にした緑深い山の上には、恭三郎のりつぱな記念碑が立っている。

第5章 朝鮮における脱朱子学的利他思想とその義利観 —沈大允の『福利全書』を中心に—

金 聖哲

はじめに

今日、韓国の経済がこのような高度成長を成し遂げてきたのは、1960年代以降、韓国政府が日本の政府主導型経済モデルを習い、大企業いわゆる財閥を中心に主導してきた結果である。その過程で、政府は財閥系大企業の営利活動を私益追求のための利己的な企業行動と捉え、社会的な公益を理由に掲げ、企業の利他的行動を導くために、一方的に自律や規制を施行してきた。しかし、その一方で、政府の権益を得るために一方的な政府主導型の政策を推し進めようとしていることも事実である。このような韓国政府の企業活動への一方的な介入をよしとする考え方の背後には、伝統的な朱子学に根ざしている利他思想と義利観の名残りと考えられる。

時代を遡れば、12世紀に朱子が修養を通じて聖人に至ることを目指して確立した新儒学である朱子学が朝鮮に輸入された。この朱子学は、特に統治理念としての役割を果たし、政治、経済、社会思想の中心的な位置を占めていた。しかし、朝鮮中期を経て後期に至ると、「礼学」の傾向が強くなり、このような思潮により道理を求める理義を重視したあまり「利」を求める物欲を軽視するようになった。このような朱子学的な人欲否定観に基づき、特に商人らの利益が制限された。このようにして農業中心の経済観と士・農・工・商という身分秩序が、固着化されていった。特に、商業が身分の底に位置づけられた理由の一つは、商人の「利」が官僚である士大夫の「義」を破壊するとみる朱子学的義利観が少なからず影響しているからである。つまり、朱子学者たちは「利」は「義」と両立すると捉え、「利」を捨てれば「義」を得られると考えたのである。しかし、実際は商人の「利」を統制しつつ、自らの封建的な身分秩序を維持しようという官僚の意図が潜んでいるのである。つまり、朝鮮の官僚たちと私商すなわち政府と商業の関係において、政府は利権のために商業を動かしていたのである。しかしながら、このような朱子学的な義理観は、本来伝統的儒教で志向している「利」と「義」の調和を否定することとなり、脱朱子学者たちのみならず、朱子学者たちもその矛盾を認めていた。さらに、一部の改革的な学派と学者によって朱子学的な義利観を克服しようとする傾向と現れていた。そこでこのような事実と関連し、これまでの朱子学に最も批判的であった朝鮮後期の思想家である沈大允(シムデユン 1806~1872年)に注目し、まず、朱子学的利他思想とその義理観の意味を考えてみたいと思う。さらに、韓国の思想家の実例として、朱子学を庶民の害毒的な要素と批判した沈大允の代表作である『福利全書』を取り上げることにする。

本稿では、前述した問題意識を念頭に置き、利他思想に関する経済思想的な考察を行う。まず、利他思想の意味を再確認し、特に儒教的利他思想における「仁」と「義」を「利」と関連で、その思想がどのように韓国で受容され、また変貌を遂げたかを検討する。その前提として、儒教的利他思想の原点に立ち戻り、孔子から朱子の時代に至るまでの義利観の変遷を、人間の本質や経済倫理と関連させて確認したい。とりわけ、朱子学の義利観が、なぜ韓国に根ざすようになったのか、その経済思想史的な背景を探る。そして、沈大允が儒教(儒学)をどのように再解釈し、新たに展開したのかを、沈の『福利全書』を中心に検

討する。その上で、沈が朱子学的義利観を克服していく過程を、沈の「與人同利」思想を中心に考察し、さらに、沈の義利観がどのように利他思想と結びついていったかを検証してみたい。

2 朝鮮における朱子学的利他思想と義利観

2.1 朝鮮における朱子学的利他思想とその背景

本来「利他」というのは、自己が積んだ功德を他者に施して、すべての衆生の幸福と安楽のために佛の教戒によって努力すると言う意味の仏教の用語である。つまり自己が悟りを得て、人々を救済し、利益を与えることである。仏経ではこれと関連し、自己を慈しんで、他者を尊び、憐れむという慈悲を重視した。

一方、儒学で「利他」というのは、自分の修養に励んで徳を積み、その徳で人々を感化して、世を正しく治めるという「修己治人」を意味する。ここで人とは一般的な人だけでなく、自分以外の相手すなわち他者を示している。その思想は倫理と政治及び経済を中心とし、しかも三者は必然的に一体であった。したがって儒教のいう「利他」すなわち「修己治人」は自分と他者がお互いに出会う現実社会の中で、道德の強い実践性を備えるようになったのである。

では、儒教における「修己治人」の核心思想は何であろうか。まず、孔子は「仁」を強調する。「仁」というのは、古来、祖先崇拜をふまえ、それを「孝」の徳として理論化したものである。それを人間関係の中で考えれば、人を愛するという意味の「仁愛」と言ってもよいであろう。そして孔子は「仁愛」の根本を「孝行で柔順だなといわれること、それが仁の徳を完成する根本といってもよい¹」といい、親子関係すなわち家族関係から捉え、その「仁」を中心に親に対する「孝」と子に対する「慈」を通じて、家族関係中での上下関係を尊重しようとした。さらに「仁」を「孝」に結び付けられることになり、家族関係から政治的、社会的、経済的關係へと拡大して行ったのである。

孔子の思想を継承した孟子は、性善説、四端説、養気論を説くことによって孔子の「仁」に「義」を付け加えて「仁義」といい、「仁は人の安宅なり。義は人の正路なり²」といい、「仁」と「義」を対照させた。つまり「仁」は人間の内面的な心であり、「義」は人間の外向的な行動であるため、相対的であるというのである。しかし孟子は、「仁」と「義」は人間の本心から発すると考え、相互補完的な徳であると認識している。さらに「仁」は家族の規範により、「義」は社会の規範によって実践が可能になるとみた。

孔子と特に孟子の性善説を正統として受け入れた朱子は、儒学本来の「修己治人」の源流に戻り、人間と宇宙に関する形而上学的原理を探究し、人間の道德的行為を説明しようとした。儒教の核心思想である「仁」と「義」を「明德」とであると解釈し、物と人間に内在している本性という意味としていわゆる「天理」すなわち「理」を主張した。そしてこのような「理」をもって欲望を捨てて、心の修養である「居敬」と事物の道理を知る「窮理」を実行すれば、聖人に至ることができると考えた。朱子はその道德の具体的な実行の一つとして「家礼」を提示した。「家礼」と言うのは、朱子が儒教の古典に見える儀礼を研

¹ 貝塚茂樹『論語』学而（中公文庫 2009）10 頁。

² 貝塚茂樹『孟子』離婁章句上（中公公論新社 2006）152 頁。

究し、冠・婚・喪・祭の四礼の礼制において祖先崇拜の思想を中心に、分かりやすく実践しやすい家の礼の基準を提示した書物であった³。

このような朱子の学問すなわち朱子学は、13世紀、朝鮮の建国とともに統治理念として輸入された。朝鮮政府は朱子学と同じように「修己治人」を掲げているが、特に「修己」の根本思想として「孝」を強調し、それは朝鮮朱子学者たちのみならず、すべての階層に普及させた。さらにこれまでの仏教風の冠婚葬祭の儀礼を清算するために朱子の「朱子家礼」を導入し、「孝」を中心とする家父長的な身分秩序を確立しようとした。

一方、朝鮮中期の社会的な安定期を基盤に、朝鮮朱子学者たちは自分の内面の「理」とともに「居敬」による心の修養すなわち「道学」を重視し、さらに「理学」へと展開されたが、このような道德思想の強調は朝鮮の中央集権的体制を合理化する大義名分となった。しかし壬辰倭乱（文禄の役、1592～1593年）と丙子胡乱（1636～1639年）を経て、朝鮮の中央集権的な社会体制は動揺し始めた。これに対し、朝鮮政府は農業とともに特権商人いわゆる市廛商人を中心に工・商業の発達を積極的に主導しつつ、国家経済を立て直そうとした。しかし朝鮮政府が工・商人の利益に過度な介入をしたことで、農本経済体制に後戻りし、結局、朝鮮の国家経済は王室や政府の利権を中心に動くこととなった。また、「朱子家礼」を利用した「孝」の強化により、崩壊している社会秩序を維持しようとしたが、むしろ自己家族中心主義、さらには家父長的集団主義を助長するようになった。しかしながら朝鮮朱子学者たちは「朱子家礼」を再解釈し、それ以前よりさらに厳格な家族関係法を作り出した。こうして朝鮮朱子学の礼学化が顕著となり、さらに「礼学」とも呼ばれるようになった。このような「礼学」は人間における性の「理」と情の「気」の在り方を巡る「理気論」さらには党争とも結び付き、政治権力の対立をもたらした。その結果、朝鮮政府と官僚たちから疎外された庶民たちの葛藤が表面化することになった。しかしこのような社会的危機が触発していたにもかかわらず、朝鮮朱子学者たちは道德と名分を重視した空理空論に明け暮れ、さらに庶民たちには厳格な道德が強制されていた。このような朝鮮朱子学者たちの行為を強く批判し、実利を重視した実学派と江華学派の学者たちは、西学と陽明学を受け入れ、さらに朱子学の経学を批判することで、他律的道德から自律的道德へと向かう新道德思想を構築し始めた。

2.2 朝鮮における義利観とその背景

儒教では孟子が「義」と「利」を峻別して以来、両者は対立的な関係にあった。しかしながら、儒教で「利は義の和」といったように両立的な関係に捉えられていたことも事実である。

まず、『大学』で「国は利を以て利と為さず、義を以て利と為す⁴」といい、私利と公義の対立を見ることができる。孔子は『論語』で「利を見ては義を思ふ⁵」と言及し、「利」に対する「義」の重要性を教えた。また、「利に放りて行えば、怨み多し⁶」といい、「義」と「利」を価値基準として提示している。

³ 加地伸行『儒教とは何か』（中公新書 2011） 204 頁。

⁴ 金容治『大学・中庸』大学 伝十章（岩波文庫 2012） 77 頁。

⁵ 貝塚茂樹『論語』憲問（中公文庫 2009） 394 頁。

⁶ 前掲書 100 頁。

孟子は孔子の思想を継承しながらも、人間の本性は善であるという「性善説」を主張し、人間の本心には「仁義」を志向する心とともに「欲」を志向する心が内在すると見ている。孟子は人間の本心と「欲」に関連し「心を養うは欲を寡なくするより善きはなし⁷」と述べている。つまり人の本心すなわち「仁義」を養い育てるには、「欲」を少なくするよりも善い方法はないと「仁義」に対する寡欲を指摘しているのである。さらに孟子は「人の身に於けるや兼じく愛する所なり。兼じく愛する所は則ち兼じく養う所なり。尺寸の膚も愛せざることなければ、則ち尺寸の膚も養わざることなきなり。其の善不善を考うる所以の者も、は豈他あらんや。己に於いて之を取るのみ。体に貴賤あり、小大あり。小を以て大を害すること無く、賤を以て貴を害すること無かれ。其の小を養う者は小人たり。其の大を養う者は大人たり⁸」と述べ、人間の「利」を制限し、人間の「仁義」の生活、すなわち道徳的生活に入るべきであるといういわゆる「寡欲説」を提示している。このように孟子は「性善説」を基に「寡欲説」を展開し、「仁義」と「利」を対立的な関係に捉えている。

一方、荀子は孟子の「性善説」を否定し、人間の本性は悪であり、善は後天的な行為から生まれるものとする「性悪説」を主張する。さらに人間の「欲」を肯定するが、自然のままに放置しつつも、道徳によって操る必要があるという「欲望抑制説」を唱えている。このようにして荀子は、孟子の「寡欲説」を批判し、「欲」を肯定しつつ義利観を展開させていく。荀子は「義と利とは両有する所なり⁹」といい、人間は「義」と「利」を両有すると考え、人間に関連し「義」と「利」の調和を目指している。しかしながら、荀子は孔子のように「義」を重んじ、「利」を軽んじるという視点から「義」の重要性を強調する。したがって儒教では「義」と「利」を、対立的及び両立的にみているが、「義」とともに「利」を認定したことは事実であるといえよう。

ところが、宋代の朱子は孟子の寡欲説をさらに展開した。朱子は『大学章句』で「明德を明らかにする¹⁰」という言葉を入欲の妨害を除くことと解釈する。「明德」とは天から与えられた本性の「徳」をいい、物と自然に内在している本性として「天理」という。「人欲」とは本性の正当な発現を妨げるものをいう。さらに朱子は「仁義は人心の固有に根ざす。天理の公なり。利心は物我の相形に生ず。人欲の私なり¹¹」と述べる。つまり、朱子は「仁義」と「利心」に対し、「理」を基準にして弁別し、「仁義」は「天理の公」として肯定し、「利心」は「人欲の私」として否定しているのである。さらに、朱子は「天理を存し、人欲を去る¹²」と言及し、ついに天理を保存し、人欲をあるべからざるものとして無くし、「無欲説」を展開していく。その結果、このような無欲説は義利観と結びつき、経済的な「利」の「欲」に対して全く無関心な状態になり、道徳的な「義」のみを志向することになった。

朝鮮では朱子学の影響を受け、無欲論に基づき「仁義」と「利」を分け、これを道徳に導入しようとしたが、朝鮮初期の朱子学者である權近（クォングン 1352～1409 年）は「仁」

7 小林勝人『孟子下』尽心章句下（岩波書店 1994）430 頁。

8 前掲書『孟子下』告子章句上 257 頁。

9 『荀子』大略「義與利者人之所兩有也」 芹川弘道『経済の倫理・宗教にみる比較文化論』（大修館書店 1994）199 頁。

10 金容治『大学・中庸』大学 伝一章（岩波文庫 2012）31 頁。

11 『孟子集注』梁惠王章句上 陶徳民、見城悌治、桐原健真、姜克實『近代東アジアの経済倫とその実践—洪沢栄一と張謇を中心に』（日本経済評論社 2009）37 頁。

12 大濱皓『朱子の哲学』（東京大学出版会 1983）211 頁。

と「義」を「理の当然」と捉え、「利」と対照させた。「理の当然」は当然な道理と「義理」を指す。権近にとって伝統儒教の「仁」と「義」の内容は利害の問題を超越し、当然な道理としての「義理」を求める道德であった。権近はその一例として「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり¹³」という孔子の正名(名分)思想を取り上げている。つまり君、臣、父、子という名があれば、それぞれの名に合う役目を果たすことのように「仁」と「義」という道德行為は、道理を具体的に実践する方法であるといえよう。ここで権近は「仁」を「仁愛」と解釈ではなく、正名思想と結び付け、「理の当然」として説明している。このように権近が「仁」を「理の当然」として「義務」を強調している点は、それ以降、朝鮮朱子学の義務主義的な道德論を展開させる土台となった。さらに朝鮮中期、個人の道德性の修養を重視した李晃(イファン 1501～1570 年)は、儒教の伝統である「利は義の和である」という教えについて「利は義の和であるが、結局、利と義はお相対立し、一方が減れば他方が生じ、一方が勝てば他方が負ける。その理由は人の心が両者のどちらかに影響を与えるからである¹⁴」と述べている。さらに「…これはすなわちためにするところがあつて為したのであり、その心はすでに義と背馳してしまつて、そのいわゆる利は、自然に義が和するという意味の利ではなくなっている。朱子が義の和を以て利の意味を解釈し、またためにするところがある(有所為)の三文字を以て利を謀る害毒を説破した所以である¹⁵」と説いている。このように李晃は「利」というのが「義」の和であることを理論的には肯定しているのである。孔子が「君子は義に喻り、小人は利に喻る¹⁶」といったように、「大義」を志向し、「小利」を避ければ、「公利」を得ることができるであろう。つまり「利は義と和である」という教えは間違いではないと考えられる。しかしながら、李晃は人間の動機に注目し、「利」は「義」と調和できないと拒否している。特に「有所為」為すものは「利」として否定され、本来の儒教の「利は義と和である」という結果主義と対立し、結局、道德理想主義に進む契機となったのである。このような朝鮮朱子学は、政府における中央集権体制を守るための名分と農本経済の奨励とともに工・商業の利益を徹底に統制しつつ、実利を得る一挙両得の義利観に変質するようになったといえよう。

3 沈大允の『福利全書』における脱朱子学的利他思想とその義利観

3.1 沈大允の生涯と『福利全書』

沈大允は、19 世紀に経学においてかなりの業績を残したものの、朝鮮ではその学問的業績は正当な評価を受けず、その名さえ世に知られていなかった。沈がはじめて注目されたのは、日本の朝鮮学研究者である高橋亨(1878～1967 年)が、沈を陽明学者として紹介した 1953 年になってからである。その後、『韓国経学資料集成』の編纂過程で、ようやく沈の名が表舞台に登場するようになった。

沈大允の生涯については、1806 年、朝鮮の名門党派の一つである少論派の出身であったことぐらいで、詳しい記録がほとんど残っていない。沈は名門の出で家柄は良かったけれども、

¹³ 貝塚茂樹『論語』顔淵(中公文庫 2009) 336 頁。

¹⁴ 한국국학진흥원국학연구실『韓国儒学思想体系Ⅶ—経済思想編』(한국국학진흥원 2002) 210 頁。韓国語を日本語で翻訳したものである。

¹⁵ 小倉紀蔵『朱子学化する日本近代』(藤原書店 2012) 86 頁。

¹⁶ 貝塚茂樹『論語』里仁(中公文庫 2009) 103 頁。

曾祖父の代の時、党争によって廢族となり、その後、経済的貧困を一家の家長として解決するために安城邑同里の都会地で商店を開き、その後、工房と藥屋などを営んだ。当時の朝鮮の士農工商という身分階級社会では工業と商業が蔑まれていたが、それにもかかわらず、名門出身の家柄であった沈は、学者の身分を経済的に維持するために商業への従事を余儀なくされた。こうした有為轉變の家庭状況にあったにもかかわらず、沈は学問をこころざし、37 歳から 57 歳にかけて、四書や五經の研究と經学に関する著述作業に没頭しつつ、67 歳に他界するまで『論語』(1851 年)、『詩經集傳辨正』(1859 年)、『東史』(?) など約 110 冊の、經学や歴史などに関する著作を残した。

その代表作の一つが、『福利全書』(1862 年)である。沈が 57 歳に自分の哲学と思想を体系化した『福利全書』は、儒家の經傳の要旨を簡略しつつ、分かりやすく解説し、これを指導層や民衆の生活指針になるように著した書物である。この『福利全書』は、自序文と本文 12 章で構成されている。1 章から 3 章までは自然の原理を、4 章から 6 章までは人道を、7 章から 8 章までは鬼神の原理を、9 章から 12 章までは禍福の逸話を取り上げ、沈の自然觀、人間觀、利欲觀そして神觀を明らかにし、さらに、道徳的行為の実践によって「福利」を考証的に論じている。

3.2 沈大允の『福利全書』における脱朱子学的利他思想

本来、儒教では前述したように「利他」のテーゼで「修己治人」を掲げ、その根本思想として「仁」、「義」、「理」、そして「孝」を提示した。しかし沈は「利害禍福」という言葉の略で、「害」と「禍」を避けて「福」と「利」を求めるといような「福利」を新たな「利他」のテーゼで掲げ、その根本思想として「利」を主張する。ここで「利」は、人間本来における「欲」の追求から得られるものを指す。

沈はこのような「利」が家族関係から生じると考え、親に対する子孫の「孝」に注目する。朝鮮朱子学で「孝」は、親に対する祭祀の形式と内容を厳格に規定していた。そのため、親に対する子孫の義務と奉仕が過度に要求されることとなり、子孫の「利」が軽視されるという弊害が生まれていた。この朝鮮朱子学的祭祀厳守に反発する一部の民は親に対する祭祀を否定し、ついに親子間の伝統的な秩序が崩壊されつつあった。

このような「孝」の一般的な風潮に対し、沈は「孝」の意味を伝統儒教の「礼」と関連させながら再解釈し、その道徳的基準を見直した。その一例として沈は「親に仕える道は、生きている時に仕えることを礼に従って行い、亡くなれば葬ることを礼に従って行い、祭祀することを礼に従って行うことであるから、感情に従う道が過ぎた行いは礼ではない。各自において自己の分際に従って私利的に行うことを礼という¹⁷⁾」と述べている。つまり「礼」を再規定し、親に対する子孫の「孝」の基準を現実に合わせて見直し、さらにこの「孝」に子孫の合理的な「利」を結びつけ、「孝」の基準を提示したのである。

しかし沈はこのような「孝」を通じて、家族内における「孝」の現実的な問題を解決したとしても、それだけでは十分ではなく、時として家族外における他の家族と集団すなわち人間社会の中で、「名」(名譽)と「利」(利益)の追求を巡る争いが生じると考えた。沈に

¹⁷⁾ 김성애「沈大允의 『福利全書』校註飜譯」(고려대학대학원석사논문 2009) 84 頁。韓国語を日本語で翻訳したものである。

とって「名」と「利」の追求こそ、人間の本来の「欲」である。さらに「名」と「利」を得て、家族の永続と自己の生存を成し遂げなければならないと主張する。しかしながら、沈は「名」と「利」の関係について「己の利だけを求めようとし、他人に害を加えれば己の名を失い、己の名だけを求めようとし、己に薄ければ己の利を失う¹⁸⁾」と指摘している。つまり、「名」と「利」の関係は、どちらか一方にだけ偏って求めようとするれば、「名」も「利」もともに失うものであるといえよう。

沈はこのような「名」と「利」の調和に関する問題について、「中庸」の必要性を主張する。「中庸」とは、孔子が「中庸の徳たる、それ至れるかな¹⁹⁾」と教え示したように、「中」は過不及がないこと、「庸」は平常という意味で、完全無欠の徳を示している。この「中庸」の意味について、沈は「中とは物事の上端と下端を審らかにし、その中を得ることであり、…庸とは恒常であり、度が過ぎれば平常ではない²⁰⁾」と述べ、「欲」の永続の視点で「中庸」の意味を再解釈している。さらに、「中庸」を物事のどちらにも偏らず、常に中の道を目指すものとして捉え、「中庸とは、大きな善であり、至高の利であり、福の集積である。中を守れば、常に和するため、中庸は中和である²¹⁾」と改めて定義している。つまり「中庸」をもって物事を行えば、常に「名」と「利」のどちらにも偏らず、両者ともに成し遂げられ、その結果として「福」が得られるのである。したがって「中庸」とは沈の言う「利」の具体的な実践方法であるといえよう。

3.3 沈大允の『福利全書』における脱朱子学的義利観

沈における思想の中核にあるのは、人間の本性は「欲」であるという「性欲説」に基づいた「利」という考え方である。沈は「利は善であり、害は不善であり、物を利することを善といい、物を害することを悪」²²⁾と述べている。つまり人間と万物において「利」を得ることは「善」の実践の結果として捉えているのである。特に沈が人間の利害を善悪の基準として見ている点においては、人間の快樂と苦痛を善悪の規準とみている功利主義さらにそれを基にした資本主義的思惟が見られる。

しかし、前述したように朝鮮朱子学では「利」は「義」という道德概念と対立関係にあり、道德の統制下に位置付けられている。特に、朱子学では「天理」と「人欲」を対立的な関係と捉えている。このような朱子学に反し、沈は「人が利を好み、名を好むことは、天性である²³⁾」とし、「欲は、天が命じた本性である²⁴⁾」と「利」と「欲」を肯定的に評価する。さらに、「人は欲がなければ、木石と同じである。言動とともに、視覚、聴覚、思考、食、性は、欲があるから作用するのである。人として欲がなければ、どうして人と言えようか²⁵⁾」と明言し、「利」と「欲」を結び付け、「天性」と「利欲」を両立的な関係と主張している。

¹⁸⁾ 김성애「沈大允의『福利全書』校註翻譯」(고려대학대학원석사논문 2009) 66頁。

¹⁹⁾ 貝塚茂樹『論語』雍也(中公文庫 2009) 175頁。

²⁰⁾ 前掲書「沈大允의『福利全書』校註翻譯」66頁。

²¹⁾ 前掲書 65頁。

²²⁾ 前掲書 65頁。

²³⁾ 前掲書 65頁。

²⁴⁾ 前掲書 65頁。

²⁵⁾ 前掲書 65頁。

しかしながら、沈は「公利」と「私利」をそれぞれ「善」と「悪」として分別し「利」という本質からして、他者が利すれば自己には害となり、自己が利すれば他者に害となるため、双方ともに満足させることは難しい²⁶と、自己と他者との「利」の争いすなわち争利を指摘している。

そしてこの争利に対する解決の方法として提示するのが、「忠恕」の精神である。「忠恕」とは、孔子が「吾が道は一以てこれを貫く²⁷」と教え示し、この「一貫」の意味を曾子が「夫子の道は忠恕のみ²⁸」と定義していることから分かるように、孔子が生涯追求し続けた根本的な道德原理である。「忠」は自己の良心に忠実なこと、「恕」は他者に対して思いやりを持つことを意味し、「忠」と「恕」とが一体となって「仁」を構成している。この「忠恕」の真の意味につて、沈は原始儒教におけるすべての徳の中心である「仁」と捉え、「自己が欲せざる事を、他者に行わないようにすることを恕といい、自己が進めるところを他人に譲り、行うようにすることを忠という²⁹」と改めて定義している。つまり、「欲」の均衡の視点で「忠恕」の意味を再解釈しているのである。特に「利」について、「他者とともに利すること」の大切さを強調し、自己の「利」を欲する心を抱きつつ、他者とともに「利」を得るという「與人同利」を提示している。さらに、具体的な実践方法について、「己を利しても他を害することが甚だしければ、あるいは他を利しても己を害することが甚だしければ、これを行ってはいけない。我と他の利害の権衡を図り、一方に偏らないようにするのが至公之道である³⁰」と説き明かしている。言い換えれば、自他の利害関係を精密に計り、均衡を図って至公となる道いわゆる「至公之道」を実践し、自己、あるいは他人が一方的犠牲を払うのではなく、相互補完的に「利」を得ることを目指したのである。それが、「忠恕」の道として、最高の善すなわち沈の言葉を借りれば、「道德の法」といえよう。

おわりに

本稿では朝鮮における朱子学的義利観と利他思想を概観し、それを克服しようとする思想的動きとして、沈大允の『福利全書』を取り上げ、朝鮮の儒教的思想における沈の脱朱子学的利他思想と義利観の意味について考察した。

まず、本稿で言う「利他」とは、儒教的利他としての「修己治仁」を意味するが、その思想の核心的要素は、時代の変遷とともに「仁」、「義」、「理」へと変化し、さらに朝鮮において「孝」が重要な位置を占めた。このような利他思想は民を統治する政治的基盤として重要な役割を担当したが、特に朝鮮の政府は「孝」を重視しつつ、その実践方法として「朱子家礼」を奨励しつつ、家族及び家族国家制度の強化を目論んだ。また、本来、儒教では「利は義の和である」という理念に基づき、「義」と「利」の「和」が追及されたが、孟子による対立的な「義利観」の影響を受けた「義」中心的な朱子学的道德が朝鮮に導入されると、経済思想も「義」の道德を中心とするものへと変貌を遂げて行った。その背後には、「朱子家礼」における「孝」の重視により、道德の価値基準が高くなり、その結果、

²⁶ 김성애「沈大允의『福利全書』校註翻譯」(고려대학대학원석사논문 2009) 67 頁。

²⁷ 貝塚茂樹『論語』里仁(中公文庫 2009) 102 頁。

²⁸ 前掲書 103 頁。

²⁹ 前掲書「沈大允의『福利全書』校註翻譯」69 頁。

³⁰ 前掲書 73 頁。

経済的な「利」を軽視することとなったからである。このような思潮が、王権と官僚の中央集権的な秩序体制のための手段として有効であったからで、事実、そのような中央集権化の過程で、農本経済制度の強化と工・商業への政府の積極的介入とが進行していった。

このような朝鮮の朱子学的な義利観と利他思想に対抗しようとした沈は、『福利全書』で、人間の本性を「利」と「欲」と捉え、利他思想を「福利」として再定義し、朝鮮の「孝」の思想に「利」を結び付けて「孝」思想の再構築をしようと試みたのである。さらに、「天理」と「人欲」は対立すると見る朱子学に対し、沈は「天理」と「人欲」の一致を主張した。さらに「利」の思想において、沈は「義」(道徳)と「利」(経済)とを結び付け、その過程で生起する「争利」に対しては、「與人同利」の考え方で対処できると主張した。このように沈は、学問的地平において、朝鮮の道徳と経済思想の一致を図ったわけである。

今後、韓国における道徳と経済思想の関係を研究する場合、沈大允の『福利全書』は今まで以上に注目されるべきだと考えられる。それと同時に、比較思想的な視点から、沈大允の「與人同利」思想に対する理解をさらに深めるには、沈と同じように日本で道徳と経済思想の一体化を目指した人物の一人として、「日本の資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一（1840～1931年）とその主著の『論語と算盤』を取り上げることが必要であり、両者の比較研究は数多くの有益な視点を提供してくれると思われる。

第6章 新聞記事から見た中国の腐敗対策の問題点

陳 玉雄

中国共産党総書記¹に就任した習近平氏は、12月15日の就任挨拶で腐敗撲滅に賭ける強い意志を示した。また、就任後初めて開かれた中央政治局の集団学習会の場で、「多くの事実が物語っているように、腐敗問題が深刻化すれば最終的に必ず『亡党亡国』をもたらす」と、危機感を隠さなかった。中国共産党・政府は今回こそ本気で取り組んでくれるのではないかと、国民の間にはこれまで以上に期待が広がっている。これに応えるように、習総書記が就任してから一週間で早くも地方高級幹部12人が摘発された。中には、副大臣・副省長クラス²、四川省内ナンバー3の同省共産党李春城副書記も取り調べを受けている。

中国共産党・政府はこれまで、自らの正当性を主張するため、腐敗摘発キャンペーンを繰り返し展開してきた。しかし、その効果はほとんどないか、一時的なもので終わったように見える。腐敗問題は、解決される気配が一向に見られない。このことは、中国共産党・政府が腐敗問題の解決に本気に取り組んでいないか、これまでの取締りをはじめとする腐敗対策に問題があるか、を示している。本稿は、『人民日報』の検索記事を概観した上、香港紙『鳳凰週刊』の報道集『中国貪官録』に取り上げられた摘発事例を初歩的に分析し、腐敗問題の原因と解決のヒントを探る。

1. 中国における腐敗摘発キャンペーン

表1は、記事タイトルで「腐敗」をキーワードに検索した『人民日報』の記事の数とその分類を示したものである。分類は、筆者が記事の内容に基づいて設けた独自の基準によるものである。タイトル検索では、記事は7年間弱で計245件（重複、植物腐敗などの非関連記事を除く）、年間平均35件でおよそ10日間に1件の頻度となる。本文検索では、記事は計4,454件、年間平均636件で1日に約1.7件の計算となる。本文検索記事は、重複、植物腐敗などの非関連記事を含めているが、これらを除いても1日あたり少なくとも1.5件があった。中国共産党の機関紙としての『人民日報』は、共産党の政策を宣伝し、その正当性を強調することが最重要任務となっている。党のイメージを低下させる可能性のある「腐敗問題」をこれほど取り上げるのは、決して少ないとは言えない。これは、中国共産党・政府が自らの組織メンバーの「腐敗問題」を重要視していることを示していると考えられる。記事の内容から見ても、中国共産党・政府が、人民の信頼を損なう幹部の腐敗問題に積極的に取り組むことをアピールしたものは多い。表1の記事の分類のうち、「宣伝・教育」は党の方針、姿勢を強調し、党員の思想を引き締めることを主要な目的と

¹ 中国の憲法では、「中国共産党は国を指導する」との文言が盛り込まれている。総書記は、共産党のトップであると同時に、中国の指導者でもある。但し、中国共産党は集団指導体制をとっており、党と国に関わる重要な事項は、政治局、さらには奇数人数（現在7名）の政治局常務委員会で多数決されると言われている。

² 中国の政府幹部の職位は、12職級27等級となっている。職級では国家級正職・副職、省部級正職・副職、庁局級正職・副職、県処級正職・副職、郷科級正職・副職、科員級、弁事員級となっている。詳しいことは下記のページを参照。

http://www.mmjp.or.jp/sososha/pdf_file/zenpen_1bu_jinbutujiten.pdf

したものである。全記事の 42.4%を占めている。これに対して、「現象・対策」は腐敗の具体的な形・事例を示し、それに対する党・政府の摘発をアピールしたものである。全記事の 40%を占めている。また、「制度・機構」は党・政府が腐敗問題を解決するため関連制度を整備し、それを実行する機構を構築してきたことを示す。全記事の 11.4%を占めている。これらに対して、比較的に腐敗問題を分析したものは「思想・認識」であり、わずかの 4.1%しか占めていない。腐敗の原因を多く分析したのは、「原因」であり、同 2%を占めている。

表1 『人民日報』の検索記事(腐敗)の主要内容							
分類	タイトル検索						本文検索
	宣伝・教育	思想・認識	制度・機構	現象・対策	原因	合計	
2006	7	2	3	13	1	26	603
2007	14	1	9	14	0	38	569
2008	22	0	7	8	0	37	441
2009	19	3	5	15	2	44	623
2010	6	0	0	13	2	21	597
2011	26	2	2	24	0	54	901
2012	10	2	2	11	0	25	720
合計	104	10	28	98	5	245	4454
割合	42.4%	4.1%	11.4%	40.0%	2.0%	100.0%	

出所)『人民日報』の検索記事に基づき筆者作成。
注)分類は筆者が記事の内容に基づき独自の基準による。

中国共産党・政府が腐敗問題を重要視することは、歴代指導者の関連発言からも確認することができる。1981 年末当時の最高指導者の鄧小平氏は、内部会議で「(改革開放してから) まだ 1、2 年しか経っていないのに、かなりの幹部が虫食まれている。今は、大きな事件が多くて、どれも悪質だ」と発言した。その発言をうけ、腐敗に対する厳罰化が全国的に開始された。にもかかわらず、1994 年 3 月党と国家の最高責任者の江沢民氏は、「腐敗現象がすでに社会生活の各領域にまで浸透し、特に我が党と政府の機関や幹部層にまで侵蝕している」と指摘せざるを得なかった。その直後にも、やはり摘発キャンペーンが大々的に展開された(王 2003、16-17 頁)。しかし、2012 年 11 月になっても中国共産党第 18 回全国大会において、胡錦濤前総書記は「(腐敗) 問題は解決しなければ、党に致命傷をもたらし、さらに党と国を滅ぼすだろう」と非常に強い危機感を示した。本稿の冒頭で述べたように、習近平総書記も腐敗を「亡党亡国」的な問題だと認識している。すなわち、腐敗問題は個別の党员・政府幹部による不正から、中国共産党・国の生存にかかわる問題に「格上げ」されたのである。

2. 『中国貪官録』からみる腐敗摘発

このように、中国共産党・政府は腐敗問題を重要視し、その摘発に力を入れている。しかし、問題が解決されるところか、その改善の気配も一向に見られない。このことは、これまでの腐敗対策だけでは問題の解決・改善につながらないと考えられる。以下は、『中国貪官録』が取り上げた摘発事例を検討し、新たな改善策を探る。表 2 は、『中国貪官録』が取り上げた 54 件の腐敗摘発事例を示している。表 2 からは、摘発された事例には以下

の2つの特徴があることが分かる。

まず、摘発の原因等についてである。汚職官僚の摘発事例であるため、不明を除きほぼすべてのケースに収賄が摘発された理由の一つとなっている。これに対して、摘発の直接的な原因・きっかけは、ネットワーク間の争い、ネットワークの崩壊など、「人的ネットワーク」に関連するものが大半を占めている。54件のうち、27.8%の15件は「敵を作った」などネットワーク間の争いが摘発の主要な原因となる。典型的な事例は、表2の1番の「阜陽官場『現形記』」である。安徽省阜陽市共産党王懷忠書記は、ライバルの同市肖作新市長の家族に対する尾行などで、その腐敗情報を収集し関係部門に摘発させた。しかし、副省長に昇進した王懷忠氏は、肖作新元市長の事件の関連摘発で「双規」³された。また、16.7%の9件はリーダーの失脚など、ネットワークの崩壊が摘発の主要な原因となる。44番の「中国石炭副総経理張宝山がギャンブルで落馬」では、中国石炭有限公司の張宝山副総経理は、マカオでのギャンブル事件がきっかけとなって摘発された。但し、彼がギャンブルに走った原因は、後見人役の山西省規律検査委員会書記が交通事故で急死してから既定の出世（一時期代理社長に就任）路線からはずされたことだと見られている。その他に、37%の20件は部下・上司などの親密な関係にある者の摘発が本人の摘発のきっかけとなる。

次に、摘発時期について昇進後の前職での事件で摘発されるケースが多い。特に政治協商会議主席・副主席、人民代表大会副委員長（同レベルの政府の長・副と同じ職級・等級）などの名誉職への昇進の直後に摘発されたケースが、数件見られる。表2の6番、9番、22番、29番、33番、41番、42番、48番がそれである。6番の「湖南岳陽規律委員会書記彭晋鏞の財産掻き集め5方式」では、岳陽市党規律検査委員会書記彭晋鏞氏は、在任中に構築した強固なネットワークを武器に、名誉職の政治協商会議主席に昇進してからも後任の規律検査委員会書記に「小金庫」（プールした罰金）の引き渡しを拒否した。そのため、自らへの不正公金支出が取り調べられ、一時的に自由行動が制限された。さらに、表に出た自らへの不正公金支出が小額であることを理由に、市共産党書記からの辞任要請を拒否した。その結果、より上級の湖南省検察院によって徹底的な取り調べを受け、逮捕された。

3. 中国の腐敗問題

王（2003、160-161頁）は、これまでの腐敗摘発対策の特徴として、「狭くて深い」、「キャンペーン式」と「人だより」の3つを挙げた。すなわち、平常時腐敗摘発の対象を一部の悪質な金銭賄賂に限定し、問題が悪化し国民の不満が高まった時に集中的に厳しい取締りを行う。制度的なものよりも、個人英雄主義的な取り締まりの方が中国の国民に歓迎されるという。

確かに、国民の許容度が比較的に高いことは、中国における腐敗の深刻化の一因となっている。しかし、前述のように問題の深刻化に伴って、中国共産党・政府はますます腐敗対策に力を入れている。歴代指導部が自らの正当性を主張するため腐敗問題を重要視し、危機感を持ってこの問題に取り組んできたことは、『人民日報』の記事からも読み取ることができる。問題になるのは、このような取り組みが時間的にも空間的にも部分的な対策し

³ 中国共産党規律検査委員会による実質上の拘束・取調べである。決められた（「規定」という）場所、時間で共産党員が自らの罪を自白する。中国共産党規律検査委員会が党員幹部を司法機関に移送する前の摘発手段である。共産党幹部が最も恐れていることだとされている。

かならなかったのである。

時間的には、制度に基づく恒常的な取り組みよりもその時折の対応策として集中したキャンペーンに依存する。時期的には、国民の不満が蓄積され高まったときに、新しいリーダーの登場によって集中的なキャンペーンが行われる傾向が見られる。一方、事前的な予防と進行中のものに対する警告があまり重要視されず、事後的な摘発が中心に置かれる。

「人民日報」の記事からも、事後的な摘発をもって予防策と警告を代替する中国共産党・政府の意図を確認することができる。近年では、制度の構築の面においても「中国共産党内監督条例（暫定）」の実施、「国連反汚職条約」の承認など一定の成果は挙げられているが、「中国共産党内監督条例」の名称に示されるようにあくまでも党内の監督が中心となる。現状では、地方・部門の共産党・政府部門のトップはより上級の党・政府の指導・監督を受けるが、同じ地方・部門の民衆の監督を受けず、立法、司法機関を含む全組織を自らの命令系統下におかれる。

また、摘発面ではネットワークに依拠した側面が大きい。一方、前項でみてきたように摘発の原因・きっかけは「人的なネットワーク」に関連するものが大半を占めている。中低レベルの職員は同地方・部門の共産党規律委員会あるいは司法部門の摘発を受けるが、『人民日報』と『中国貪官録』に取り上げられたような一定の職位以上の幹部は例外なく上級政府の共産党規律委員会に摘発された。その上級の共産党規律委員会は、所属する共産党委員会の指導を受ける。その結果、上級共産党委員会の主要メンバーとの関係さえ強固であれば、腐敗の事実と関係なく摘発されない可能性が高くなる。

このように、中国における腐敗問題への取り組みは部分的なものしかならなかった。これを恒常的に・全面的なものにするには、法制度の恒常的な実行を可能にする公務員倫理・国民の監督意識の向上が必要だと考えられる。しかし、第1項でみてきたようなイデオロギー的な宣伝・教育では、公務員倫理・国民の監督意識の向上に繋がらず、普遍的な道徳が必要である。広池千九郎は、「正業と不正業」という普遍的な道徳を提唱している⁴。田原道夫の整理によれば、「人間社会の生活に必要な職業を正業といい、人間社会の生活に不必要にしてかつ個人もしくは団体の秩序、公益を害する職業を不正業」⁵という。腐敗は、人間社会の生活に必要としない、腐敗官僚が創出した「不正業」である。「正業と不正業」の考えが広がれば、公務員の倫理向上・中国国民の腐敗許容度の低下につながる。

終わりに

中国共産党・政府は腐敗対策に力を入れているにもかかわらず、腐敗問題が深刻化している。これまでの腐敗対策に問題があると言わざるを得ない。『人民日報』の検索記事から、中国共産党・政府が腐敗問題を重要視しているが、党・政府の正当性を主張する宣伝・教育が中心となることがわかる。また、『中国貪官録』が取り上げた摘発事例では、これまでの腐敗摘発が制度に準拠したものよりも「人的ネットワーク」に依拠したところが大きいことがわかる。結果的に、中国における腐敗問題への取り組みは部分的なものしかならなかった。腐敗問題を根本的に解決するには、普遍的な公務員倫理と国民の監督意識の向上

⁴ 『新科学モラロジー及び最高道徳に関する注意事項』1931年6月、所収。

⁵ 田原道夫「正業と不正業、実業と虚業」(1)(2)、「品性・経営・人生」メールマガジン Vol.507、508 (<http://www.hinkeijin.jp>)。

が不可欠であろう。それに際して、共産党のイデオロギー的な宣伝・教育の代わりに、広池千九郎の「正業と不正業」の考えなど普遍的な道徳が必要になる。

主要参考文献

- 王雲海（2003）『中国社会と腐敗——「腐敗」との向き合い方』日本評論社
暁衝（2001）『汚職大国・中国 腐敗の構図』高岡正展訳、文藝春秋
鳳凰週刊（2011）編『中国貪官録』中国発展出版社

表2 『中国貪官録』の摘発ケース(その1)

	掲載日	摘発時期	タイトル	摘発前の職務	罪・摘発原因	備考
1	2006/6/15	1999/	阜陽官場「現形記」	市長肖作新	市党書記王懷忠との権力闘争●	肖一市党書記王懷忠(収賄)⇒淮北市副市長王漢卿、阜陽市副市長傅紅傑、阜陽市公安局副局長種永紀…
2	2004//9/15	20003/	湖南双峰県党書記の汚職路徑	湖南双峰県党書記朱応求	出所不明財産 乱暴な態度で次々と敵を作った●	自らのネットワークを活用し、県全体を握った。清廉なイメージ
3	2003/4/25	2002/11	貴州副省長劉長貴案が「貪官軍団」を引き出す	貴州省副省長	部下の摘発○	貴州省の炭鉱の安全生産、交通整備に尽力した。
4	2003/11/5	2003/10	国土資源部田鳳山が落馬	国土資源部部長	元部下の摘発○	親しまれやすい、懐み深い性格。
5	2005/6/5	2003/4	楊秀珠がオランダで逮捕されても、引き渡しに難しい	浙江省建設庁庁長	収賄 元部下の摘発●	前任の温州市副市長までネットワークを構築した。民間評判が悪い
6	2004/4/5	2003/4	湖南岳陽規律委員会書記彭晋鏞の財産掻き集め5方式	政治協商会議主席	収賄、職権の濫用 ネットワーク外の者に非協力的●	2002年末まで湖南岳陽党副書記・規律委員会書記→強固なネットワーク。「小金庫」の引き渡し拒否→辞任拒否
7	2003/11/5	2003/6	湖南益陽中国銀行元頭取自殺の疑問	湖南益陽中国銀行元頭取朱国勛	収賄10万	清廉な評判。自殺か?
8	2003/12/25	2003/7	陳凱案が福州「官界地震」を再び起こした	福州市党副書記宋立誠など高官8名	◎	麻薬販売・密輸・蛇頭の罪を問われた陳凱のネットワーク
9	2003/11/15	2003/9	山西省人民代表大會官房長官失踪事件	山西省人民代表大會官房長官孫秉晨	不明	共産党山西省規律委員会との面談の直後に行方不明。2003/1まで省司法庁庁長
10	2005/5/25	2004/3	阜陽中級法院裁判官腐敗の見本	阜陽中級法院裁判官薛懿	公金横領 ネットワーク○	薛(自白)⇒副院長朱亜、執行庭長王春友、経済2庭庭長董炳緒、経済1庭庭長陳和平…
11	2005/6/15	2004/4	「赤帽子商人」劉俊卿案	製酒会社社長。安徽省渦陽県党副書記などを兼任。	出所不明財産、銃所持 地域の有力者●	横暴な態度で地元住民との関係悪化 劉⇒県党書記、副県長…。安徽省副省長王昭耀(22番)とも親交が深い。
12	2004/4/5	2004/4	広東鶴山市党書記夫人が香港での盗難事件	広東鶴山市党書記張汝韶	出所不明財産	
13	2004/7/5	2004/6	江蘇省党組織(人事)部長「双規」の影響	江蘇省党組織部長(10年間)徐国健	官職売買 収賄先の摘発○	同省交通庁長章俊元、江蘇京滬高速道路有限公司董事長・総経理王文錦→韓建林副檢察長⇒徐⇒…
14	2004/6/25	2004/6	湖南省高法院院長「双規」の幕	湖南省高級人民法院院長呉振漢	息子の会社に便宜 強引なやり方で敵を作った●	呉⇒高級裁判官6人の摘発
15	2005/1/15	2004/8	「防弾チョッキ書記」黄金高が双規された謎	福建省連江県党書記	自己反省せず内部問題を公開。 ●	清廉なイメージ。副県長をはじめ問題幹部を徹底的に摘発
16	2007/10/5	2004/8	蘇州市元副市長姜人傑案の難題	蘇州市元副市長	息子の会社に便宜 ○	都市開発、インフラ、不動産を主管。
17	2004/10/25	2004/9	惠州公安局長のマカオギャンブル容疑、売春婦の香港定住を手伝う	惠州公安局長呉華立	マカオギャンブル、規律違反でビザ取得	呉⇒出入国管理科佳兆邱金恵
18	2008/9/15	2005/10	福建省宣伝部長荆福生、寧徳市党書記陳少勇…	福建省宣伝部長荆福生、寧徳市党書記陳少勇…	官職売買、土地の不正売却 ◎	福建省工商局周金影の海外逃亡、周寧県党書記林龍飛…⇒荆一陳、市長・省工商局局長周金影…
19	2006/10/25	2005/11	深圳中級法院「集団腐敗」	多くの幹部	共同収賄、不正裁判 ○	副院長1名、庭長3名、定年裁判官1名が逮捕…
20	2005/4/5	2005/3	東三省政界「血液の入れ替え」	黒竜江省綏化市党書記馬徳	官職の売買 ○	(4番)田鳳山、黒竜江省政治協商会議副主席韓桂芝の収賄。これらに関連して、多くの高官が摘発され、幹部不足の状態に。
21	2005/4/5	2005/3	張恩照案が銀行システムの抜け穴を再見	中国建設銀行頭取・中国国際金融公司会長	収賄(米国で訴訟) 上海幫の摘発●	国有銀行の幹部の摘発が繰り返す
22	2005/6/15	2005/4	安徽省政治協商会議副主席王昭耀停職事件調査	安徽省政治協商会議副主席	不明(家族の収賄か)	2005/1まで省党副書記。有能な技術官僚。妻、子が双規、本人が停職
23	2006/9/25	2005/4	彬州「天を補修」	湖南省郴州市副市長雷淵利	部下の住宅公的積立 金管理センター主任李樹彪が摘発○	市政府官房副長官肖鵬金が殺害された事件⇒李⇒雷⇒市長李大倫、宣伝部長樊甲生、規律委員会書記曾錦春
24	2005/6/15	2005/6	北京は財政部金融局局長徐放鳴を拘束	北京は財政部金融局局長、CIC取締役	◎	摘発された関係者の自白。張恩照案の関連
25	2007/1/15	2006/12	国家食品薬品監督管理局鄭筱暉が「双規」された背後	国家食品薬品監督管理局局長	本人収賄40万元、家族収賄609万元◎	部下の摘発:1年間で7人目の閣僚級幹部、関係者31名が摘発された
26	2007/1/5	2006/6	北京市副市長劉志華が党籍除名、公職解任	北京市副市長	香港企業とのトラブル	生活墮落、汚職、土地
27	2009/1/15	2006/6	天津市元常務委員皮黔生が落馬	天津滨海新区主任	元部下の収賄・摘発○	妻が横領した公金で不動産・株投資
28	2007/12/25	2006/6	安徽省副省長何閻旭賄賂案	安徽省副省長	収賄(贈賄者の自白) ○	きっかけは暴動時の留守。前後して、副省長王懷忠、政協副主席王昭耀も摘発された。生活墮落

表2 『中国貪官録』の摘発ケース(その2)

	掲載日	摘発時期	タイトル	摘発前の職務	罪・摘発原因	備考
29	2007/10/5	2006/9	陝西腐敗第一案の真相	陝西省政治協商会議副主席龐家鈺	手抜き工事→水道の爆裂 関係者の告白◎	2003/1まで宝鸡市長→党書記。愛人11人、元部下と、死刑が執行された元部下の家族が告訴
30	2007/12/25	2007/11	広西壮族自治区副主席孫瑜は「双規」	広西壮族自治区副主席	関係者が摘発された○	生活墮落。愛人4人
31	2007/4/25	2007/3	上海「土地爺」が調べられる	上海市不動産・土地資源管理局副局長殷国元	巨額財産の出所不明 上海の不動産業界が中央に対抗●	同時期上海市不動産協会会長陳士傑(上海市建設局元党書記)も摘発された
32	2007/4/25	2007/4	周良洛が摘発された背後の北京反腐敗の謎	北京市海淀区区長	関係者の告白●	都市開発での立ち退きトラブル
33	2007/6/25	2007/6	天津市政治協商会議主席宋平順の自殺の謎	天津市政治協商会議主席	香港企業に利益供与 元部下の摘発◎	20年間も天津の警察、司法部門を掌握。愛人と私生児
34	2007/7/5	2007/6	山西臨汾宣伝部長が100幹部の告白で「双規」(2003年告訴→問題なし)	山西(霍州市党書記から昇進)臨汾市宣伝部長	収賄(官職売買) ○	有能・勤勉な官僚、詩人。摘発のきっかけ: 官職を買った人が殺人
35	2009/3/25	2007/6	鉄道部元政治部主任何洪達汚職案	鉄道部政治部主任	前任の北亜集団での贈賄、収賄、公金横領○	北亜集団の後任の摘発⇒何⇒黒竜江省証券監督局長丁若鵬、ハルビン鉄道局副局長郝雪斌、北京鉄道局長李樹田…
36	2008/5/5	2007/7	名秘書王維工の罪	上海申能集団副総経理	摘発された上海市陳良宇書記との関連●	仕えた黄菊副総理が死後1カ月後に逮捕。「幹部夫人クラブ」を設立・運営。
37	2007/8/5	2007/7	済南市人民代表大会主任が愛人を殺害	山東省済南市人民代表大会主任段義和	殺人●	済南幫と胶東幫の抗争。段⇒山東省政治協商会議主席孫淑義「双規」(収賄額が少ないため免職のみ)
38	2008/11/15	2008/10	最高裁副院長黃松有「双規」	最高人民法院副院長	公金横領。 部下の摘発○	法律家。
39	2009/2/5	2008/12	民間企業への利益供与、浙江環境保護局局長「双規」	浙江省環境保護局局長戴備軍	特定の企業に省内市場を独占させる●	汚染企業を厳罰。前後して国家環境保護総局人事司長など、環境保護部門の高官が相次いで摘発された。
40	2009/1/15	2008/12	国家外貨管理局処長許満剛が問題発生	国家外貨管理局管理検査処長	○	商務部巡視員郭京毅案の関連で摘発された
41	2008/10/5	2008/5	馮順橋が摘発された	浙江書政府官房長官	2005/1まで紹興市党書記。部下の摘発●	長く人事部門に在任、縁故者ばかりを昇進させネットワークを構築して出世
42	2009/11/25	2009/10	遼寧省人民代表大会元副主任宋勇収賄	遼寧省人民代表大会副主任	同省朝陽市長→市党書記6年間○	きっかけは、部下の同省凌源市党書記宋久林の収賄案
43	2009/12/15	2009/11	民航局副局長字仁録「双規」内幕	国家民航局副局長	贈賄者の自白○	建設工事の請負に便宜供与、収賄
44	2010/2/25	2009/11	中国石炭エネルギー有限公司副総経理張宝山がギャンブルで落馬	中国石炭エネルギー有限公司副総経理・総技術師	知友の山西省規律検査委員会書記が交通事故で急死◎	業務能力が高い。職位に拘る。マカオでギャンブル
45	2009/6/5	2009/3	農業部(省)三幹部が経済問題で自殺	農業部草原管理センター主任張喜武		規律委員会の幹部と面談の後に妻と一緒に自殺、2月にも別の処長が自殺
46	2009/4/15	2009/3	国家外貨管理局高官鄒林が落馬	国家外貨管理局総合処長・報道官	○	商務部巡視員郭京毅案の関連で摘発された
47	2009/4/25	2009/3	逃げ出した党政治法律委員会書記	浙江省永康市党政治法律委員会書記朱兵	開発区管理委員会主任に在任中収賄○	贈賄した中港不動産の経営者が行方不明。銀行、インフォーマル金融の借金が返済不能。
48	2009/5/5	2009/4	陳紹基背後の深い河	広東省政治協商会議主席	巨額財産出所不明 部下の自白◎	2004/2まで広東省公安庁長、省党政治法律委員会主任、省党副書記を歴任。
49	2009/5/25	2009/4	杭州副市長許邁永の「双規」内幕	杭州市副市長	収賄、職権の濫用○	同時期浙江省党規律委員会書記王華元が摘発された。
50	2010/1/5	2009/5	省刑務所管理局の「集団陥落」	湖南省刑務所管理局党書記・局長劉万清	刑期短縮、刑務所外病氣治療に便宜◎	劉⇒局内幹部132名(安定を保つため、自白者に処分を軽減・保留)
51	2009/6/25	2009/6	深圳市長許宗衡が摘発された背後	深圳市市長	反対派を作った●	市党書記への昇進に焦り、広東省党書記汪洋に潰された
52	2009/7/5	2009/6	重慶高裁副院長幹部「双規」	重慶高裁副院長張弢(トウ)、執行局長烏小青	不正裁判	3工場の跡地の競売裁判
53	2009/8/25	2009/8	大陸「核家元」康日新が落馬	中国核工業集团公司党書記・総経理	入札情報の漏えい	
54	2010/5/5	2010/4	大同市公安局長申公元「双規」案	大同市公安局長	官職売買	官職売買トラブル

出所) 鳳凰週刊『中国貪官録』(中国発展出版社、2011年)に基づき筆者作成

注)「●」はネットワーク間の争いが、「◎」はネットワークの崩壊が摘発の原因、「○」は関係者の摘発が摘発のきっかけとなることを示す。ほぼ全ケースで収賄が摘発の罪・摘発理由になるため、明記しない場合罪・理由が収賄である。「双規」は、中国共産党規律委員会が「規定」した(決めた)時間・場所です。共産党員が自らの罪を自白することを指す。

補論 1 明治という時代と廣池千九郎

佐藤政則

はじめに

NHKの「龍馬伝」(2010年)、「坂の上の雲」(2009～2011年)のメッセージは何でしょうか?少なくとも、明治の胎動を「龍馬伝」から、明治の形成と終りを秋山兄弟・正岡子規から考えることはできます。明治という時代を見つめ直し、現在の立地点を知るということは、今日、ますます重要になっていると思います。と言うのは、明治末、だいたい1910年以降の日本社会の状況は、現代日本の社会状況によく似ているからです。輝いていた時代が終わり、日本社会の迷走が始まる、という意味で良く似ているのです。そしてこの頃から、麗澤教育の創立者である廣池千九郎先生の社会教育活動が始まります。慶応2(1866)年から昭和13(1938)年という千九郎先生の生涯のなかで、道徳科学(モラロジー)の骨格が形成された明治という時代に着目して、お話ししてみたいと思います。

アヘン戦争の衝撃

坂本龍馬が活躍する激動の時代は、やはり19世紀半ばのアヘン戦争から始まると考えた方がいいでしょう。清国がイギリスに屈服したアヘン戦争(1840-42年)の結果、清の植民地化が急速に進み、清はアジア覇権国家としての地位から陥落するからです。これは、アジアにおける華夷秩序(中国王朝を中心としたアジア秩序)とその基での朝貢・冊封体制の崩壊を意味しました。日本、李氏朝鮮、阮朝越南(ベトナム)などの周辺国にとれば、一方では欧米列強の脅威を直接受けるわけですから、植民地化の危機を迎えることになります。しかし他方では、清朝の呪縛から脱却し欧米を含めた東アジア秩序の再構築に乗り出す好機でもあったわけです。とくに日本はインドと共に、清朝との朝貢・冊封関係をもたない数少ない国でした。冊封関係にある李氏朝鮮や阮朝越南のように清朝の動揺が国内問題に波及することはありませんから、行動は自由でした。植民地化の危機という意識が猛烈に高揚すると共に、それと併存してアジア秩序の再編に対する意欲も高まったと考えられます。とくに、後者の点はこれまであまり重視されてこなかったわけですが、私はかなり重要だと考えています。

二つの解放をいち早く実現した日本社会

(1) 国際的孤立からの解放

開港＝貿易の始まりと共に、その重要性は即座に認識され、眼前にはアジアを含む国際社会が広がっていきます。日本からの熱い視線は、覇権国家・清をはるかに上回る力量を示した欧米へと向けられます。清朝でも欧米技能を取り入れて改革を進めようとする動き(洋務運動)が李鴻章のもとで始まります。洋務運動が掲げた「中体西用」という考え方は、日本では「和魂洋才」と謳われたように、明治国家も洋務運動(清朝改革)も同様な方向を目指していたわけです。しかし、残念なことに、清では洋務運動もまた王朝延命のために取り組まれた施策の一つに過ぎませんでした。

それに対して日本は、①明治維新を経てまがりなりにも統一国家のもとに推進されました。②欧米から見れば、東アジアの数にも入らぬ国でありながら、驚くことに、明治に入ると「一等国」への仲間入りという高い目標が意識されていました(例：阪谷芳郎の「一等

国」論)。この後者の②の点が、植民地化の危機意識という、どちらかと言うと、受身的な思考からは説きにくいわけです。むしろ、アジア秩序の再編意欲から出たものと考えの方が説明しやすいと思っています。いずれにせよ、こうして東アジア秩序の再構築に消極的な清に代わって、相対的に日本の位置は高まっていきます。日本という国家の立身出世の始まりでした。

(2) 身分制からの解放

江戸時代の特徴の一つは、士農工商に象徴された身分制を堅持したことだと考えられます。それは、士農工商の各々において幾層にも区分された「家格」、「資格」、「名誉」などの「分限」によって支えられていました。身分や分限を越えた欲望をもつこと自体が不道德であり、「分相応」に生きることを自他共に強要した時代だと言えます。そうであったがために、家格を上げる「身上り願望」は、士農工商を問わず、極めて広範かつ根深く浸透していたわけです。元来、「身上がり願望」というのは下から上に向かう上昇運動なのですが、とくに幕末になると藩財政の窮乏に伴い、藩の側から献金の見返りとして有力農民を「士分」にする動きが各地で顕著になっていきます。

長期にわたり社会を縛ってきた、こうした分限思想からの最終的な解放は、明治維新によって果たされます。「分相応」から「実力相応」への大変革でした。個人が努力次第で立身出世を実現できる、そういう夢のような時代の到来でした。膨大な若者、とくに地方において貧困、不名誉、被差別などに泣き続けた不遇な「家」の若者ほど「実力相応」を歓迎し発奮したわけです。財界では三菱財閥の基礎を築いた土佐の岩崎弥太郎や安田財閥を築いた安田善次郎などは、その代表的人物だと思います。また政界や中央官僚では、1936年(昭和11)の2・26事件で暗殺される高橋是清や廣池千九郎の良き理解者であった阪谷芳郎なども、明治初頭の不遇な環境から申し上がってきた代表的人物だと言えるでしょう。立身出世という自己利益(「我利」)の実現を阻むものは、社会制度ではなく、自らの怠惰だけだと理解されました。サミュエル・スマイル著『セルフヘルプ』(1859年、イギリス)を中村正直が翻訳した『西国立志編』(1871年(明治4)刊行)、あるいは1872年から78年にかけて分冊発行され、1880年に合本出版された福澤諭吉著『学問のすすめ』などが、大ベストセラーとなり、食るように読まれたわけです。

【例①高橋是清(日銀総裁、蔵相、首相、2・26事件で暗殺、1854-1936年)の場合】徳川幕府の御同朋頭支配絵師、川村庄右衛門の庶子として誕生、伊達藩足軽高橋家(江戸詰め)の養子、薩長を中心とする明治国家機構では出世不可能。しかしアメリカ経験と英語力により実力で出世の回路をつかむ、しかも自己実現と国家との一体視を実現。

【例②阪谷芳郎(東大→大蔵省→蔵相 1906年、渋沢女婿、東京市長、1863-1941)の場合】漢学者の父・阪谷朗廬の没落、家名の再興のなかで出世が唯一の道、新設された高等教育機関により官という出世の回路を得る。大蔵官僚として日清戦後経営を事実上担当し自己と国家が一体化する。

【例③安田善次郎(安田銀行、安田財閥創業、1838-1921年)の場合】二代目善次郎(1731年生)から善次郎父・善悦(四代目善次郎、1814年生)まで、士籍に列することが安田家の願望、善悦が富山藩下士の株を買い実現する←社会的地位の上昇を意味する身上がり願望と「士籍に飢饉なし」という経済的理由。安田善次郎は、武家よりも社会的地位が高いと考

えた商業による立身を選択。「千両分限者」願望を実現。

【例④岩崎弥太郎(三菱財閥の基礎を築く、1834-1885 年)の場合】高知の地下浪人の家から幕末・明治初頭には土佐藩権少参事(上士階層の地位)へ上昇。しかし中央官僚に進む道と商人の道との二つの道で悩み、商人を選択。

こうして猛烈な上昇志向が明治日本を突き動かしていきます。国内外における近代的な「下克上」状態と言えるでしょう。それは、一面では極めて健康的な若い国家の誕生・形成でした。同時に、国内外における旧秩序の破壊が急進的で激しいほど、否応なく、東アジアの新秩序を支えねばならない国家、金がすべての「金色夜叉」や自己利益しか眼中にない「我利我利亡者」が君臨する社会に近づいていくことでもあったのです。

明治末の混迷：懸命に駆け登ってきた坂の上で見たものは？

真夏に坂の下から坂の上の雲をみると、登っていけば、雲を捉まえられるような気がします。坂が急坂であれば、あるほど、そう思うことでしょう。懸命に駆け登ってきた坂の上で明治日本は、何を見たのでしょうか。

日清戦争と日露戦争を経て 1910 年頃には、明治初頭の国家「目標」であった「富国強兵」を達成し、日本は植民地を領有する「帝国」となります。東アジアで最も輝く時代を迎えたわけです。しかし他方で、欧米列強と対峙しつつ、植民地経営を行うという過大な負担を強いられます。日清戦争の勝利は新たな対外緊張をもたらし、日露戦争の勝利は更なる強国との緊張を招いていく、これは、日本が倒れるまで続く「修羅の道」ではないのか、こうした認識も急速に広まったと言えます。ヨーロッパやロシアでは、「社会主義」「資本主義」という言葉も使われるようになっていました。

経済的に観ても、明治以降も高度な経済発展でしたが、第二次大戦後とは異なり、貧富の格差を伴う成長でした。1910 年頃からは貧富の格差が拡大・固定化するようになりました。対外債務という点でも、かなり深刻な状況に陥っていました。なにしろ、日露戦争のために莫大な外貨建て日本国債を発行しましたので、その元利払いで首が回らなくなっていたのです。また国内外における競争の激化は、資本集中による大企業の誕生を促し、かつてのように個人的手腕で活路を切り開く余地は限られていきました。

経済的な行き詰まりを背景に「道徳の荒廃」が社会問題視されていきます。行動を律し、規範となる新しい道徳観が構築されないままに、旧社会の様々な秩序・教え・文化・思想・仕組み等々を、玉石混交で破壊し急激な変革を成し遂げたからです。様々な論者が「道徳の荒廃」を問題視しました。廣池の理解者となる阪谷芳郎（大蔵大臣、東京市長）は、「日本人には大和魂がある、これがある以上、日本国の生命は永遠だとある者は言う。しかし大和魂とは何かと問われたら、明確に答えることができないではないか」（『阪谷芳郎伝』 p 321、意識）と危機感を募らせています。

「道徳の荒廃」が最も鋭く表れたのは、今日と異なり、ほとんど無権利状態に置かれていた労働者でした。他方で社会的リーダーの役割が期待された資本家、つまり労資関係が陰悪になっていました。労資双方に向かって新道徳論を唱えたジャーナリスト・山路愛山によれば、双方の理解は次のようなものでした。

「根が我利一偏を目的とする金持に向かつて道德を説くのは、豚に真珠を与えるようなものであり無益なことだ。それよりも階級的争闘を煽動して早く金持の息の根を止めるべきだ、などとある者は荒言する。また金持には、金もうけの業は所詮我利一偏の業に過ぎないのだから、その金持たる我らに道德の講釈などをするのは筋違いである、と考える者もいる」
(『現代金権史』、現代教養文庫、p259～p260、意識)

明治初頭から中頃までを見れば、個人の利益や立身出世(我利)と国家・社会の立身出世(公益)は容易に、素朴に一体感を持ちえたと思います。しかし、1910 年頃には我利と公益との分離が現実のものになりました。別な言い方をすれば、軍事的には大変な立身出世を遂げたのですが、経済的にはそれほどでもない、という分離だとも言えます。廣池千九郎が社会教育活動を始めるのは、個人と国家が共に「我利我利亡者」になってしまった、そういう時代であったわけです。

廣池千九郎の道德科学・道經一体＝我利我利亡者をその苦しみから救う道

我利我利亡者であればあるほど、実は悩みも深いのが実情だと思います。我利我利亡者に向かつて投げ掛けたのが、廣池学園の講堂などに掲げられている「天爵を修め、而して人爵之に従う」であり、「品性資本」であり、「道經一体」だったのではないのでしょうか。人が人爵を追求するのは当然であり、人爵の追求や我利を活動の源泉として否定せず、むしろ積極的に肯定する。問題は、その我利を自分でどう律するか、だったのです。千九郎先生は、我利我利亡者に向かつてこう語っていたのではないかと、私は考えています。

「あなたが、今のままではいけない、と思ったのであれば、もうあなたはそのままいいのです。我利我利な日常のままでいいのです。ただ、あなたの毎日の営みが、社会の進歩やあり方にどのように関わっているのか、ということを学びなさい。またあなたの営みが家族の過去と未来にどのように繋がっているのか、ということを考えなさい。そしてあなたが、学び得た自覚によって自分を律するのです」

特別なことをしなければいけないのではなく「そのままの生きかた」を積極的に認めたことで、自責の念で狂いだしそうになる我利我利亡者の心を解放したわけです。社会の中でつながり、生命の継承と言うつながりを学べば、自ずと自らの位置や役割が見えてきます。何をしなければならないのか、何をしてはいけないのか、これがわかってくるはずです。それらは、自己を律する基準となり、その基準は自ずと公益増進の方向と一致すると考えられます。千九郎先生が言う道德とは、天地人の理を学び自律の基準とすることであり、常に学び、考え、実践するという意味で、科学そのものでした。だから「道德科学、Morality」と名付けられたのだと思います。

今、述べましたことは主に一人ひとりの個人を想定していますが、これを会社に置き換えても、国家と置き換えても、ほぼ同様なことが言えます。会社にも、国家にも脈々と続く命の継承があります。会社にも、国家にも社会のなかでの位置や役割というものがあります。それを深く認識すればするほど、自ずと会社や国家にも行動の規範、基準というものが生まれてくるはずです。

こうした私の理解が成り立つとすれば、道経一体論、品性資本を含む道徳科学という考え方は、当時の我利我利亡者との対峙の中から生まれ、それに向かって組み立てられたものと考えられるわけです。

おわりに

千九郎先生の道徳科学は、個人の我利の修養を要していますが、それは、現代風に言えば、一つの企業論でもあり、国家論でもあると考えられます。さらに言えば、個人と会社と国家を、同じ目線で把握することができるものでした。これは、当時、大変な強味であったろうと思います。1910年頃のデータがありませんので、20年後の1935年のデータになりますが、国民所得の構成を観ますと、個人事業主所得と個人の財産所得の合計が全体の54%を占めています。1910年代では、この数値がもっともっと高かったと思います。いわば個人資産家と個人事業主が経済活動の中心であったと考えることができるわけです。こうした個人事業家や個人資産家にとって、個人の我利の修養は直ちに会社を磨くことになり、さらには国家をも見通す力の涵養になるわけです。道徳科学に対する反響が、個人事業主でとくに高かったのも理解できます。

目を転じて現代を見てみましょう。2005年のデータを観ますと、個人事業主所得と個人の財産所得の合計は全体の14%くらいしかありません。逆に雇用者報酬が7割を占めているのが現代です。つまり経済活動の中心は、サラリーマンに代表される雇用者に移っているわけです。現代の若者やサラリーマンは高い公益意識をもっていると思います。人が協力すれば、個人ではできないこと、個人の役割よりもっと大きな役割を果たすことができることも知っています。ただ雇用者ですから、個人事業主と異なり、個人の我利の修養は直ちに会社を磨くことには直結しないわけです。したがって、個人の我利と社会の公益を繋ぐには、個人が属する会社や組織の我利の問題をもっともっとしっかりと検討しなければいけないと思います。個人の我利の発揮が、属する組織や会社の発展を促し、それは社会の公益を増進するものだという、その道筋に確信をもてたら、自ずとどんなにつまらない仕事でも、その意義を見出して嬉々として取り組むことができるわけです。この道筋をつけること、見出すことが、最も重要な現代的課題だと思います。

それと、もう一つ。千九郎先生の「道徳経済一体論」は、現代でも通用する重要な考え方だと思います。しかし、そもそも近代日本において唱えられた様々な道経一体論の流れ、系譜が、現在の研究ではよくわかりません。明治初期から渋沢栄一が「論語と算盤」「道徳経済合一」説を提唱したことは、よく知られているのですが、その後、道経一体論は、どのように継承されていくのか、よくわからないのです。第二次大戦後の60年間における展開はどうなっているのか、などは全くの闇の中です。これでは、千九郎先生の道経一体論を客観的、歴史的に位置付けることができないわけです。これをなんとかしなければいけません。幸い、このような私の呼びかけに応えてくれた人たちがいて、麗澤大学経済社会総合研究センターにおいて「東アジアにおける道経一体論に関する研究プロジェクト(道経研)」というものを立ち上げ、推進しています。時間はかかるでしょうが、しっかりと進めていくつもりです。

(終わり)

2011年9月4日 廣池千九郎博士を偲ぶ会講話
(愛媛県西予市卯之町末光英一氏宅) 一部改訂

補論 2 日本がアジアで輝いていた時代 —阪谷芳郎の明治—

佐藤政則

第二次大戦後の国際社会を長らく牽引してきたアメリカ。しかし 2008 年 9 月のリーマン・ショックを契機にその影響力は急速に後退している。同時に「米・EU・日本の三極」とまで言われ、アジアで日本だけが輝いていた時代も終りを迎えつつある。

NHK は、2009 年末から司馬遼太郎「坂の上の雲」、2010 年初からは大河ドラマ「龍馬伝」を放映している。二つのドラマを併せれば、明治の始まりと終りを物語るわけで、日本がアジアで輝いていたもう一つの時代、明治を描き直す試みと言える。番組内容の評価は差し控える。現に、私の友人の「土佐人」は、龍馬はもっと泥臭い、福山雅治の龍馬はカッコ良すぎだ、と憤慨しているからだ。

いずれにせよ明治という時代はたしかに魅力的だ。作家・陳舜臣が日清戦争を描いた小説に『江は流れず』（中公文庫、昭和 59 年）がある。その最終章のタイトルは「終幕と開始」になっている。台湾の問題は残るものの、戦争は明治 28 年(1895)の講和条約調印によって終結した。しかし、それは新たな展開のまさに始まりであった。北京では康有為が「公車上書」を起こし戊戌変法(百日維新)へと向かう。広東拳兵に失敗した孫逸仙(孫文)は辛亥革命への歩みを本格化させる。そして天津に戻った袁世凱もまた再起へのスタートを切る。

こうした革命家たちにとって、日本は進むべき一つのモデルであり、東アジアにおいてまぶしい光を放つ国であった。そうした魅力的な明治日本を支えたのが、江戸時代の国際的孤立(鎖国)と強固な身分制(分限思想)から開放され、国家と個人の立身出世を体現した人々である。廣池千九郎の理解者でもあり、衆人羨望の的であった「末は博士か大臣か」の両方を手中にした阪谷芳郎も、まさにその一人であった。

阪谷芳郎は、幕末の文久 3 年(1863)に阪谷朗廬と恭の四男として生まれ、明治 17 年に東京大学文学部政治学理財学科を首席で卒業、ただちに大蔵省に奉職した。そして準判任御用掛を振り出しに明治 39 年には大蔵大臣と駆け上った。東大卒、純粋内部昇進大臣の第 1 号であり、日清・日露の戦時財政と戦後経営を担った官吏の一人である。また明治 21 年には財界の大立者、渋沢栄一の二女・琴子と結婚した。さらに財政学・経済学における理論的探求と実践的検証が評価され、明治 32 年に博士会より法学博士の学位を取得した。

阪谷の生き様に最も強い影響を与えたのは、幕末において尊王開国論の儒者として著名であった父親、朗廬(素)であろう。朗廬が督学を勤めていた備中国後月郡西江原村の興讓館は、一橋領代官が設立した郷校であるが、朗廬の名声によって水戸・弘道館、萩・明倫館とともに天下三学館のひとつと評されていた。のちに芳郎の岳父となる渋沢栄一との縁も、ここから始まる。

幕末には名声を博した朗廬であったが、洋学中心の明治ではきわめて不遇であり、芳郎が大学在学中に失意のなかで没した。朗廬の学識・名声にふさわしい阪谷家の再興は、妻・恭の厳しい教導のもとその子らに託された。しかし芳郎が渋沢琴子と結婚した頃までには、兄弟のすべてが没していた。阪谷家の家運隆盛は、まさに芳郎一人が担わねばならなかった。芳郎の気負いは、大蔵省から辞令を受け取った日の日記に「第一次出世」と記したことにも、また出仕後に戯れて作った「大蔵に過ぎたるものが二つあり 人の多きに阪谷の

智慧」という狂歌にもよく現れている。

見方を変えれば、朗盧が注目されたのは、厳格な幕藩体制が開港により動揺を増したからである。またその社会的遺産を引き継いだ芳郎が、出世の道を歩めたのも、明治政府が開設した高等教育機関という立身出世の回路に拠ったからである。阪谷親子は、江戸時代の瓦解のなかで、はじめて出世の機会をつかんだと言える。芳郎が国家の歩みを自らの人生と一体視できたのは、大蔵官吏として行財政の中枢にいたからだけではない。むしろ明治国家の成立が、芳郎の人生に数限りないチャンスをもたらしたからである。明治の時代とは、大なり小なりこうした人物たちによって支えられていたのである。日本は「世界各国に比較して見ると、貧乏な国である」、しかし経済的発達の条件は備えているのだから「経済の方法宜しきを得たならば、西洋各国で進むだけのことは、日本で進めないと云うことはない」(明治 25 年)という阪谷の信念は、日本と自らを重ね合わせた肉声であった。

自身も立身出世の極みに達し、明治日本も阪谷が望んだ「一等国」の仲間入りを果たした。大蔵大臣を辞任した阪谷は、意気揚々と明治 41 年(1908)に初の外遊を行い、続いて 44 年にも外遊するが、そこで欧米社会の物心両面での豊かさを改めて思い知らされる。とくに明治日本の精神的な荒廃に強烈な危機感をもった。「ただ物質文明において劣れるだけではなく、精神的においても大いに劣っている」「日本人には大和魂がある、これがある以上、日本国の生命は永遠だとある者は言う。しかし大和魂とは何かと問われたら、明確に答えることができないではないか」(『阪谷芳郎伝』 p 321、意識)

懸命に駆け上がってきた阪谷は、日露戦後に混沌としてきた明治社会に直面し、外遊を経て日本が失ったものの大きさを知った。そして自問自答のなかで廣池千九郎と出会い、日本の精神風土を根底から捉え直す。他方で日本は第一次大戦とともに輝きを急速に失い、国内外で迷走を始め、ついには阪谷のまったく手の届かない存在になっていった。

NHK「坂の上の雲」と「龍馬伝」から観るべきものは輝いた時代だけではない。むしろ輝いた時代のあとのあり方なのであろう。二度と舵取りを誤らないためにである。

『日本道経会 Fax 情報』164 号、2010 年 4 月 5 日

補論 3 戦前日本の経済道徳と廣池千九郎

佐藤政則

はじめに

この報告では、まず、戦前の日本社会において経済道徳論がどのように展開してきたのかを鳥瞰してみようと思います。その上で、廣池千九郎博士（以下、千九郎先生）の道徳経済論が、どのような位置に立つのか、その歴史的特徴は何かについて試論を提示してみたいと考えています。

ただ先に弱音を吐いておきます。これら二つの課題は、各々なかなか難しいのです。何より、依拠できる先行研究がないと言える位に乏しいのです。また、良く知られているように、千九郎先生の道徳経済論それ自体が、最高道徳論ほどには体系的に完成されたものではありません。それに加えて、私自身が千九郎先生によって「経済学においては産業組織に関するアダム・スミス流、およびマルクス流の利己主義本位の学説」（『道徳経済一体思想』増補版、p75）と全く否定されてしまった近代の経済学をベースに育ったものですから、千九郎先生の議論を正確に咀嚼できていません。ですから、このテーマで報告するのは、かなり無謀な試みなのです。

それでも敢えてやらねばと考えたのは、経済史・経営史の担当教員として麗澤大学に奉職した私が、このテーマを避けて通ったのでは、たとえ自分の狭い専門において業績を挙げ得たとしても、この大学にいた意味がない、と以前から考えていたからです。

当日の報告も、決して充分なものにはなっていませんが、胸をお借りするつもりで奮勇を振るって臨みたいと思います。

戦前日本の経済道徳を全体として鳥瞰するのは難しい？

日本の経済発展に目を転じて、洪沢栄一や報徳運動に関する研究、あるいは企業家史研究の成果はたくさんあるのですが、残念ながら、経済道徳の全体的な流れを鳥瞰できるものは見当たりません。問題の一つは、石田梅岩の石門心学、二宮尊徳の報徳思想、洪沢栄一「義利合一」説は、いずれも極めて重要なのですが、1910年代から激変していく国内外の環境にどう対応できたのかわからず、戦間期の経済道徳論との関係を付けることが困難なのです。二つには経済道徳のバックボーンとなる国民道徳の研究と経済道徳のそれとが遮断されていて、ここでも全体が展望できません。三つには企業家史研究の過半が、大企業の企業家・経営者を中心に進められていることから、広範な都市中小商工業家の道徳観念が見えてきません。同時にそこでは、経済道徳と経営道徳との分離・統合を検討するという視角も乏しいわけです。

このように、現在、私たちが共有できる先行研究には限界があるのです。

麗澤大学「東アジアの道徳経済一体論」研究会の発足

こうした現状をなんとかしたいと、私の他に麗澤大学の櫻井良樹さん、大野正英さんが中心となり大学・モラロジー研究所の有志を集め平成22年5月に組織したのが、「東アジアの道徳経済一体論研究会」（道経研）です。翌23年度から麗澤大学経済社会総合研究センターの研究プロジェクトとして採用され、本格的に活動を開始しました。24年度からは

メンバーも増員し継続的に研究会を行っています。今年は、思い切って、25年度の学外の競争的研究資金にも応募しました。

これまでの研究活動では、近代日本を軸に、幕末～明治前半における渋沢栄一の活動と儒教的経済道德論を中心に、報徳運動の組織的・内的変化を含めて、経済道德論の推移を検討してきました。その結果、下記のような方法的作業仮説に到達したわけです。

- ① 戦前日本における経済道德のバックボーンとなるのは国民道德論であり、その変容が重要となる。
- ② そのなかで国民道德論と微妙な関係を保ちながら各種の経済(実業、商業)道德論の潮流が生じる。
- ③ さらに経済学界や倫理学界を中心に展開されたマクロ経済的な経済道德論に対して、実業家ないし在野の啓蒙家によって主に中小企業家を中心に実践と経営的成功を重視する経営道德論の流れが生まれてくる。
- ④ したがって国民道德、経済(実業、商業)道德、経営道德の三位一体的視点から、経済道德論の自己変革のプロセスを解明せねばならない。

すでにお気づきかも知れませんが、上記の④は千九郎先生の「三方よし」の援用です。この観点に頑なに固執すれば、戦前の経済道德の展開も見えてくると思っています。

戦前日本社会の複雑さを反映して道德論も多様？

道経研での研究活動を通じてわかってきたことを、以下いくつか申し上げます。その第一は、戦前の道德論は非常に多様だということです。これは、日本社会の複雑さを反映したものと考えられます。

戦前において道德がどのように取り上げられていたかを大雑把にとらえるために、1875年(明治8)～1937年(昭和12)の『読売新聞』を対象に、「道德」の見出し検索をかけてみます。そうすると、「山陽鉄道德山」を含めて約1000件がヒットします。内容を問わず、主だった「**道德」を登場順に列記すると下記のようになります。()内は初出の年次です。

公衆道德(1875)	道德教育(1879)	対外道德(1890)	商人の不道德(1904)
実業道德(1906)	旧道德(1907)	性道德(1909)	商業道德(1909)
国民道德(1911)	工業道德(1911)	国際道德(1911)	新道德(1913)
都会道德(1914)	道德革新論(1915)	商工道德(1915)	農業道德(1916)
性的道德(1916)	社会道德(1916)	選挙道德(1917)	男女道德論(1917)
婦人道德(1918)	道德国(1919)	道德的帝国(1919)	電車道德(1920)
汽車道德(1920)	公民道德(1920)	性欲道德(1920)	東洋道德(1921)
個人道德(1921)	動物界の道德(1921)	湯屋道德(1921)	最高道德(1921)
道德哲学(1922)	交通道德(1922)	政治道德(1922)	衛生道德(1923)
非常道德(1923)	民族解放の道德(1923)	市民道德(1925)	医業の道德的基調(1925)童話
家道德(1926)	日本道德論(1926)	家庭道德(1926)	結婚道德(1927)

仏教道德(1927)	昭和の新道德(1927)	公衆閱覽道德(1927)	儒教の道德(1928)
広告道德(1929)	道德的威力(1929)	出版道德(1929)	植物界の道德(1930)
買物道德(1931)	東方道德(1935)	知識的道德(1935)	觀衆道德(1936)

一見して何の道德なのか、実にわかりやすいものと全くわからないものがあります。また単にマナーに近いものから、大変意味深いものまであります。その年だけの短命なものもほとんどなのですが、毎年のように新しい表現が生まれていることには考えさせられてしまいます。いずれにせよ、現代と異なり「道德」や「品性」などは極めて日常的に使用されていた言葉だと言うことです。

それと、経済系の道德表現についてですが、経済紙ではなく一般紙である『読売新聞』の場合、「経済道德」というのは登場しません。日露戦争直後になりますが、最初に使われたのは「実業道德」で、続いて「商業道德」、「工業道德」、「商工道德」、「農業道德」が使われていきます。長く使われるのは、貿易面から問題視された「実業道德」と「商業道德」です。これらでは事業の永続性という観点から、主に商人による利根的な荒稼ぎと工業者の粗製乱造が厳しく批判されています。なお、経済に重点を置いた雑誌や新聞では、『読売新聞』よりもう少し早い時期から高頻度で登場します。

一方で「国民道德」が頻繁に使われるようになるのは、1910年代に入る頃からです。第一次大戦を経た10年代の終わりには「道德的帝国」が登場するのも時代を反映しています。とにかく1910年代には、その後頻繁に使用される経済系の道德用語は出揃っていたわけですので、戦前の経済道德論は1910年代から本格的に使われるようになった、と考えていいのではないかと思います。ただし、それら用語の内容は多岐にわたります。それらの違いと変化については発表会でお話します。当日は、経済専門誌・紙の使われ方も含めて、もう少し立ち入ってご紹介し、流れを確認していきたいと思います。

戦前における実業家の社会的地位は低い？

道経研で考えさせられた第二は、日本社会における賤商意識の強さです。分限思想と鎖国思想から開放され、身分相応ではなく実力相応の明治になっても日本社会において賤商意識は根強いものがありました。安田財閥を築いた安田善次郎のエピソードですが、彼が1879年（明治12）に旧御三卿の一つであった田安家の屋敷を購入したときにも、「何事もひっくりかえる世の中や、田安の屋敷安田めが買う」と落首が出たそうです（矢野竜溪『安田善次郎伝』中公文庫、p140）。

実業家が社会的に認められていく指標として受爵をみてみましょう。最初の受爵は1896年（明治29）とかなり遅く、しかも三井高棟、岩崎弥之助、岩崎久弥と三井や三菱財閥の当主、3名だけでした。あの渋沢栄一でさえ1900年（明治30）なのです（永谷健『富豪の時代—実業エリートと近代日本』新曜社、2007年）。

経済活動を卑しむ社会意識は、商人（実業家）の社会的意識の低さと裏腹の関係でもありましたが、昭和に入っても大きく変化はなかったようです。1936年7月のモラロジー大阪講堂開校式において中田中氏は、「従来の古き道德とか信仰とかは経済を卑み清貧若くは枯渴生活に安んずる事を教ふ」と講話の冒頭で述べています（『道德科学研究所紀要』第

5号、昭和11年9月、p22)。経済、産業、富、財産を道德の対立物とみなす考え方が、一般的であったと言えます。

富や財産を求める事業活動が蔑まれる時代状況のなかで、道德と経済の一体を説き、三方よしの経営を語るということが、規模の大小に関わらず、様々な実業家にどれほどの勇氣と革新性をもたらすものであったのか、充分想像できると思います。自我の追求に過ぎなかった事業活動が、モラロジーを受け入れ実践することによって、日々の営みを変えることなく、社会的な意義を高め、国力増強に貢献できるわけですから、多くの悩める実業家は真から救われたことでしょう。

ここに私は、公益性・社会性を重視した渋沢栄一の「義利合一」説や実践性を重視した報徳思想とは異なる、千九郎先生の道德経済一体論の真骨頂があるように思いますが、詳細は発表会までお預けです。

経済学の時代的限界？

道経研で学んだ第三は、当時の経済学の限界という問題です。
国会図書館の蔵書を中心に、二宮尊徳と渋沢栄一に関する書籍を除いて、道德と経済を本格的に論じたものを挙げれば、漏れがあるかもしれませんが、次のものがあります。

永瀬一作『道德経済の調和』1910年／中島力造『道德と経済』1916年／
倉田熱血『戦後之道德と経済』1919年／田島錦治『経済と道德』1920年／
松尾音治郎『社会主義乎資本主義乎経済道德論』1932年／
廣池千九郎『道德科学経済学原論』1939年／山本五郎『経済道德』1941年。

このなかでも、京大教授であった田島錦治の『経済と道德』は、当時の経済学を縦横に使って道德と経済との一体的関係を、文字通り正面から論じた立派なものです。千九郎先生が、この本や田島の論文を読んでいたのかは、結局、わかりませんでした。ただ、大野正英さんによれば、かなり共通する用語や枠組みが見出されるようですので、田島の業績から少なからず影響を受けていたことも考えられます。

同時に、使っている経済学の限界（時代性）も感じました。道德と経済とは一体である、と経済学的に説くには、なにより富の分配が問題です。大方が納得できる分配でなくてはなりません。田島の経済学では、深刻化する富の偏在問題について有効な議論ができていませんでした。これでは道経一体の説明も困難で、おそらく社会主義経済学からの攻勢には対抗できなかっただろうと思います。もっともそれは、ある意味当然のことで、財政を通じた富の再配分、寡占・独占に対する規制、必要な場合の財政出動、企業社会での賃金制度等々、市場に委ねるだけでは解決しない問題について、経済学的な基礎が据えられるのはもっと後だからです。

経済学もまた時代の投映ですから、アダム・スミスに対する千九郎先生の批判には、ほとんど賛同できません。しかし、当時の経済学が充分に論証できない道德と経済の一体的関係を、それだからこそ経済学の枠組みを使わずに、最高道德論から論じられた試みはすさまじいと感じます。

千九郎先生の時代には経営学もまだ初期の段階であったと思います。千九郎先生が、「道徳と経済」と言われる場合の「経済」には、経済学的経済と経営学的経済とが混然一体になって入っていると考えられます。そうであるからこそ、国民道徳、実業・商業道徳（経済道徳）、経営道徳の三位一体的把握が可能になったと考えるのは、あまりにも飛躍でしょうか。

要旨としては、この辺でお仕舞にします。

もっと詳しく知りたくなった方は、是非、発表会で聴いてくださいな。

公益財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター

平成 24 年度研究発表会（平成 25 年 1 月 26 日）

『報告要旨』一部改訂

経済社会総合研究センター Working Paper 発行一覧

No.	発行年月日	題 名 / メンバー
1	2001/04/29	■品質を考慮した中古マンションの価格モデルの推定 [小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘]
2	2002/03/01	■国家の在り方に関わる基本問題 ―日本国家の戦略的危機管理を考える― [大貫 啓行]
3	2002/04/01	■首都圏中古マンション市場を対象とする品質調整済住宅価格指数の開発 ―市場の構造変化と指数の接続― [小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘]
4	2002/03/12	■日本のアイデンティティと外交政策 [ロナルド A・モース]
5	2002/03/15	■イスラムの拡大と21世紀の国際社会理解の為に ―イスラム拡大が引き起こす諸問題― [保坂 俊司]
6	2002/03/27	■地理情報システムでの利用を考慮した地域経済環境データベースの構築 [籠 義樹・高辻 秀興]
7	2002/03/31	■Real Options研究の現状 [高辻 秀興・小野 宏哉・佐久間 裕秋・籠 義樹]
8	2002/09/25	■技術革新と景気循環システム [永井 四郎]
9	2002/10/22	■地方自治体財政の現状分析 ―普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較― [佐久間 裕秋]
10	2003/03/06	■財政赤字、公債と家計消費 [中村 洋一]
11	2004/02/01	■地方自治体財政の現状分析 ―普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較― 平成12年度決算 [佐久間 裕秋]
12	2004/03/01	■デフレーション下の経済政策 [永井 四郎]
13	2004/03/20	■産学共同プロジェクト ～論理的企業風土確立に向けての組織改革～ [中野 千秋・山田 敏之・福永 晶彦・野村 千佳子・長塚 皓右]
14	2004/03/25	■私立大学財務の脆弱性と安定性 [浦田 広朗]
15	2004/03/25	■インフォーマルな金融システムの発展と政府の役割 ―「合会」（無尽）の発展における公的対応に関する日中比較研究― [陳 玉雄]
16	2004/03/25	■生命表形式による労働力と就業構造の分析：1987-2002年 [別府 志海]
17	2004/07/10	■日本ベンチャーキャピタル産業の発展プロセスとインプリケーション [李 宏舟]
18	2004/11/25	■Conjunct method of deriving a hedonic price index in a secondhand housing market with structural change [小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘]
19	2005/03/01	■地方自治体財政の現状分析 ―普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較― 平成14年度決算 [佐久間 裕秋]
20	2006/03/25	■Incorporating Land Characteristics into Land Valuation for Reconstruction Areas [小野 宏哉・清水 千弘]
21	2007/02/15	■土地利用の非効率性 ―東京都区部・事務所市場の非効率性の計測― [清水 千弘・唐渡 広志]
22	2007/02/18	■モンゴルにおける国際援助の経済効果、人口ボーナス [セリーテル・エリデネツール]
23	2007/02/20	■大正時代初期の宇都宮太郎 ―参謀本部第二部長として― [櫻井 良樹]
24	2007/03/31	■東アジアにおける企業家活動と地域産業の発展に関する研究 [佐藤 政則・陳 玉雄・連 宜萍・丘 紫昀]
25	2007/11/29	■Change in house price structure with time and housing price index ―Centerd around the approach to the problem of structural change― [清水 千弘・高辻 秀興・小野 宏哉・西村 清彦]
26	2007/11/29	■炭素税による温暖化対策の不確実性 [清水 透・小野 宏哉]
27	2008/03/31	■『人民日報』からみた「改革・開放」 ―中国の国際情勢認識と経済制度― [佐藤 政則・陳 玉雄]
28	2008/03/31	■中国の環境問題を考える [三瀧 正道・陳 玉雄・金子 伸一・汪 義翔]
29	2008/12/25	■近代日中関係の担い手に関する研究（中清派遣隊） ―漢口駐屯の日本陸軍派遣隊と国際政治― [櫻井 良樹]
30	2009/01/25	■Econometric Approach of Residential Rents Rigidity ―Micro Structure and Macro Consequences― [Chihiro Shimizu]

No.	発行年月日	題 名 / メンバー
31	2009/03/27	■日本の経営は“意欲的労働力”の創出によって効果的か – “理念共有化”仮説の提唱 – [大場 裕之]
32	2009/03/31	■サブプライム問題以降の大きな変化と世界経済、オバマ政権の経済外交政策 [成相 修]
33	2009/03/31	■「銭荘」の発展と衰退 – 「中国式銀行」の衰退要因に関する試論 – [陳 玉雄]
34	2009/04/13	■Investment Characteristics of Housing Market –Focusing on the stickiness of housing rent– [清水 千弘]
35	2010/02/01	■What have we learned from the real estate bubble? [清水 千弘]
36	2010/02/01	■Structural and Temporal Changes in the Housing Market and Hedonic Housing Price Indices [清水 千弘・高辻 秀興・小野 宏哉・西村 清彦]
37	2010/02/12	■日本の経営の海外移転は成功しているのか –職務意識による理念共有化仮説の検証：メキシコ進出日系M社工場の事例を中心に– [大場 裕之]
38	2010/03/31	■中国の社区を考える [汪 義翔・三瀧 正道・金子 伸一・陳 玉雄]
39	2010/03/14	■日本の雇用形態の多様化に関する研究調査 [成相 修・佐藤 純子]
40	2010/07/01	■Will green buildings be appropriately valued by the market? [Chihiro Shimizu]
41	2011/03/10	■緊張が増す朝鮮半島と日本 –「2010 東アジア共同体への課題」プロジェクト研究報告– [成相 修・金 泌材]
42	2011/03/31	■自動車リコール届出による不具合データの収集および整理 –報告書– [長谷川 泰隆]
43	2012/01/31	■内外国債市場と高橋是清：1897～1931 [佐藤 政則・永廣 顕・神山 恒雄・武田 勝・岸田 真・邊 英治]
44	2012/03/31	■中国における伝統的文化の再評価と産業化・国際化 [三瀧 正道・汪 義翔・金子 伸一・陳 玉雄]
45	2012/03/31	■市民の環境意識と環境配慮行動への取り組みの現状 –千葉県柏市の事例– [籠 義樹]
46	2012/05/01	■都市基盤整備財源はどのように調達すべきか？ –都市の老朽化への対応と開発利益還元– [清水 千弘]
47	2012/05/08	■売却／購入過程における住宅価格 – 募集価格と成約価格 – [清水 千弘・西村 清彦・渡辺 努]
48	2012/10/15	■Biases in commercial appraisal-based property price indexes in Tokyo – Lessons from Japanese experience in Bubble period – [Chihiro Shimizu, Kiyohiko, G. Nishimura, Tsutomu Watanabe]
49	2012/10/15	■Commercial Property Price Indexes for Tokyo – Transaction-Based Index, Appraisal-Based Index and Present Value Index – [Chihiro Shimizu, W. Erwin Diewert, Kiyohiko, G. Nishimura, Tsutomu Watanabe]
50	2012/10/15	■The Estimation of Owner Occupied Housing Indexes using the RPPI: The Case of Tokyo [Chihiro Shimizu, W. Erwin Diewert, Kiyohiko, G. Nishimura, Tsutomu Watanabe]
51	2012/10/15	■Office Investment Market Becoming More Selective – Selection of the Winning Market in Tokyo's 23 Wards – [Chihiro Shimizu]
52	2012/11/17	■住宅価格指数の具備すべき条件 –国際住宅価格指数ハンドブックの論点を踏まえて– [清水 千弘]
53	2013/01/01	■不動産投資リターンはどのように決まるのか？ –資産価格・不動産収益と割引率のマイクロストラクチャの推計– [清水 千弘]

[問い合わせ先]

〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1

麗澤大学経済社会総合研究センター

Tel:04-7173-3761 / Fax:04-7173-1100

<http://ripess.reitaku-u.ac.jp/>

掲載されている論文、写真、イラスト等の著作権は、麗澤大学経済社会総合研究センター及び執筆者にあります。これらの情報は著作権法上認められた場合を除き、無断で転載、複製、翻訳、販売、貸与などの利用をすることはできません。